資料

（平成十四年十月）

第四十七回「合宿教室」（江田島）感想文集

——日本人としての自覚をもとめて——

社団法人　国民文化研究会

合宿教室47回の歩み　累計参加が人員　一二・七七二名

回数	年　度	開催地	参加人員	主　要　講　師
1	昭和31年	霧　島	92	広田洋二・日下藤吾・川井修治
2	〃 32年	福　岡	127	竹山道雄・高山岩男・浅野晃
3	〃 33年	佐　賀	72	勝部真長・木下彪・森三十郎
4	〃 34年	阿　蘇	160	花田大五郎・中山優・野口恒雄
5	〃 35年	雲　仙	200	木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎
6	〃 36年	雲　仙	203	小林秀雄・木内信胤・津下正章
7	〃 37年	阿　蘇	215	福田恆存・木内信胤・黒岩一郎
8	〃 38年	雲　仙	202	竹山道雄・木内信胤・木下広居
9	〃 39年	桜　島	202	小林秀雄・広田洋二・木内信胤
10	〃 40年	大　分	215	岡潔・花見達二・木内信胤・夜久正雄
11	〃 41年	雲　仙	240	福田恆存・木内信胤・戸川尚
12	〃 42年	阿　蘇	336	林房雄・太田耕造・木内信胤
13	〃 43年	霧　島	353	竹山道雄・高谷覚蔵・木内信胤
14	〃 44年	阿　蘇	403	岡潔・木内信胤・木下道雄・奥田克巳
15	〃 45年	雲　仙	491	小林秀雄・木内信胤・桑原暁一
16	〃 46年	霧　島	302	村松剛・木内信胤・戸田義雄
17	〃 47年	阿　蘇	402	木内信胤・山本勝市・胡蘭成
18	〃 48年	雲　仙	433	村松剛・木内信胤・山口宗之
19	〃 49年	霧　島	528	小林秀雄・木内信胤・戸田義雄
20	〃 50年	阿　蘇	435	福田恆存・木内信胤・夜久正雄
21	〃 51年	佐世保	372	長谷川才次・村松剛・木内信胤
22	〃 52年	雲　仙	332	木内信胤・衛藤瀋吉・高木尚一
23	〃 53年	阿　蘇	440	小林秀雄・木内信胤・松本唯一
24	〃 54年	霧　島	268	木内信胤・高山岩男・山田輝彦
25	〃 55年	雲　仙	431	福田恆存・法眼晋作・宝辺正久
26	〃 56年	阿　蘇	353	齋藤忠・村松剛・青砥宏一
27	〃 57年	霧　島	321	齋藤忠・黛敏郎・幡掛正浩
28	〃 58年	雲　仙	327	齋藤忠・小堀桂一郎・長内俊平
29	〃 59年	阿　蘇	302	吉岡一郎・小堀桂一郎・加納祐五
30	〃 60年	阿　蘇	249	市原豊太・高村坂彦・小田村四郎
31	〃 61年	島　原	294	江藤淳・村松剛・小柳陽太郎
32	〃 62年	阿　蘇	269	小堀桂一郎・鈴木一・關正臣
33	〃 63年	島　原	227	児島襄・小堀桂一郎・加納祐五
34	平成元年	島　原	204	村松剛・山田輝彦・国武忠彦
35	〃 2年	阿　蘇	204	黛敏郎・小柳陽太郎・占部賢志
36	〃 3年	厚　木	244	田久保忠衛・国武忠彦・山内健生
37	〃 4年	阿　蘇	257	村松剛・平川祐弘・奥冨修一
38	〃 5年	厚　木	271	村松剛・佐伯彰一・白濱裕
39	〃 6年	阿　蘇	253	徳岡孝夫・小堀桂一郎・絹田洋一
40	〃 7年	厚　木	240	小川三夫・長谷川三千子・東中野修道
41	〃 8年	阿　蘇	171	竹本忠雄・伊藤哲夫・坂口秀俊
42	〃 9年	厚　木	213	西尾幹二・竹本忠雄・酒村總一郎
43	〃 10年	阿　蘇	193	小堀桂一郎・徳岡孝夫・志賀建一郎
44	〃 11年	富　士	178	井尻千男・長谷川三千子・山口秀範
45	〃 12年	阿　蘇	154	小堀桂一郎・東中野修道・布瀬雅義
46	〃 13年	富　士	150	伊藤哲夫・長谷川三千子・小野吉宣
47	〃 14年	江田島	244	中西輝政・山内健生・青山直幸

第四十七回〝合宿教室（江田島）〟全参加者の感想文と短歌詠草

とき　平成十四年八月八日（木）から十二日（月）まで四泊五日間

ところ　広島県「国立江田島青年の家」

参加総数　二四四名

目　次

〝はしがき〟に代へて　……理事長・上村和男…2

大学別参加者数・その他の人数の内訳　……5

〝合宿教室〟の日程表（四泊五日）……6

第47回〝合宿教室〟のあらまし　……7

走り書きの〝感想文〟と第二回目の〝短歌詠草〟……参加者全員…27

短歌詠草　……合宿中の創作作品　……参加者全員…115

あとがき　……152

カメラ・レポート28枚（29ページから85ページの左頁に掲載）

〝はしがき〟に代へて

上村和男
（本会理事長・㈱千代田コンサルタント相談役）

昭和三十一年（一九五六）に本会の第一回「合宿教室」が、鹿児島県・霧島で約百名の参加により開催されて、今年で第四十七回になる。世の中の変転にも拘はらず絶ゆることなく約半世紀近く営まれて来た。

今年は広島県の瀬戸内海に浮ぶ風光明媚な江田島の「国立江田島青年の家」で、八月八日から八月十二日までの四泊五日の「合宿教室」が行なはれた。

北は北海道から南は鹿児島まで参加総人数二百四十四名の学生・青年が集り、心のこもった合宿が営まれた。

毎朝、静かな海を望み、瀬戸内海に浮ぶ島々を遠くに眺めながら、潮風を肌にうけ、清々しい朝の空気を胸一杯吸ひ、国旗掲揚・国歌「君が代」を斉唱し、体操を行ひ、各々の参加団体の紹介が行なはれ、なごやかな雰囲気の中に日課がはじまった。

江田島は、はじめての開催地で不安であったが、多数の参加者が集ひ、祖国日本に思ひを寄せ、現在の大学の中の学問のあり方に疑念を抱き、お互ひ思ふことをうちつけに話し合ひ、祖国・人生を語り、なごやかな中にも真摯な交流が行なはれた。また、旧海軍兵学校跡にある教育参考館の見学においては、戦後教育の中で戦争を〝悪〟と教へられ「国家意識」をもつことも、「国家への忠誠心」も侵略戦争を起すものと教へられてきた若い人にとって同年代の特攻隊員の遺書・遺歌を目前にして激しく心を動かされ、これを契機に「日本の国柄」に思ひを寄せるといふ学問が開始された。数多くの感想文からも、その時の感動、若者らしい素直な心が読みとれるのである。

第二日目に御招きした講師の京都大学教授・中西輝政先生は「世界の中の日本の宿命」と題してご講義をされ、我が国の政・官・財の指導層をはじめ国民の大多数に危機意識が欠如してゐる現状を憂へて、日本はいま、三つの危機に直面してゐることを平易に語られた。その三つの危機とは「経済上の危機」「安全保障上の危機」「日本人の精神構造の崩壊の危機」を指摘され、「この危機の時代においては、国の運命と個人の運命が接近してくるので、正しく問題を認識すること、自己を確立すること、勇気をもって行動することの三つが求められる」と述べられ、福沢諭吉の「一身独立して一国独立する事」（「学問のすゝめ」）

といふ考へが日本人の多数派にならなければならないと強調された。

先生は「合宿教室」にはじめてのご出講であったが、講義時間が超過しても去り難いご様子で、参加学生の質問にもわかり易く丁寧にお応へになり、強い感銘を参加者に与へて下さった。予定がなければ一日残って皆さんと話し合ひたいと後髪を引かれる思ひで帰られたことは、この「合宿教室」への並々ならぬ期待がうかがへて実に有難いことであった。

第三日目は、本会副理事長・元九州造形短期大学教授・小柳陽太郎先生による講義「明治の精神―東洋と西洋の視点から―」の中で先生は安政七年～万延元年（一八六〇）日本修好通商条約批准書交換のため渡米した使節団の副史・村垣淡路守範正の「遣米使日記」を引用され、米国大統領に謁見した折の堂々たる態度を述べられた。国家を背負っての真摯な態度での交渉の姿が彷彿として浮かんでくるご講義で、日本人の魂を感じさせられた。そして、岡倉天心の「東洋の目覚め」「東洋の理想」に触れられ、ヨーロッパの東洋侵略に対して、警鐘を鳴らし続けた天心の真意を述べられ、「アジアの兄弟姉妹よ、われわれは、さまざまな理想のあいだを長い間さまよってきた。さあ現実に目覚めようではないか」（「東洋の目覚め」）を引用され、明治に生きた先人の心意気を真剣に訴へられた。天心と親交のあったタゴールの「東洋文化と日本の使命」の講演の一節の「日本がしっかりすればアジアはまとまる」を挙げられて、明治に生きた天心の、国を憶念する魂をお話しされ、最後に、明治天皇の御製を拝誦され、日本の国の姿の変らざることを信じ、明治の精神を心から知る思ひであった。先生のご講義は明治人の生き方を知るよすがとなり参加者に多大の感銘を与へると同時に、現在の日本の近隣への謝罪外交等「国家意識」を失なってゐる現状に対して改めて深刻な危惧を抱いたのである。

さて、この「合宿教室」では班別研修や和歌相互批評を通じて、自己主張や知識の披瀝に終ることなく、他人の意見を謙虚に心を傾けて聴き、相手の意見を尊重し、お互に心を通ひ合せながら友情を深めてゆくことに意を注いでゐる。四泊五日の起居を共にすることで見ず知らずの友が心を開いて、真の友情の世界が実現されてゆく。かうした基本的な人間生活の営みが現今の学生生活の中にも社会生活の中でも最も忘却され、他人のことを意に介せず自分本位の生き方がまかり通ってゐることは残念でならない。合宿生活を体験することで、国に自分が繋がってゐることを考へ、他人の心を大切にする情念が湧いてくることを自ら感ずると共にいざとなれば国の為に生命を捧げるといふことが如何に大事なことであるかと理解されたことと確信

する。

ところで、北朝鮮による日本人拉致事件の被害者である有本恵子さんのお母様が「今日まで国家と政府を信頼して生きるやうに教へられて来たが、今は国家も政府も信頼できない。何を頼りにすれば良いのか」と涙ながらに語ってをられた悲痛な姿が目に焼きついて離れない。現在の日本は国民の生命・財産も守れない国の姿になってしまった。この悲劇の元凶は、合宿中も再三指摘された通り占領政策による一方的な論理で貫かれた「東京裁判史観」であり「平和憲法」である。少くとも憲法の前文と第九条の交戦権の改正をしない限り、日本人の中に「国家意識」は甦って来ない。まして、国民の生命・財産も守れるとは思へない。真の意味での主権国家になるために速やかに憲法を改正すべきと思ふ。

なほ、こゝに編したこの「感想文集」は、参加者全員が帰りぎはの走り書きで意を尽くせないところもあるが、いまの日本のただならぬ行き詰り状況に当面してゐる中で、精魂を傾けて過ごした合宿での経験を書きとめてくれたものである。紙面の都合上全文をそのまま載せ得ないことは残念だが、なにとぞご容赦いただきたい。

この文集全体の編集に、十余名の会員（編集後記に記載）が休日や終業後の時間をさいて取組んでくれた。また、この合宿を運営して下さった運営委員長の寶邉矢太郎さんをはじめ、運営委員の方々、指揮班長の鳥生秀雄さんはじめ指揮班の方々の御苦労にも心から感謝申し上げたい。

また最後になりましたが、この合宿事業を行なふに当り、本年もまた、朝野からお寄せ下さった得難い御支援の数々に対し、会員一同に代り、心から厚く御礼申し上げます。

来年（平成十五年）の「第四十八回合宿教室」は、八月七日（木）～八月十一日（月）までの四泊五日間「富士のさと・国立中央青年の家」（静岡県御殿場市）で開催することが決定「合宿運営委員長」には熊本市役所勤務の折田豊生氏（五十三才）を煩はすことになりました。改めて会員各位の格段のご協力をよろしくお願ひ申し上げます。

第47回全国学生青年合宿教室夏季セミナー（平成14年８／８～８／12）於「国立江田島青年の家」

参加者

（学生班　四十八大学）（洋数字は参加学生数）

北海道大1　北海道医療大1　東北大1　東北女子大4　東北女子短大2
宮城学院女子大2　明星大2　麗澤大1　恵泉女学園大1　筑波大1
中央大2　亜細亜大4　慶應大4　東京大1　國學院大1　東京理科大1
学習院大1　杏林大1　明治大3　電気通信大1　上智大1　日本体育大1
防衛大2　早稲田大4　人間環境大2　皇學館大3　京都大2　京都産業大1
関西大1　関西学院大1　鳥取大1　島根大1　愛媛大1　九州大2
九州工大6　人間総合科学大1　九州ルーテル学院大1　日本不動産学院2
福岡大1　福岡工大1　福岡女子大2　九州共立大1　佐賀大1　熊本大2
中村学園大1　熊本学園大1　宮崎医科大1　首都師范大（北京）1
高校卒2

計　八十二名（うち女子二十二名）

（高校生班）　五名

（社会人・教員参加者）　五十六名（うち女子十一名）

（招聘講師）　一名

（国民文化研究会）　七十九名

（事務局）　十名　**（写真）**　一名

（見学参加者）　十名

総計　二四四名

㈳国民文化研究会・大学教官有志協議会　主催

第47回（平成14年）“全国学生青年合宿教室”日程表

	8月8日（木）	8月9日（金）	8月10日（土）	8月11日（日）	8月12日（月）	
6：30		（起床） 洗面・清掃	（起床） 洗面・清掃	（起床） 洗面・清掃	（起床） 洗面・清掃	6：30
7：00		（7：00） 朝の集ひ （国旗掲揚・国歌斉唱、体操） 班別散策 朝食	（7：00） 朝の集ひ （国旗掲揚・国歌斉唱、体操） 班別散策 朝食	（7：00） 朝の集ひ （国旗掲揚・国歌斉唱、体操） 班別散策 朝食	（7：00） 朝の集ひ （国旗掲揚・国歌斉唱、体操） 班別散策 朝食	7：00
8：00		（8：30） 短歌創作導入講義 福岡市立香椎小学校教諭 是松 秀文 先生	（8：30） 講義 「明治の精神」 国民文化研究会副理事長 小柳 陽太郎 先生	（8：30） 講義 「日本の国柄」 拓殖大学講師 山内 健生 先生	（8：30） 清掃 （9：30） 合宿を顧みて 国民文化研究会会長　小田村四郎氏 合宿運営委員長　宝辺矢太郎氏	8：00
9：00		（9：30） レクリエーション カッター体験 短歌創作	（10：00） 質疑応答 （10：30） 班別研修	（10：00） 班別研修	（10：00） 参加者による 全体感想自由発表 （11：00） 感想文執筆及び 第二回短歌創作	9：00
10：00		（12：00） 昼　食 （短歌提出）	（12：00） 昼　食 （1：00） 参考館紹介 防衛庁技官 山根 清 氏	（12：00） 昼　食 （1：00） 創作短歌全体批評 戸田建設㈱開発課長 青山 直幸 先生	（12：00） 閉会式 （挨拶）国民文化研究会副理事長 大日本園藝㈱常務取締役 磯貝 保博 氏 （1：00） 昼　食 解　散	11：00 12：00 1：00
11：00	随時受付 （3：00） 開会式 （挨拶）国民文化研究会理事長 上村和男氏 オリエンテーション （合宿趣旨説明） 合宿運営委員長　宝辺矢太郎氏 （諸注意伝達） 合宿指揮班長　鳥生 秀雄氏 （4：30） 班別自己紹介 事務連絡打ち合せ	（2：00） 講義 「世界の中の日本の宿命」 京都大学教授 中西 輝政 先生 （3：30） 質疑応答 （4：00） （記念写真撮影） 班別研修	（2：00） 野外研修 教育参考館見学 短歌創作	（2：00） 短歌相互批評 （短歌再提出）		2：00 3：00 4：00 5：00
6：00	（5：30） 夕　食 入　浴 休　憩	（5：30） 夕　食 入　浴 休　憩	（5：30） 夕　食 入　浴 休　憩 （短歌提出）	（5：30） 夕　食 入　浴 休　憩		6：00 7：00
8：00	（7：30） 合宿導入講義 住友電気工業㈱生産技術部長 布瀬 雅義 先生	（7：30） 輪読導入講義 「吉田松陰の『士規七則』」 亜細亜大学教授 東中野 修道 先生	（7：30） 講話 元高千穂商科大学教授 名越二荒之助 先生 （8：30） （慰霊祭の説明）奥冨修一氏	（7：30） 体験発表 亜細亜大学職員 平樋 明人 氏 日章工業㈱社長 藤新 成信 氏 （8：30）		8：00
9：00	（9：00） 班別研修	（9：00） 班別輪読	（9：00） 慰霊祭 （9：30） 班別懇談	夜の集ひ （10：00） 班別懇談		9：00 10：00
10：00	（10：30） 就床 （11：00） 消灯	（10：30） 就床 （11：00） 消灯	（10：30） 就床 （11：00） 消灯	（10：30） 就床 （11：00） 消灯		11：00

＊社会人短縮コース……集合８月９日午後１：30
　　解散８月11日午後４：30

第四十七回〝合宿教室〟のあらまし

第一日目　（八月八日・木曜日）

第四十七回全国学生青年合宿教室は、広島県江田島町「国立・江田島青年の家」において開催された。江田島は、我が国近代史に燦然と光を放つ幾多の人士を輩出した旧海軍兵学校があった土地であり、ここでの合宿開催は初めてである。瀬戸内を遠く望む小高い山の木々の緑に囲まれた素晴らしい環境のもとで、四泊五日の合宿教室はスタートした。北は北海道から南は九州に至る全国各地から学生・社会人が次々と参集した。おのおの受付を済ませると宿泊棟の各班室に入り、初めて顔を合はせる班員たちと挨拶を交はして、直ちに開会式に臨んだ。

開会式

早稲田大学法学部二年・高木雅史君の開会宣言の後、国家斉唱に続いて、祖国日本のために尊い命を捧げられた全ての祖先の御霊に一分間の黙祷をささげた。ついで主催者を代表して本会の上村和男理事長は「間違ってゐることに対し論戦を避ける風潮は、外交においては国益を守らうといふ気概の欠如につながり、隣国に迎合するといふ憂ふべき事態を招いてゐる。祖先が国の為に歩んだ道を辿りながら、国を愛することから各々一歩をはじめよう」と呼びかけた。続いて、参加者を代表して筑波大学大

学院二年・寺澤知之君は「自分の思ひや考へを互ひにぶつけ、それを真剣に受け止めてくれる仲間がゐるといふ喜びを体験しよう」と挨拶した。

合宿導入講義　「自分の目で世界を見よう　自分の心で歴史を感じよう」

住友電気㈱生産技術部長　布瀬雅義先生

先生はまづ製造現場での製品不良対応の御体験を踏まへて、「先入観でものを見たり既成の理論に安住するのではなく、事実を見て自分の頭で考へることが仕事のみならず全ての基本です」と述べられた。次に中学校歴史教科書の記述につき、「台湾は日本の『植民地』だったのだらうか」「台湾は『中国の一部』だらうか」と問題提起され、日本統治時代の民生向上の諸例を挙げられた。それら発展の基礎が「公」の感覚を養ふ「国民教育」にあり、それは日本統治開始と同時に創立された伊沢修二らの芝山巌学堂に始ることを説かれ、民族こそ違へ同じ国民同胞として遇するといふ信念のもと、彼の地に渡った教育者達の受難と苦闘を紹介された。そして、李登輝前総統が述べた、今日の台湾の繁栄と民権の実現が日本統治下の教育に負ってゐること、そしてその「台湾経験」が全中国に広まれば共産党独裁政権も解消していくだらうといふ旨の言葉を紹介されつつ改めて、自分の目と心で歴史を感じるやうに努めようではないかと訴へられた。

講義終了後、参加者は各班室に戻り、導入講義について班別研修を行った。まづ皆で講義内容を正確にたどりながら、講師の最も伝へたかったこと、重要なことは何かを話し合ひ、さらに班員一人一人がどのやうに受け止めたかについて、話し合ひが進められた。なほ、この班別研修は、以後の各講義の後に続いて行はれた。お互ひに初対面のせゐか、最初は緊張して意見も少なく、発言も限られてゐたが、班員がお互ひに打ち解けるに従ひ、次第に討論も活発となり、時には反論し、時には共感し合ひながら、班員相互の心の交流が深められていった。

第二日目　（八月九日・金曜日）

合宿の日程は「朝の集ひ」から始まる。今合宿の「朝の集ひ」は、「青年の家」の合同の朝の集ひに参加して、他団体と共に行はれた。すがすがしい空気の中、国旗掲揚の後、体操を行って、一日の研修を新たに迎へた。

なほ、合同の集ひのあと、合宿参加者には和歌が印刷された一枚の短冊が配布され、その和歌の拝誦と紹介が行はれた。

紹介された和歌は次の通りである。

二日目（八月九日）

明治天皇御製

をりにふれたる

おもふこと思ふがままにいひてみむ歌のしらべになりもならずも（明治四十五年）

三日目（八月十日）

源　実朝

ながめつつ思ふもかなし帰る雁行くらむかたの夕ぐれのそら

四日目（八月十一日）

丈部稲麻呂（万葉集・巻二十）

父母が頭かき撫で幸くあれていひし言葉ぜ忘れかねつる

五日目（八月十二日）

松吉正資（昭和二十年、戦死）

ゆく身にはひとしほしむるふるさとの人のなさけのあたゝかきかな

短歌創作導入講義

福岡市立香稚小学校　是松秀文先生

初めに先生は短歌を作る意義を説かれ、万葉集の歌を引きつつ特に日本の伝統につながることを強調された。次にビデオ映像を交へながら、作歌上の留意点を説明され、特に先生は、重ひがあふれる場合は連作とすることを説かれた。他界されたお父様のことを詠まれた連作四十数首のうちの一部を紹介しつつ、深い思ひを「歌ひ晴らす」ことの体験を語られた。最後に、短歌は日常生活で活かされてこそ真価を発揮するものであるから、お互ひに歌を送りあふことを勧められた。

レクリエーション

講義後、心待ちにしてゐたレクリエーションの時が来た。参加者は浜辺散策組とカッター研修組に分れた。浜辺散策組はカッター研修施設付近の浜辺をそぞろ歩きし、合唱したり沖のカッター研修組を遠く眺めながら時間を過した。カッター研修組は先づ、カッター格納倉庫前の広場に、指導教官に相対し、班毎に整列した。研修は参加者の安全を気遣ふ故の教官の叱声で始った。それまで参加者を包んでゐた弛んだ空気が一変した。教官の号令の下皆きびきびと動き、各号挺毎に沖へ漕ぎ出して行った。海上では教官の指導の下かけ声を掛け漕ぐうちに、皆の気持ちが合はさってきて、始めは揃はなかった櫂も揃ふやうになり、カッターは面白いやうに水面を進んだ。時折勢い余って裏返る漕ぎ手も出る中、賑やかで楽しい一時を過ごすことができた。散策、研修後合宿地に戻った参加者は、これまでの時間を過ごす中で感じたことを思ひ返しつつ短歌創作に集中した。

講義

「世界の中の日本の宿命」

京都大学教授　中西輝政先生

冒頭、いま日本は三つの危機に直面してゐるとして先生は、「経済上の危機、安全保障上の危機、日本人の精神構造の崩壊の危機」を指摘された。

戦後の日本は、国として自分自身をきちんと守れる構造になってゐない。わが国の周辺で安全保障上の危機が起りうる構図が強まった状況のもとで、国自体の存立が危ぶまれる。犯罪率の上昇、教育の崩壊などの社会問題について、その危機的状況を詳しく分析された。

「この危機の時代においては、国の運命と個人の運命は接近するはずで、正しく問題を認識すること、自己を確立すること、勇気ある行動をとることの三つが求められる」と述べられた。この三つは、国の在り方としても重要であり、「福沢諭吉のいふ『一身独立して一国立つ』といふ考へが日本人の多数派にならなければならない」と強調された。

またわが国で八十年代後半から言はれるやうになったグローバリゼーションについて、「日本人は世界のどの国にもない間違った理解をしてゐる」と述べられた。「日本人はグローバリゼーションが史上初めてのことであって、いつまでも続くと考へ、グローバル化が進めば国家は存在価値を失ふと考へてゐるが、これは誤解である。いま世界は第三次グローバリゼーションが終らうとしてゐる。二十一世紀は文明が原点に回帰していく時代になるだらう」と指摘された。

最後に先生は、「戦後の日本は物質と精神のバランス、進歩と伝統のバランス、私と公のバランスを失った。若い世代の諸君はこれを正す宿命を背負ってゐる」と述べて講義を締めくくられた。

輪読導入講義

「吉田松陰の『士規七則』」

亜細亜大学教授　東中野修道先生

初めに先生は、吉田松陰の思想について触れ、松陰は尊王攘夷の志士であり、後に明治維新といふ大きな流れを弟子達が形成していくが、その原点であったと述べられた。また、鎖国の掟を破り、留学を企てた松陰に対して、後にペリーが「命がけで知識を得ようとするこの青年は、激しい知識欲と激しい好奇心とを持つ日本人の特質から現れたのであり、またこれは氷山の一角に過ぎず、その氷山の下には、二人目三人目の吉田松陰が続いてゐる」と評してゐたことも紹介された。そして『士規七則』は、海外渡航に失敗して、萩の野山獄に入れられた松陰が、従弟の玉木彦介の元服に際して、武士としてどのやうに生きるべきかを書き贈ったものであると解説された。

講義の中で先生は、薄っぺらい知識の取得（知的理解）とは別に、自分の体験に照らして、ああなるほどさうだなあと合点する、さういふ知り方（体験的理解）があるといふことを指摘されたが、このことは、そのまま、参加者が文章を辿っていくにあたっての心構へをも示されたものであった。また、人は繋りの中に生き、生かされ、そして死んだ者とも繋って生きてゐるといふことが、他の動物との決定的な違ひだ、といふことを松陰の文章から考へさせられると語られ、私達は現世における兄弟、友人、夫婦といった横軸と、歴史といふ「生命」の縦軸とに繋って生きてゐることを自覚する必要があると語られた。そして、歴史を繋ぐ先人の言葉といふものが、私たち現代日本人の精神構造を形作っていくのであると述べられた。

班別輪読

講義の後、参加者は各班に分かれて輪読研修を行った。東中野先生のご講義を振り返りながら、紹介された士規七則の文章を、

皆で声に出して読み味はっていった。幕末動乱の時代に生きた吉田松陰の言葉に直接ふれて、松陰の志や思ひを偲び、感じとることができる貴重なひとときであった。

第三日目　（八月十日・土曜日）

講義　「明治の精神」――「東洋と西洋」の視点から――

国民文化研究会副理事長　小柳陽太郎先生

先生は、まづ初めに、安政七年／万延元年（一八六〇年）日米修好通商条約批准書交換のため渡米した使節団の副使、村垣淡路守範正の『遣米使日記』をテキストにして、「皇国の光」を輝かせる使節としての使命感、米国大統領に謁見したをりの堂々たる態度、細やかで謙虚な観察ぶりなどが紹介された。ホイットマンの詩など、アメリカ人の目に映った使節団の姿が資料を通して示された。

ついで「アジアにおける日本の使命」が述べられた。阿片戦争以後のヨーロッパによる一連の東洋侵略が想起され、それに触発された岡倉天心の思想が語られた。そして天心の『東洋の目覚め』『東洋の理想』『日本美術史』に触れて、「アジアの栄光は…帝王と農夫とを合一させるあの調和の中にある」「生命は、つねに、自己への回帰のなかに存する」といふ言葉に特に意を留めるべきを喚起された。また天心と親交のあったタゴールの「東洋文化と日本の使命」といふ文章を挙げて「すべての民族はその民族自身を世界に現はす義務を持ってゐます」といふ箇所を引きながら、「日本にはすべてのものが集まる」「日本には仏儒が生きてゐる」と述べられた。そして「日本がしっかりすればアジアはまとまる」と語られた。それは日本がアジアの盟主であるという傲慢な考へではない。明治の精神にはもともと傲慢さはなかったと指摘された。

そして明治天皇の御製に大らかな「明治」を仰いで、御講義を閉じられた。

教育参考館紹介

防衛庁技官　山根清氏

氏は海洋国家である日本が近代的海軍を創設した原因はペリーの黒船来航にあったとして、これから見学する教育参考館について説明された。海軍ゆかりの人物として、東郷平八郎元帥、広瀬武夫中佐、佐久間勉大尉を紹介され、人間魚雷回天の創始者である黒木博司大尉と仁科関夫中尉についても語られた。最後にビデオ「天翔ける青春」の一部を映して、回天特攻隊の塚本太郎少尉の肉声を紹介した後、五十七年前の当時の青年学生が祖国を信じ、日本の将来のために命を捧げられたといふ事実を、我々は偲ぶ必要があるのではないかと指摘され、説明を終へられた。

講話　「世界に生きる日本の心」―永久生命の系譜―

元高千穂商科大学教授　名越二荒之助先生

先生はまづ、学徒出陣し沖縄海域で戦死された松吉正資さんの文章や和歌を引用しつつ、戦時下の学生の心情と思想について自らの体験を交へつつ紹介された。「松吉さんは大変優秀な方だった。特攻隊に加はり戦死された。あの人を知る者は少なくなったが、今日これから行ふ慰霊祭の場では松吉さんのやうな方がゐたことをぜひ偲んで欲しい」と語られた。次に「特殊潜航艇でシドニー軍港を奇襲して戦死した松尾敬宇大尉に対して、オーストラリア海軍は大尉の愛国心に敬意を表し、海軍葬を執り行った。戦後、その地を訪れた松尾大尉の母親は大歓迎をうけ、一方母親は戦争中にも拘らず海軍葬で弔ってく

れたことに感謝した」といふ交流譚が紹介された。そして、いまは海底に眠る戦艦大和のありし日の号砲の録音が講義室に流された。

慰霊祭

慰霊祭に先立って、奥冨修一理事が慰霊祭の次第を説明した。雨も慰霊祭の直前になるとぴたりとやんだ。長内俊平理事が和歌朗詠を行ひ、今林賢郁副理事長が祭文を奏上した。次いで折田豊生理事が御製を拝誦し、主催者国文研の上村和男理事長、後援の産経新聞佐伯宏明氏、宝辺矢太郎運営委員長により玉串奉奠がなされた。そして一同拝礼後「海ゆかば」を斉唱した。かつて江田島に学んだ英霊達との感応交流が実感されるやうな荘厳な雰囲気の中で慰霊祭は終了した。まもなくして堰を切ったやうに大雨が降り雷鳴が轟いた。

左は奏上された「祭文」と拝誦された「御製」である。

祭文

われらここ波静かなる瀬戸内に浮ぶ江田島に集ひ　第四十七回全国学生青年合宿教室を営みてはや三日目の夜を迎へぬ
真昼間の射指すが如き夏の陽はかくろひ　今し天つ日は沈みて夜のしじまに包まれし今宵平成十四年八月十日　涼風さやけき集ひの広庭を斎庭と定め　きよめまつりて　とこしへにみ国守ります遠つみ祖たち　またみ国のために尊きいのちを捧げまししし　いくたのはらからたちのみ前に　ささやかなれども海の幸・山の幸くさぐさの品をそなへまつり　み霊なごめの

み祭仕へまつらむとす

み国いまだならぬさまにさまよひつづけ　み国の内外憂ふべきまがごと数々おこりてみ国のゆくていよよ険しく　いまにしてこのさま正さずば悪しきけはひさらにしげくなりゆき　み国まことに危ふしと胸ふたがれ憂ひいやますばかりなり

顧れば過ぎし大御軍に敗れし後　思想混迷を極めたる時代に　わが大君にもろともにまめやかに仕へまつらむと誓ひ　またみ国のいのちとことはならむを祈りていとなみはじめたりし合宿教室は　はや四十あまり七つの回を重ねたり　いまこの江田島にくぬちより集ひ来りし友らはみ国の内外にみてるまがごとのことごとを打ちはらひ正さむと講義の聴講に　班別討論　古典輪読はたまた和歌の創作に　むらぎもの心かたむけ力合はせて学びつとめきたりぬ　ここに集ひしわれらはみ国のゆく末を思ひつつ行かむとする道はよしけはしくも　われらもろともに　おのもおのもみ国まもらむ心を定めんと　かたみに心を開き語りかはせば　われらの心はやうやく友の心に通ひはじめんとし　われらのいのちは　ただちにみ祖たちのいのちにつらなりてあるを覚ゆ

さはあれど　われらはわれらの努めなほいたらぬを嘆き　われらのまことなほ足らはぬを恥ぢつつ　いまよりは　いよよ心合はせて共に世に立つべき友となりみ祖たちにつらなりて言霊の幸はふこの美しき大和島根を　とことはに栄ゆかしめむと誓ひまつらむ　天がけります汝みことたちのみ霊よ　われらの足らはぬ心のうちをうつしくみそなはし給ひわれらが願ひを導き給へ守らせ給へと　第四十七回全国学生青年合宿教室参加者一同に代はり　今林賢郁　謹み敬ひ恐みも白す

平成十四年八月十日

御製拝誦

明治天皇御製

友

もろともにたすけかはしてむつびあふ友ぞ世にたつ力なるべき

仁

國のためあたなす仇はくだくともいつくしむべきことな忘れそ

誠

言の葉にあまる誠はおのづから人のおもわにあらわれにけり

大正天皇御製

雷

鳴神のおと近づきぬ山のはに一村雲の立つとみしまに

行路蟲

村雨のすぎし野道をわけくればくれぬさきより蟲ぞなくなる

夜雨

降る雨の音さびしくも聞ゆなり世のこと思ふ夜はのねざめに

昭和天皇御製

ともしび

港まつり光りかがやく夜の舟にこたへてわれもともしびをふる

千鳥ケ淵戦歿者墓苑

國のため命ささげし人々のことを思へば胸せまりくる

聲

日日のこのわがゆく道を正さむとかくれたる人の聲をもとむる

今上天皇御製

一年を顧みて

豊年を喜びつつも暑き日の水足らざりしいたづき思ふ

阪神・淡路大震災

なゐをのがれ戸外に過す人々に雨降るさまを見るは悲しき

英国訪問

戦ひの痛みを越えて親しみの心育てし人々を思ふ

第四日目　（八月十一日・日曜日）

講　義

「日本の国柄」―先祖の善悪は子孫の請取人次第―

拓殖大学講師　山内健生先生

冒頭、先生は「日本の国柄」などと言ふと今日では縁遠い感じがするかもしれないが、戦後的思ひ込みから離れて自由に、伸びやかに考へるとおのづから身近にその真姿が現はれるのであって、それを妨げるヴェールが幾重にもあるとして、竹本忠雄先生のお言葉を引用された。

それは独立国に必要な三つの自由すなはち①自国の防人をもって自国を守ること、②自ら教育したいように子弟を教育すること、③自ら祀りたいように自分たちの神々を祀ること、である。しかし悲しいかないづれの自由もわが日本にはなく、国の基本を考へることがおろそかにされてゐることを強調された。

今日の日本では教育現場において戦後体制を「平和的な国家」「民主的な国家」と美化するばかりである。そこにはそれ以前の日本を貶めて国家の連続性を断つといふ寓意があると指摘された。「平和的民主的な国家」ではなく「歴史的な国家」の視点から見れば憲法第一条の意味するものも見えてくるはずであるとして、これまでの日本の歴史を事実に即して静かに振り返る必要を訴へられた。今上天皇は第百二十五代であり、いまも初代の神武天皇の祭祀を続けてをられる。万世一系の精神の系譜は事実であって、興亡激しいシナの王朝交替の歴史と対比しつつ、古代的なものが現代にまで連綿として続く日本の国柄の重みを強調された。

さらに皇室のご先祖を祭る伊勢神宮の式年遷宮を例に絶えることのなかった日本の君臣一体の姿に思ひをいたせばおのづと日本の国柄も納得できるはずだと語られた。

創作短歌全体批評

戸田建設（株）開発課長　青山直幸先生

先生は、万葉の昔から国民すべてが短歌に親しみ、互ひに詠み交はすことによって心を通はせてきたが、相互批評においてはまづそれぞれの歌をよく味はってほしいと前置きされた後、全体批評に移られた。各班から一首を選んで丁寧に添削されながら、「自分の思ひを見つめ、感動を具体的に正確に表現するやう努力することが大切である」と指摘された。また、「班別批評では、作者の気持ちを汲み取り、より的確に表現するにはどのやうな言葉が良いか、皆で知恵を絞ることが必要である。自分一人では気づかなくても、班員同士が心を一つにして助け合へば、より正確な表現に辿りつくことができる」とお話になり、夜久正雄先生の詠まれた「お互ひに歌の過ち正しつつ和(なご)む心よ何にたとへむ」といふ歌を紹介して講義を終へられた。

短歌相互批評

全体批評の後、班別短歌相互批評が行はれた。歌をつくったのは初めてといふ参加者が多かったが、皆、一人一人の歌に心を寄せて、作者の思ひに沿った正確な表現を求めて心を砕いていった。人の思ひを正確に受け止めること、自分の気持ちを伝へることが如何に難しいかを実感させられた。内心の思ひを十分に歌に表現できた時、大きな感動が生まれる。お互ひの心が通ひ合ふ充実したひとときであった。

体験発表

亜細亜大学情報システム課長の平槇明人氏は、まづ連歌によって精神を鍛練した三島水軍の話をされた。次に、「遺憾ながらも国際社会は未だ力が正義である」と指摘され「ゆとり・個性・生きる力」をキーワードとする最近の教育思潮を批判しつつ、「きびしい国際競争に勝ち抜くためには初等教育でしっかり勉強させ、精神の鍛練・修養をも身につけなくてはならない」と述べられた。またポール・リシャールの「日本の兒等に」の詩を例に挙げ世界が我が国に抱く大いなる期待を述べ、「事実・史実を把握して世界の期待を裏切ることなく前進しませう」と力強く呼びかけられ、最後に「皆さまは全世界から・ご両親から・国民から・英霊から期待されてをります。皆さまの一層のご努力をお祈り申し上げます」と訴へられた。

次に登壇された日章工業（株）社長、藤新成信氏は、三年前にお父上の跡を継ぎ経営者となられてからの胸中の思ひを「学問と人生」といふ合宿のテーマに沿って語られた。聖徳太子の十七条憲法第一条の「君父に順はず」といふ言葉を引きつつ、父亡きあと、一人になって初めて自分が何のために生きてゐるのかをしみじみと思ふ中で、今までの生意気で自分勝手な気持ちから父の言葉を軽んじてゐた自身の未熟さが悔まれたことを語られた。そのやうな体験を通して、社員達と手を取り合って会社がやっていけることが何より大事なことで、それに全力を傾けていけば何にも怖いことは無いと深く実感するやうになり、あちこちで心の争ひが起きてゐる今こそ、皆と「上和らぎ下睦びて」本当の心のつながりを取り戻すことが必要ではないか。その時に初めて本当に力を発揮することが出来ると述べられた。

夜の集ひ

厳しい日程を送つてきた合宿教室も最後の夜を迎へ、「夜の集ひ」は屋外で篝火を囲んでのキャンプファイヤーとなった。皆、それまでの日程で続いた内省の重圧を跳ね返すかの如くここぞとばかり、班毎や大学有志で趣向を凝した出し物を繰広げ、演者

見物者共大いに弾け楽しんだ。最後に、「進めこの道」を国民文化研究会会員の先導で全員が唱和し、夜の集ひの楽しいひとときはお開きとなつた。

第五日目　（八月十二日・月曜日）

合宿を顧みて

最初に登壇された小田村四郎国民文化研究会会長（拓殖大学総長）は、導入講義からの日程を辿りながら、この合宿には一貫したものがあったとして、それは、事実を正確に見つめ、自分が縦と横のつながりの中に生かされてゐることを経験的に知るといふことであったと述べ、今後も先人の言葉を直接味はふことに努めて頂きたいと訴へた。

続いて、寶邉矢太郎運営委員長は「昨夜の一缶のビールはおいしかったでせう。真剣に取り組んだからこそ味はへる味だった」、また、「参考館でぢっと遺書を読んだ沈黙の一時を心に刻んでおいてほしい」と語りかけ、慰霊祭前後の天候の急変を振り返って「あれほど不思議な経験をしたことはありません。皆が一生懸命に取り組んでくれたお陰だと感じます。この島のみ霊も皆様の研修を支へてゐたやうに思ふ。勇気を持って邁進していただきたい」と述べた。

全体感想自由発表

続いて合宿での経験を振り返って各参加者が思ひのたけを発表する時間に移った。

「短歌相互批評で言葉の大切さと人の心にふれることを体験した。涙が流れるほどの言ひ尽せない喜びを感じた」「合宿での様々な講義が一つの大きな流れを形作るのを感じた。この流れの中にゐるとき、伸び伸びとして生きていけるのを感じた。しっかり

とした自分の見方を育てていきたいと思ふ」「自分が国に尽くせることは、自分の国への思ひを他者に伝へることであり、さうした一つ一つの積み重ねが国を動かすと思ふ」「相互批評で皆が自分の歌を真剣に考へてくれた。ありがたかった」「五日前まで全く知らなかった人とは思へないほど、深い話ができた」「自分がこの国の縦のつながりを受け伝へていかねばならないと思った。勇気をもって行動したい」「大学生活の中で周囲の誤った考へと対抗できるだけの勉強を積んでいきたい」など、次々に登壇して率直な力強い所懐が表明された。

閉会式

国歌斉唱の後、主催者を代表して磯貝保博副理事長は「戦後政策により世代間の生き方や考へ方に断層が出来てしまった。かうした問題を何とか克服したい、さうしなければ日本がだめになってしまふ。そのやうな思ひから合宿を開始した」と合宿教室開催の初心を回顧しつつ、「松陰の言葉に読書尚友は君子の事なりとあるが、本を読むこと、友を尊び共に勉強する友を持つといふことは、志を持って生きようとする者にとって大切なことである。今後のお一人お一人の精進を大いに期待したい」と奮起を促した。

次に参加学生を代表して九州工業大学四年の安土茂亨君が「この合宿で学んだ事をふだんの生活と関連づける事が大切だ」と挨拶した。最後に國學院大学法学部三年の古川貫祐君の閉会宣言で全日程を終了した。

助言者の紹介

学校法人　拓殖大学　総長
㈱千代田コンサルタント相談役
㈱宝辺商店　取締役会長
元九州造形短期大学　教授
新日本製鉄㈱　プラント事業部　次長（嘱託）
大日本園芸㈱　常務取締役
元電源開発㈱　環境立地本部本部長代理
昭和音楽大学短期大学部　教授
元アサヒ飲料㈱　専務取締役
神奈川県立厚木南高等学校　教諭
㈳国民文化研究会　事務局長
小田原市立矢作小学校　校長
東急建設㈱　執行役員コストセンター長
福岡県立稲築志耕館高等学校　教諭
新潟工科大学工学部建築学科　教授
中島法律事務所　弁護士
熊本市東部環境工場　場長補佐
福岡県立太宰府高等学校　教諭
伊佐ホームズ㈱　取締役社長
熊本県立教育センター　主幹
住友電気工業㈱　生産技術部長
山口県立下松高等学校　教諭

小田村四郎
上村　和男
寳邉　正久
小柳陽太郎
今林　賢郁
磯貝　保博
長内　俊平
國武　忠彦
坂東　一男
山内　健生
山口　秀範
岩越　豊雄
奥冨　修一
小野　吉宣
大岡　弘
中島　繁樹
折田　豊生
占部　賢志
伊佐　裕
白濱　裕
布瀬　雅義
寳邉矢太郎

㈱みずほコーポレート銀行
日章工業㈱　代表取締役社長
千代田漢方クリニック　院長
㈱オキ　代表取締役会長
元佐賀県立佐賀商業高等学校　教諭
元浄土真宗本願寺派　沼田組光隆寺　僧侶
元高千穂商科大学　教授
主婦
無職
宗教法人　乃木神社宮司
㈱エイド　企画室
㈱田町ビル　監査役
ワイ・エス・ケー㈱　岡山工場
国立療養所福岡東病院　副院長
神奈川県立小田原城内高等学校（定時制）教諭
亜細亜大学　法学部教授
戸田建設㈱東京支店開発営業部　開発課長
札幌西陵高等学校　教諭
関西熱化学㈱　ＭＣ事業部
九州大学大学院　数理学研究科
久留米大学附設中・高等学校　教諭
鹿児島県信用保証協会　管理部長
湯亭こんや　代表取締役社長
新明電材㈱　調査部

小柳志乃夫
藤新　成信
桑木　崇秀
沖　守
末次　祐司
岡棟　猛
名越二荒之助
関口　靖枝
金原東左衛門
松吉　宣和
山本　茂夫
島津　正數
内田　厳彦
小柳　左門
原川　猛雄
東中野修道
青山　直幸
本田　格
天本　和馬
高瀬　正仁
名和　長泰
野間口俊行
青砥　誠一
飯島　隆史

鳥栖市役所　農林課
大牟田市立勝立中学校　教諭
福岡市大原小学校　事務主査
亜細亜大学　情報システム課
長崎中央郵便局　郵便課総務主任
折尾愛真高校　教諭
北九州市立医療センター　放射線科技師
防衛庁　技官
福岡県立朝倉高等学校　教諭
若築建設㈱東京支店建築部　建築部長
㈱ＩＨＩエアロスペース　営業部
福岡県立香住丘高等学校　教諭
福岡市立香椎小学校　教諭
熊本県立天草高等学校　教諭
㈱アルバック
徳山大学　教務部入試室
神奈川県教育庁　管理部総務室教育情報班
福岡南公共職業安定所
藤村酒造㈱　取締役製造部長
愛媛県公営企業管理局　県立病院課
自営業
内閣府金融庁　総務企画局政策課
㈲岡山商事
㈳国民文化研究会

西山　八郎
西原　正博
奈田　明憲
平槇　明人
橋本　公明
松田　隆
森田　仁士
山根　清
黒岩　真一
池松　伸典
内海　勝彦
酒村聰一郎
是松　秀文
今村　武人
北浜　道
中村　道陽
大日方　学
古川　広治
藤村　孝信
鳥生　秀雄
北村　公一
山下　哲也
岡山　英一
茅野　輝章

中尾スタジオ
民主党（島根）
熊本市教育委員会　教育総務部教務課
アサヒ飲料㈱　カテゴリーマネジメント部
㈳国民文化研究会
㈱モノリス　ＮＥＯ事業部　私立中学受験グループ
栃木県立足利図書館
岡山県立高校　講師
松江市立津田小学校　非常勤講師
日本青年協議会
日本青年協議会　学生局
ｂａｎｕｐ企画・デザイン
福岡県立久留米高校　講師

中尾　国博
濱口　和久
濱口　知久
澤部　和道
有本和香子
庭元秀一郎
青野　英海
横畑　雄基
三島　明
本庄　寛行
別府　正智
諏訪田尚子
小林　国平

合宿運営本部　寶邉矢太郎・山根　清・黒岩　真一
茅野　輝章

指揮班　鳥生　秀雄・中村　道陽・岡山　英一
横畑　雄基・三島　明・青野　英海

事務局　天本　和馬・磯貝　保博・奈田　明憲
北村　公一・有本和香子

東山中学校一年　山根　誠一
私立銀河学園高等学校一年　紹田　仁美
私立開智高等学校二年　飯島　仁史
世田谷学園高等学校二年　粕谷　知生

写真班

岡山大学付属中学校三年　安田　美帆
近畿大学九州工学部二年　福岡　鉄平
熊本県立宇土高等学校教諭　久保田　真

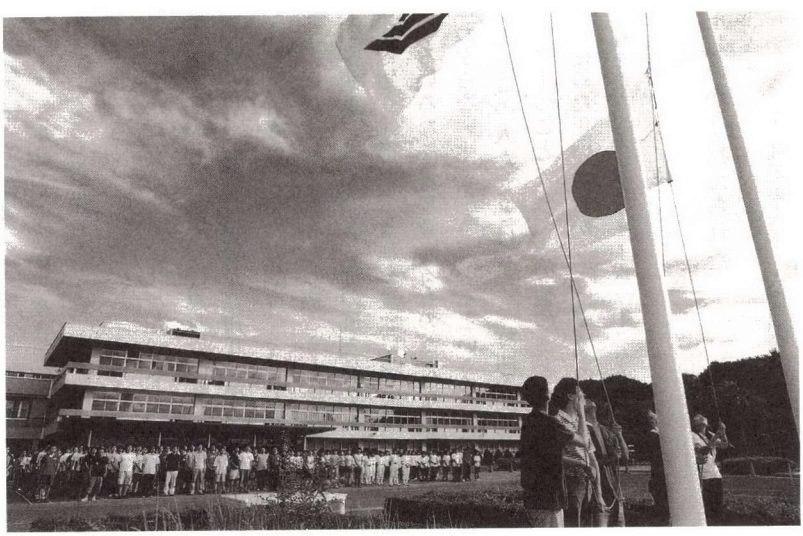
見学者

㈱志門塾講師　三林　浩行
主婦　長谷川真美　主婦　安田　輝子
東郷神社宮司　内田　久美　主婦　熊丸よしこ
㈱アクティオ　松本　巌・名頃　正治
元広島大学教授　滝沢　寿一
公務員　伊藤　和雄

走り書きの〝感想文集〟

これは閉会間ぎはの一時間余で参加者全員に、四泊五日間の感想を走り書きで書いてもらったものです。「仮名遣ひ」は原文のままで掲載してあります。

なほ、各人の感想文の末尾に小さい活字で載せられてゐる和歌は、この感想文とともに提出された第二回目のものです。



第一班―男子学生―

つながりの大切さ

（亜細亜大学　法　卒　清田直紀）

今回の合宿で最も印象に残ったのは「つながり」の大切さでした。人は一人で生きているのではなく家族や友人、その他たくさんの人たちとつながって生きている。そしてさらに私たちは歴史や伝統、先人の方々とつながって生きているということに改めて気付かされました。この「つながり」の大切さを心にとめてこれからの日々を過ごしていこうと思いました。今生きている家族や友人たちとより深く感謝の心をもって付き合っていくことはもちろん、我が国の歴史を懸命に生きてゆかれた先人たちとも心をこめて付き合っていきたいです。そのためにも先人の残された和歌や生き方などに心を寄せて勉強していこうと思っております。

そして、学んだことを家族や友人に伝えていくとともに、日本をより良い国にしていくために自分がどうしていくのが良いのかということも考えつづけて行く決意でいます。

日の本の國よくせんと志す人とのつながり広めてゆきたし
先人のふみ読み生き方しのぶとき肝要なのは真心なりけり

本当の勉強とは

（東北大学大学院　教育学　二年　大岡一亘）

班友の考えていることを知ることは、一流の講師のご講義を理解することよりもずっと難しいし、また時間もかかる。プログラムには書かれていないけれども、本当の勉強はこのことなのだと、今回の合宿教室では思った。カッター体験では、おそらく誰もが己の体力の限界を知り、櫂や櫂でとらえるべき海の水に翻弄されていたと思う。ところがその体験の中で、ある班友は先をゆく艇をだし抜こうという野心を胸に秘めその想いを短歌に詠んだし、別の班友はチームワークの大切さを体験で知り、行い、それを短歌に詠んだ。あの状況で、本当にいろいろなことを考えるものだと、言葉で表現されなければわからない生を生きているということはすごいものだと思った。この人たちとはもっと時間をかけて話したかった。カッターのことでも、その他のことでも、もっとたくさんの胸に秘めた想いがわかったはずである。

ペアを組み櫂を漕ぎたる班友がチームワークを歌ふはたのもし

何が正しいかを教えられた

（人間環境大学　人間環境　三年　角田誠治）

私が愛知県や東京で参加している勉強会も、この合宿と思いは同じです。だからこそ、この合宿の中にいるとどこか楽

な気分になります。ただし私はこのことを良しとしません。一ケ月、二ケ月、三ケ月とずっと集まっているだけでは何もおこらないのです。この大きな流れに身を寄せているだけでなく、各々がさまざまな新しい流れをひきおこし、その上に立ってあたりを照らさねば意味はないのです。具体的に言えば、思いと行動を同じとすることです。批評だけなら誰でもできます。しかし、その思いを実行することが大切なのです。まして、批評せずとも実行をしてさえいれば、思いはおのずと届くものと思います。

何が正しいことなのか、それをこの合宿は教えてくれました。だからこそ、その正しい行いをしていくことが大切なのです。

合宿の感動の流れにのまれてもふと顧みる今日の我身を

心をこめて語って下さった先生と友との出会い

（九州大学　農　三年　森永賢司）

今回の合宿の導入講義で、講師や先生方のしぐさ、口調からも何を伝えたいのかということを感じてほしいという話を聞いたが、まさにそのことが心に残る合宿となった。山内先生のご講義のあとの班別研修の中で宝辺先生が涙をたたえながら天皇陛下のことを語られている姿がとても心に残った。ここまで心を込めて天皇陛下を語ってくださったのは初めてで、何だろう、でも何かあるということを思った。こうした

カメラ・レポート1

開会式。主催者を代表して、㈳国民文化研究会理事長・上村和男先生が「国を愛することから各々の一歩を始めよう」と呼びかけた。

姿をもって私たちに一所懸命に語ってくださるということがとてもありがたいと思った。この合宿ではこうした先生方のお姿に触れることができたと同時に、よき友らとの出会いがあった。自分の思っていることを伝えようとしてもなかなか伝わらない。そういう中から、もっと勉強をしていきたい、そして、いつかその友に伝えたいという意欲も湧いてきた。

先生や友との会話、つながりの中で、さらに学びたいという気持ちが湧いてくるのだなあと思った。

御同志(みとも)らの堂々と感想述ぶを見て吾も思ひ述べむと思ひたるなり
人生の積極的な姿勢をば御同志の姿ゆ感じたるなり
吾の足らぬ所気づかせます御同志らに出会へしことをうれしく思ふ

先人の祖国に対する想い

（中央大学　文　二年　岩越弘毅）

今回、初めて合宿に参加しましたが、五日間本当に多くの事を学びました。先生方の御講義の中で話された先人の祖国に対する想いがひしひしと伝わってきました。そして、そのお話を聞くたびに自分に何か力がわいてくるような気がしました。参考館の中で見た特攻隊の遺留品は涙なくして見られませんでした。班別研修の中である先生が一人の特攻隊の出陣する前夜のお話が私の頭から離れません。その人は、一晩中、天井を見つめていたと言います。あの遺書に書かれた潔い決意に至るまでには、やはり時間がかかったのだと思うと何か込みあげてくるものがあります。

江田島の空は曇れど我が心すみわたる空ひらけし続く

日本の正統な歴史を学んでゆきたい

（慶應義塾大学　理工　四年　堀江良明）

この合宿に参加して様々なことを学ぶことができ大変有意義な毎日を送ることができました。最も印象深かったことは山内健生先生のご講義「日本の国柄」でした。そのご講義の中で「後ろ向きの万世一系」ということで、日本は連綿と続く歴史を尊んで進んでこられた、それに対し中国の秦は伝統を尊ぶよりも自らの力で前だけを向いていたという対比を用い、秦がすぐに滅び、日本はずっと続いているということを述べられました。戦後の日本も、それまでの歴史を否定して再出発しようとしています。現在の我々が過去の日本国民の連綿とした精神の連続性を具体的に学んで行き、その精神によって我々が生かされていることを感じてゆくことが大切であると痛切に感じることが出来ました。そういう日本の正統な歴史というものを学んでゆきたいと思います。

全体感想自由発表にて

同輩の熱い決意を耳にして我のこころもふるひたつかな

合宿で学んだことをバネにして

（九州工業大学　情報工　三年　多賀祐之介）

今回、合宿に参加したのは先輩に誘われたのがきっかけでしたが、班で濃い話ができ、また、先生方の貴重なお話をお聴きすることができて非常によかったという気持ちでいっぱいです。自分と同年代の人が同じことを勉強していたり、または、自分の知らないことを話してくれたりと刺激ある話ができました。先生方のお話もそれぞれ演題は違いましたが、よく吟味すると全てがつながってくるようでした。合宿に来て今まで勉強したことが一つにまとまってきた。そんな感じを受けました。この合宿では今まで学んだことのまとめ、再出発、そういう意味を含んでいたと今考えると思えてきます。ここで学んだことをさらなるバネにして、これからもよりいっそう励んでいきたいと思います。

江田島で皆真剣に語り合ひつひには想ひ共感に至る

自分の中に変化が起きた

（熊本大学　工　一年　坂口　晋）

正直に言いますとこの合宿に参加することはあまり乗り気ではありませんでした。父が国文研の会員で半ば強制されたようにこの合宿に参加し、江田島に着いた頃には早く終ってくれないものかと考えておりました。やはり、合宿初日など

カメラ・レポート2

参加者を代表して筑波大学修士課程２年・寺澤知之君が「自分の思ひや考へを互ひにぶつけ、それを真剣に受け止めてくれる仲間がゐるといふ喜びを体験しよう」と参加者に呼びかけた。

ではこのような思いから確かに自分の思いを班員に語りますが、何か殻に閉じこもったような所がありました。しかし、一日二日と班員と寝食を共にしていくうちにどうしても自分の中に抑えきれない思いがわいてくるのを自分の中に感じました。とうとうその思いを班員に話しました。その時のすがすがしい気持ちといったら何でしょう。本当にこの合宿に来て良かったと心から思いました。この合宿に来て何か自分の中で変化が起こった気がします。

江田島に着いた頃は早く終ってほしかったこの合宿も今ではもう一度来たいと思う合宿と思えるようになりました。本当にこの合宿に来て良かったです。

歌をよみ友と語りて気づかさるる言葉の内の深き重みを

坂根十二郎大人のこと

試験日の知らせをうけてたちまちに台湾行きを決意し給へり

奉公の万一を尽くさんと命を懸けて台湾行きを決意し給へり

第二班―男子学生―

人との付き合い、つながる難しさ

（早稲田大学　法　二年　高木雅史）

今回の合宿にはそれほど強く何かを学びとろうという決意をもって臨んだとは言い切れません。しかしながら、班長という大役を仰せつかり、班別研修での論議を引っぱっていく重圧もさることながら、班員一人一人との付き合いという問題にも非常に苦労しました。「たかが合宿の間の四泊五日の付き合い」そう思っていました。思い直せば今までの自分の人付き合いにもその姿勢は共通しているのかも知れません。

東中野先生の御講義で「人間は人とのつながりの中で生き、生かされている」というお言葉がありましたが、人との付き合い、つながる難しさという人生の根本の問題を改めて考えさせられました。

先人の言葉に触れ自分の糧に

（ハローワーク福岡南　古川広治）

導入講義で台湾教育の創始者たちの話があり資料をいただいた。改めて台湾教育における明治の先人達の意気込みを知り驚いた。最初の修業証書授与式典の取組みと心配り、六士先生遭難にあふまでの経緯、そして六士先生につづく者たちの心意気。これら事にあたった人の言葉に触れることで、当時の人々の精神にも触れる思ひがした。

残された言葉を味ひ、あたため、自分の糧とさせていただきたく思った。

言葉を磨き、自らの思いをしっかりと伝えていきたい

（明星大学　人文　四年　久田広光）

今回の合宿で最も感じましたのは、「言葉を大切にしてもっと磨いていかないといけない」ということです。この事をまず思ったのは小柳陽太郎先生が合宿初日の班別研修でご指導頂いた時だ。先生は「言葉にはレトリックがあるから気を付けなさい」と言われた。それはW杯があった時、日本人は外国人を大切に受け入れ応援もした。こうした事をある新聞は「超国家主義」と書いた。先生は「この『超国家主義』という言葉遣いはおかしい」と首を傾げて仰った。理由は「超国家主義」は国家などどうでもよいとの視点から言葉を使っている。しかし、本来の日本人は日本の事をしっかりと学び愛し大切にしたうえでそれと同じように他国を愛した。

私は何となく「超国家主義」でも意味は大体イメージがつくために素通りしてきた。しかし先生は違和感を感じると述べられた。それは先生が言葉一つ一つから感じられる背景となる感情や意味を歴史や伝統精神を脈打たせながらしっかりと見つめておられるからだと思う。私は言葉のレトリックに騙されないことや自らの言葉を磨き自らの思いをしっかりと言葉にあらわしてゆかないとこの国の温かい心の通い合いや正しい姿心が伝わってゆかないと思いました。

名越二荒之助先生の御講話

松吉さん松吉さんと語らるる先生のみ声の心にしみるも

カメラ・レポート3

オリエンテーション。合宿運営委員長の寶邉矢太郎氏から合宿趣旨説明がなされた。

班友の真剣な顔を見つむれば自づと姿勢正されにけり

班付の高瀬さん

高らかに「高瀬はここです」と右手あげ笑みをうかばせゆるりと動かる

一年ぶりに友とあひて

「滋賀の人」と思ひがけずも笑顔もてお声かけらるる事ぞうれしき

一度しか言葉交はせしことなくも吾れの事をも覚え給ふか

驚く程普通に色々なことを話すことができた

（亜細亜大学　国際　三年　熊田康則）

大学に入学してから人と素直に語ることに臆病になっていたし、それがエスカレートして周りを見下したりもしていた。しかし、この合宿に来て会ったばかりなのにこんなに話せるのかと驚く程普通に色々なことを話した。そして自分はあまりにも周りが見えていないことに気付かされた。本来みんなが関心あるのに普段話せないことを合宿で多く語り合えたことは良かった。自分の勉強不足を強く感じた。同じくらいの年である学友達が自分よりもはるかに大きく感じられた。

僕は普段東中野先生の講義を受けさせて頂き、その中で自分にとって大事なものが育ちつつあり、それが本当に大切なものなのだという確信をこの合宿で感じた。もっと日本の伝統というものを知り、自分がその中で生きていることを感じたい。

学んだことを日々の生活に生かしていきたい

（九州工業大学　情報工学　三年　大津健志）

この合宿では多くのものに出会った。慰霊祭や短歌などの日本の文化、ご講義をなさった先生達や大変ためになったお話し、班付になった高瀬先生や澤部さん、そして班のメンバー達。これらの素晴らしい出会いを私がどう生かすか、日常の中に取り込んでいくかが大切だと思う。文化とは日常の中に生きている私たちが日々の生活をどう過していくかがとても重要になってくるのだ。この合宿で「感ずべきことにあたりて感ずべきことを知り、感ずる」を少し感じられたのではないかと思う。この合宿に参加したことを感謝するには学んだことを日々の生活に生かすこと、そう心に誓って日々勉強し、勇気をもって行動していきたいと思う。

感ずべきことを心に少し知り日々に生かすと心に誓ふ

同世代の人たちとのつながりをもてた

（防衛大学校　人間文化　三年　鵜川優一郎）

私は今回が初参加でしかも途中参加という特別のものであった。多くの先生方の御講義、その後の班別研修は様々な意見を聞くことができ、私自身目を開かされることが多かった。また、自分自身の内からも新たな考え方が生まれ、語り

合うことでさらに発展させることもできた。慰霊祭も初めての経験であった。幾多の英霊の鎮魂を祈ると同時に私自身幾つかの決意をし、先人にお誓いしもした。夜の集いもこの合宿で集まった皆さんと出し物を楽しむことができた。キャンプファイヤーをしたのも何年ぶりのことだったでしょうか。炎の前で声高に軍歌を歌ったことなどありませんでしたし、よき思い出となりました。何より同年代の一般大学の方々の考えや意見を聞くことができたこと、そして彼らとの人としてのつながりをもてたことが私にとって財産となった。私は一自衛隊員であり、数年後には任官して部隊に配属されることになるが今回の合宿は私の将来の役割の意義を強めることになり、また一つの糧ともなった。来年は最初から是非参加したいと考える。

身を尽くし祖国守りし先人の誠の心我も磨かん

励みになり、温かった短歌相互批評

（人間総合科学大学　人間科学　二年　上田真一）

今回合宿に参加して自分が無知だということを知りました。特に班別研修では自分と同世代の方々が多くの知識と知見をもって、講義で学んだことを自分の言葉で表現していく姿をみて、大きな感銘を受けたのと同時に自分がいかに無知な人間かということを思い知らされました。しかし、つらかったことばかりではありません。短歌相互批評の時、班員の方が

カメラ・レポート4

合宿導入講義。住友電気工業㈱・布施雅義先生は「製造現場での製品不良対応の体験を踏まへて、「事実を見て自分の頭で考へることが仕事のみならず全ての基本です」と述べられた。

自分の創った不出来な和歌を真剣に手直ししてくれたことは本当に励みになりましたし、それ以上にあたたかかったです。普段僕は同世代の方と接する機会が少なく自分の気持を伝えるのがとても苦手です（因みに通信制なので）。だからこの場を借りて班員の方に心からお礼を言いたいと思います。本当に五日間お世話になりました。ありがとうございました。

合宿に参加をできてよかったなぁ僕は本当にうれしいっすよ

頭がぐちゃぐちゃになった

（中央大学　商　一年　寶邉浩太郎）

難しいお話しばかりで頭がぐちゃぐちゃになったが班付の高瀬さんのおかげでとても癒された。

日本人として生きていくことの責任と楽しみ感じる

（高校卒業　新垣　貞治）

常々新聞や本で拝見している先生方のお話をじかに聴ける機会は大変貴重で、この度の合宿を多少の不安を抱きつつ心待ちにしておりました。前日の準備から参加させていただき、東京事務所で勉強会をされている学生の方々に親しくしてもらいすぐ馴染むことができました。

御講義の内容は世間の暗雲を吹き飛ばすかのような、また日本人としてこれから生きていくことの責任を感じつつも楽しみになる様な内容でした。

幸せだったことは何より班員に恵まれとっても楽しい日々を過ごすことができたことです。高瀬先生は人生の見本としてとてもいい先生でした。

合宿が終り、友との別れに
心充たし過ごせし日々の想ひ出され別れに目頭熱くなりゆく

相手と正面から向い合う付き合い

（アサヒ飲料㈱　澤部和道）

今回、大学卒業以来、初めて学生班に班付ということで参加させていただいた。とは言え、気持ちは学生として参加したつもりだった。四泊五日は長いか短いかは班員それぞれだったとは思うが、私自身が感じたのは長かろうが短ろうが人と付き合うということにおいてはその瞬間瞬間が大切であり、どれだけ相手と正面から向かい合うことができるか、それが肝要ということだった。学生生活、社会人生活、希薄な付き合いを積み上げても仕方のないことだということは常日頃思うことであり、相手の深いところまで入って向かい合えるかどうかは自分次第だとも思う。

何が人生において大切なのか。私は学生の頃より吉田松陰先生の「至誠」という言葉を胸に留めてきたが、それを自分の日常生活にしっかりと生かしていかなければいけない、それこそ覚悟と決意をもたなければいけないと痛感した。

合宿・班別研修だけが特別なものではない。これからの日常において今回この班で勉強したことを生かしていきたい。

第三班―男子学生―

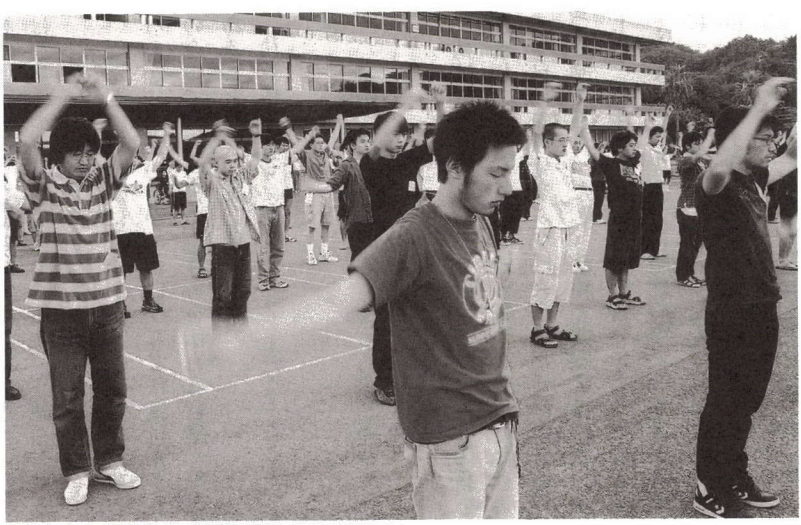
「学問に学問に」という気概で生活しよう

（島根大学　法文　一年　首藤直樹）

今回合宿に参加して、自分と同じ周波数の学生が日本全国に沢山いることを知り、大変勇気づけられた。我が大学の学園祭で先生方に講義をやっていただいたなら、現段階においては、「年寄りの戦争話」として受け取られてしまう悲しい現実がまだあると思う。そういった若者達の空気を変えるには、残念ながら、日本の文化がますます乱れ、訳のわからない凶悪な殺人が多発し、多くの犠牲が出て皆がやっと気づくまで待たなければならないのだろうか。何かいい手段はと考えていたところだが、今回の合宿に参加し、とにかく過去に学び、学生生活は「学問に遊びに」ではなく、「学問に学問に」という態度で過ごすべきだという気概が、自分の心の中に生まれたと思う。

若人ら集ひて学びぬ江田島に先人の思ひ無駄にはせじと

カメラ・レポート5



朝の集ひ。「青年の家」を利用してゐる他の団体と共に、国旗掲揚を行ひ体操して一日の研修が始まる。

短歌創作・相互批評の意義と歴史を知る意義

（九州工業大学　生命体工　院二年　高橋俊太郎）

合宿で印象に残ったことは二つある。一つは短歌の美しさ・創作の難しさに触れたこと、いま一つは歴史を知る意義を学んだことである。自分の短歌をじっくり読まれることは恥ずかしかったが、自分ではなかなか思いつかない表現の助言を得たことは貴重だった。さらに、寝食を共にしていた仲間の意外な一面を見ることにもなり、大変意義深かった。

歴史を知る意義については、当時の人達の思いを学ぶということは、自分達が伝統という歴史の縦糸の先端に位置し、自分の中には連続した縦のつながりが積み重なっているのだと考えるようになった。日本の国柄を知り、逃げられない宿命を知り、昔の人々の国を思う心を知ることによって、私は明日の日本をどうしていくのかが視えてくるのではないかと思う。

英霊の国思ふ心偲びつつ我がなすべきを問ひつ歩まむ

自分の思いを伝える言葉の大切さ

（國學院大學　法　三年　古川貫祐）

班員の皆さんは真剣に講義を聞き、また、その後の班別研修で自分の率直な意見を発表してくれました。そんな皆さんの言葉を聞き、班長である私も思うところをこの場でぶつけてみたいと思い話しを始めましたが、いざ自分の番になると言葉が出てこないのです。東中野先生のご講義の中で、人間は鳥や獣と違い言葉を持っている、また、小柳先生は、言葉は家族をつくり歴史をつくるという話をして下さいました。

しかし、自分が思うところを他人にうまく伝えられないということは、いかに自分が日々の生活で言葉というものをおろそかにしていたか、ということに気付かされました。今回の合宿では、自分の生き方を伝える言葉を学ぶことが大切であることを学びました。

ひと夏を寝食共にせし友だちとまた会ふことをかたく誓ひぬ

昔の日本のすばらしさを引き継ぎたい

（日本不動産学院　建築　一年　野見山優亮）

私はこの四泊五日の合宿教室で貴重な体験をさせていただきました。顔も名前も知らない人達と寝食を共にし、同じ部屋で自分の意見をぶつけ合うことで自分も知らないことに気づかせてもらったし、改めて共感を得たりすることができました。先生方の講義も今の自分にとって大変為になるものばかりでした。先生方は暗闇の中にいる次の日本を担う私たちに一筋の光を与えてくれました。私はこの光の方へ少しずつ歩み寄れるよう努力したいと思います。私は温故知新ということが改めて大事だと分かりました。先代の人たちが必死になって築いてきた日本をもっと大切にし、私の子や孫やそのまた孫にぐらいまで、昔の日本がどんなにすばらしかったか

を引き継がせていけたらなと思います。

先つ代の御国への魂引き継ぎて我らが吹かさむ日本の新風

英雄たちの話に涙がとまらなかった

（麗澤大学　経済　四年　栗原　章）

合宿での感動は開会式から始まりました。国歌斉唱で君が代を歌いだしたとき、私はとても驚きました。参加者全員がとても大きな声で歌っていたため、会場全体から私の耳の中に君が代が入り込んできたのです。私は今まで体験したことのない感動で、歌いながら鳥肌がたちました。この合宿で大きく成長できるぞと期待がもてました。

国の為、愛する人たちの為に自らの命をかけた英雄の話に、私は涙がとまりませんでした。そして、私はこの英雄たちのことを必ず後世に伝え、私もまた国のために奉公することを決意しました。

私にとって、班員にも恵まれ、とてもすばらしい合宿となりました。

国のため日の本のために尽すこと学び続けていざ立ちゆかむ

「何を守るのか」に答が出せた

（防衛大学校　国際関係　三年　大野毅彦）

輪読会で山根さんやクラブのOBの方から本合宿の事を聞

カメラ・レポート6

短歌創作導入講義。福岡市立香椎小学校教諭の是松秀文先生は万葉集の歌を引きつつ特に日本の伝統につながることが出来ることを強調され、短歌は「日常生活で活かされてこそ真価を発揮する」と語られた。

き、また、前々から中西教授の著作を拝読しており、さらに、同世代の若人や先輩方から幅広い意見を聞き、自分の考えに柔軟性を持たせる為に、本合宿の参加を決意した。

合宿教室では、講師の方々から「日本」という国とは何たるかを教えて頂いた。私は将来国防の任につく者であるが、自分の不勉強の為、「何を守るのか」という問いに対して、漠然とした答えしか持っていなかった。しかし、講話を聞き、「何を守るのか」という問いに自分なりの答えを出す事ができた。答えを出すまで色々と導いて下さった講師の方々、国民文化研究会の方々、そして、同じ班の個性豊かな、意見の異なる人々に対して、感謝の念に堪えない。

浮きつ島たとひ一時沈むとも新しき藻は明日ぞ生えでむ

この霧が晴れるまで勉強を続けたい

（九州ルーテル学院大学　人文　三年　野口寛記）

合宿の最初のうちは、色々な考え方があるものだと思いました。おそらくこの合宿で語られた歴史が真実により近いものだとは思いますが、今まで学校で教えられてきた内容との違いに抵抗があり、頭の中で上手に処理できずに混乱してしまいました。しかし、今まで学校で教えられてきた歴史には気持ち悪さを感じていたので、講義を聞いてゆくうちに少しずつですが、頭の中で整理する事ができました。しかし、それでも心の中に気持ち悪さが残ります。霧がかかったままです。この霧が晴れるまで、合宿後も勉強を続けたいと思います。

一つ知りまた謎増えて霧の様（やう）いつか晴るるらむあの空のごと

過去を曇りのない目で学びたい

（東京理科大学　理工　二年　小堀知輝）

現代の日本人が、自国の歴史に対してやや自虐的になっており、中国や朝鮮の国々から不当な賠償を突きつけられているということは、以前から感じていました。この合宿を通して、我が国の過去の誇るべき事実に裏付けられた真の歴史認識の必要性を痛切に感じました。自分たちの誇らしい過去をイデオロギーという眼鏡を通して見るのではなく、曇りのない目で学んでゆきたいと思います。

合宿初日にいただいた「歴史的仮名遣ひ」を読んで、意外にも過去の仮名遣いの方が、現在のそれよりも合理的な側面もあるということを知りました。日本語が発達して、歴史的仮名遣いと現代仮名遣いの両方の長所を合わせもった、真に合理的な仮名遣いが完成されれば良いと思います。

江田島ゆ宮島に向けて船出せむお好み焼きを口に含みつつ

得難き班別討論

（新潟工科大学教授　大岡　弘）

小柳先生が御講義で触れられた村垣淡路守の、「うれしやなまづふしをがむ我が国の神路の山の高き恵を」には、新鮮な感動を覚えた。幕臣でも明確な勤皇・尊王の心を堅持してゐることにである。

班別討論では様々なことを学ばせていただいた。一口では言へないが、福沢諭吉の「帝室論」を読んでみたくなつた。班別討論とは、かくも得難いものかと感じることが出来た。そのやうな班別討論に積極的に参加できるやうに、今後研鑽を積んでゆきたいと思ふ。

あたたかき御指導（おみちびき）のもと身に余るおかげかがふりありがたきかな

第四班 ―男子学生―

班員との語らいの中で学んだこと

（亜細亜大学　国際関係　三年　野村　亮）

今年、私は班長をさせていただきました。班長という立場から合宿に臨んだことが、今回私にとって最も素晴らしい経験となりました。私は一、二年生時から合宿に参加していますが、今年班長という立場で合宿を体験していったことで今

カメラ・レポート7

レクリエーション。「緊張感と期待感を高めつつ、カッター指導員の説明を聞く」

まで見えていなかった多くのことを発見することができました。今、思い返せば過去の合宿において私は、合宿にその時その時のご講義や研修に全力を尽くすよう努力してまいりました。今でもこの姿勢は変わりませんし、この姿勢が最も良いとも考えています。ですが、そういう姿勢は一歩間違えれば、人の心に自分を合わせるという大切な姿勢を見失わせることにもなりかねないのだということを感得しました。

素晴らしい班にするため、私が最も気を付けたことが一つあります。それは班員とできるだけ多くの時間を「同じ空間」で過ごすということです。当然のことですが、何もその中にいて場を盛り上げたりするということでもないと私は思っています。とにかく、五日間という限られた時間で、どんな形でもいいから、ケンカでも語り合いでも何でもいいから一緒にいるようにしました。私が心掛けたことはこの一つくらいであったのに、この合宿の見えない力といえるのでしょうか、不思議と日程を重ねるごとにみんな必ず仲がよくなっていくのです。私はこの「人と時間を共有する」ということ、しかも皆が同じ日本の美しさに感動しそれを共有するということ、これが本当に何か心にしみじみと感じる喜びというものを与えてくれました。そしてこれはまた、何かに真剣に打ち込むあまり、周りが見えなくなってしまいがちな自分という存在を気付かせることにもなりました。私達日本人が日本の美しさに共に感動し、それを共有する。何と気持ちのよいことでしょうか。

真剣に学んだ五日間

（北海道医療大学　歯　五年　鍔原洋平）

今回の合宿に参加して思ったことは、参加する前は四泊五日は少し長いと思ったが、実際に参加すると、毎日がとても充実して有意義な時間を過ごすことができたということだ。

私は、全国から集まった人たちと真剣に話し合うことができたと思う。自分と同じ年代の人たちが本当に真剣に考えていると言うことが分かり、大いに刺激となった。家に帰ってからもまた、一層勉学に励みたいと思う。ただ一つ残念だったのは、四泊五日という短い期間では仕方のないことかもしれないが、班単位で行動するので、同じ班同士でしか話をして外の班との交流ができなかったことだ。もう少したくさんの人の意見を聞く機会があれば、もっとよい合宿教室になると思う。

江田島で志持つ若人が共に学びし共に語らう

日本の文化を理解する道が開かれた

（関西大学　総合情報　四年　吉川元博）

縦と横、この二つのまるで地球の見えない経線緯線のような形で私は多くのものを得ました。つまり縦とは、数々の先生方と自分、横とは同じ寝食を共にした学生と自分です。その中で最も感じたことは、その縦だけでも横だけでも駄目で

両方あって初めて大きいものを得ることができるということです。最初に先生方の教え、また先人の教えを授かり、それについてその後、部屋に戻って皆で討議する。初めにも言いましたが、そうして「地球」ができて、今まで見えなかったものが見えてきたと思います。

この合宿は、先生方に教えたいという意気込みが感じられ、学生の方にも知りたいという意欲があり、両者にとって非常に有意義なものであったと思います。私は来年度より幾度となく海外に行かなければならない仕事につきます。その前に真の日本、正しい文化理解をしたいために参加致しました。その目標は、まだ果たすことができていません。というよりも、この短い期間でそれを行うことは不可能でした。しかし、それらを行う道や、それらを互いに助けあうことのできる友人、そして素晴らしい先生方と知り合うことができましたことは、本当にかけがえのないものになりました。

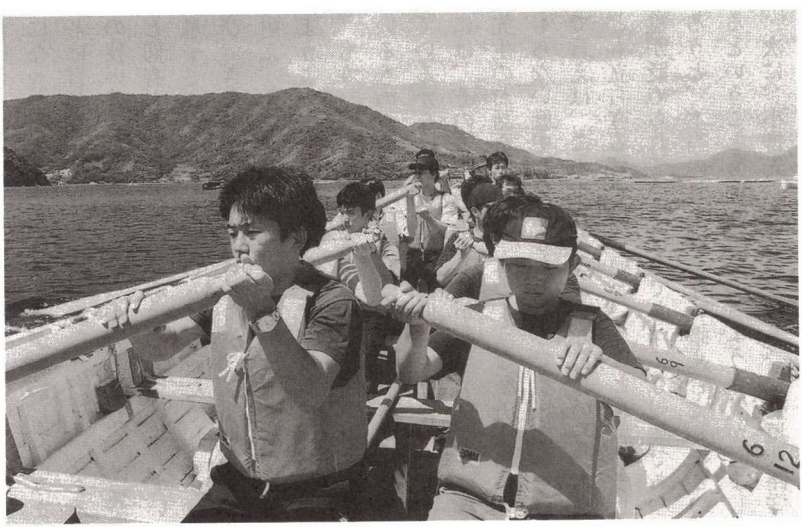
私の祖父は、戦争経験者で、現在も一緒に暮らしています。祖父の兄はビルマで戦死しました。帰ったらまず、祖父にこの合宿のことを話そうと思っています。

自らの成長のきっかけになった

（皇學館大学　文　四年　大野広学）

私は友人の誘いでこの合宿に参加しました。同じ世代の他の学生達はどのようなことを考えているのかと言うことを参

カメラ・レポート8



レクリエーション。「皆の気持ちが一つになり、江田島の海をカッターが進む。」

加者と積極的に話し、知りたいと思いました。合宿の最初の二日間は緊張してうまくコミュニケーションを取れませんでした。しかし、カッター体験の後は、参加者、特に班員の気持ちが分かったような気がして、様々なことを皆で語り合いました。

中西先生、東中野先生、小柳先生をはじめ講義を頂いた先生方の言葉、その全てを理解できたわけではありませんが、どの先生方の言葉もとても考えさせられるもので、自らの成長のきっかけになるものだったと思っています。今度の合宿で感じたことをさらに深めてゆくとともに、先人がつないでくれたわが国を未来へとつないでゆくため自分のできることからしてゆきたいと思います。

心に残った講義の数々

（九州大学　農　三年　村山賢一）

今回で二回目の参加となりました。楽しみにしていたのは中西先生と小柳先生、それと名越先生の講義でした。合宿が始まると、今年もぜひ班の親睦を深めたいと思い、一人一人と話すよう心掛けました。しかし班の仲が深まるにつれ、逆に私の方が声をかけてもらうことが多くなった気がして、暖かいものが班の雰囲気に流れていたと思います。

今回、一番心に残ったのは名越先生のご講義だったように思います。松尾中尉の特殊潜行艇による勇気ある攻撃を讃えるオーストラリアの海軍も立派だと思いますが、松尾中尉のお母さんも大変立派な方だったと思いました。首相にお会いになったときも決して「息子が攻撃して済みませんでした」とは言わないと心に思っておられたということや、「よくぞあの狭いところを潜っていった。今度ばかりは褒めてあげたい」と仰有られていたことが心に印象づけられています。当然、息子さんを亡くした悲しみはあったでしょうし、また、お忍びできないところはありますが、やはり息子が厳しい訓練に耐え、命をかけたことであるから、それを無駄死にとしてしまうような発言をされるはずはありません。

もう一つ心に残ったことは、松尾中尉の遺品が展示されているものを見て、「本当は抱いて寝たいけれども、展示されているから仕様がない」と仰有っていたことです。母親の目には、そのように見えるのかとハッとさせられました。名越先生のお話を聞いて、このような歴史を知らず、何も心がこもらない歴史を勉強したところで意味はなく、大きなところで言えば、このようなことを知らないと、本当の日本外交なども立ち直るはずのないということを思いました。現在、英霊が貶められている日本であっても、敵であろうと味方であろうと、本当の日本はお互い讃え合えることのできる国であるということも仰有っているような気がしました。

次に、小柳先生のご講義であった村垣淡路守の話が心に残りました。まず素直に詠まれておられた和歌「もてはやすその真心はかはらじな……」「姿見ればことなる人とおもへども

……」の二首とも姿・形・文化が違っていても心通わすことのできた喜びが本当に伝わってくると思います。私は先人のことをつい頭で「異国意識などを持っている先人」とイデオロギー的にどうしても捉えてしまうのですが、このような和歌に触れ、先人は私達と同じような感動を持っておられるのだと感じます。異国人と堂々と通じ合える、そのような祖先であったということがうれしく思われました。また、慣習・文化が違うにもかかわらず、淡路守らはアメリカ人から礼儀作法を讃歎されていることはすごいことだと思いました。

一人前の日本人になろう

（杏林大学　社会科学　二年　青木啓昌）

私はこの合宿でよく学び、よく遊んだ。大自然がほとんどそのまま残っているこの江田島で、新鮮な空気を吸い、生命力に満ちた緑を目にした。その時点で心身共に充実をはかることができた。その上、諸先生方の講義で民族としての精神を鍛えられるのだ。これで私自身が成長しないわけがない。しかし、成長がすぐ現れるわけでもない。この合宿では、喩えていえば先生方という植木職人が土である私達に種を植えられたのだ。芽生えるのはまだ時間がかかるだろう。その種を立派な木にするか、腐らせるかは私達にかかっている。立派に成長しようと思う。一人前の日本人になれるように。

二日目の午後、京都大学教授・中西輝政先生による「世界の中の日本の宿命」と題する御講義が行なはれ、先生は「戦後の日本は『物質と精神』『進歩と伝統』『私と公』それぞれのバランスを失っており、若い世代の諸君はこれを正す宿命を背負ってゐる」と語りかけられた。

先人達の豊かな心を実感した

（学習院大学　法　二年　黒田康裕）

四泊五日の合宿は長いようで短い時間でした。それだけ内容が充実した合宿でありました。寝食を共にした仲間との語らいや、貴重な研修・講義などを通して多くのことを学びました。先人の歌や言葉を通して我らの祖先がいかに心豊かで誇らしい方々であったのかということを実感しました。今、このよき思い出の地、江田島を後にしますが、この合宿での経験は私のかけがえのない財産となるでしょう。共に学びし友人よ、ありがとう。この先、人生の節目に際して感じることや、日頃の感動を短歌に表現していこうと思います。

良き友と共に学びし江田島を離るる時ぞ心身燃ゆる

この合宿に来てよかった

（九州工業大学　情報工　一年　高田　誠）

今回、合宿に参加したのは先輩に紹介されたからでした。自分自身、大学に入ってから成長したいと思っていましたし、大学に通っていて、疑問に思えることがあったので合宿を紹介されたときすぐに行きたいと思いました。

実際、合宿に来てみて自分の思いを語りたいという学生がたくさん来ていて、この日程では足りないと思えるほどでした。講義後の班別研修では講義で感じたことがあまりにも多く、それをうまく言い表せないことをとても悔しく思いましたが、班員がそれでも受け止めてくれたことがとてもありがたく、うれしくも思いました。短歌の相互批評では三時間半という時間設定でも足りないくらいでした。「自分自身を見つめる」「その一点に集中する」ということで言葉の持つ意味の大事さを知りました。

思ひある若き人たち集まりて語る言葉に感銘覚ゆ

真剣に考へる学生の姿

（熊本県立天草高等学校　教諭　今村武人）

四年ぶりの合宿参加となった。やはり合宿に参加してみれば、学ぶことが多い。地区の勉強会にも参加できぬ状態で尚更そのことを感じた。村垣淡路守や松陰先生の言葉も皆と勉強してこそ生きてくる。特に今回は江田島の教育参考館を見学したが、本物に接することの影響は大きいと思ふ。私はもとより学生諸君にとっては貴重な体験になったのではないかと察する。ところで、その見学の行程に大講堂があったが、本当は当日は休日だつたさうである。それが見学可能になつたのは、前日に中西教授が大講堂を見学され、先生関係の団体ならばと特に合宿教室参加者の入室が許可された由である。何ともありがたいことであり、感謝したい。

また、今年の学生諸君はとても前向きに合宿に取り組まれたと思ふ。雄弁、訥弁とに関はらず、皆真剣に考へる姿勢が

伺はれた。話を聞くと、これまで合宿に参加した先輩学生の勧誘、雑誌『正論』、『サピオ』の広告を見ての自主的な参加ださうだが、大変頼もしく感じられた。次年度も参加してくれさうである。また同時にマスメディアの影響の大きさにも驚いた。合宿の様子を産經新聞に報道して頂いたが、多くのメディアによって広く国民の目に止まるやう願ひたい。

キャンプ火の周りに集ひて若人は江田島健児の歌を唄へり
樂しかる歌は夕べに響きつもさびし今年の合宿過ぎゆく

研讃を積む気持ちを新たにした

（神奈川県立小田原城内高校　教諭　原川猛雄）

先生方の心の籠もったご講義や発表・班別研修・江田島の海でのカッター体験・教育参考館の見学など、いづれも感銘深く心に残るものでした。レジメを開いてゐますと、先人の珠玉の言葉が目に飛び込んできて、偉大な魂に直接触れる思ひがします。そして、先生方のお話の様子がまざまざと浮んできます。あらためて、寝食を共にしながらの思想鍛錬の場に参加できたことの喜びと有り難さをしみじみと感じてゐます。現在の社会にこのやうな機会がほとんどないことを考へますと誠に貴重な合宿と思ひます。合宿後の日々の勉強や修練がより大切となつてきます。先輩・諸兄らと共に研讃を積んでいく覚悟を新たにしてゐます。

カッター体験

御講義の後は、各班に戻り講義のポイントを確かめ合ひながら、感想や疑問を班友それぞれが出し合って語り合ひ、御講義の内容を深め合ってゆく。

教官の声に合はせて若人らオールを漕ぎて沖に進みぬ
教官の隣りにすわりて舵をとる目にも眩しき江田島の海
日の本のいしずゑ支へし健児らのありし日の姿浮かびくるごと

第五班―男子学生―

無心に聞く、素直に聞く

（早稲田大学　法　二年　穴井宏明）

私は、去年の合宿が初めての参加だったのですが、今年の合宿では、無心に聞く、素直に聞くことを特に心がけました。合宿を終えてみて、心の氷が少し溶けたような気がしています。胸の奥が熱くなっているのを今でも感じています。

今年の合宿は班員にも恵まれました。自己紹介の時点で、「声が小さいです。話す言葉は魂がこもると言います。もっと腹から声を出して語り合いましょう」と、年下の学生に注意されました。講義後の班別研修も、共に感動し、余韻を味わうこともできました。

私は、今合宿で学んだこと、先輩方の話など国民文化研究会を通して学ぶ大切なことを下の世代へ伝えていきたいと思っています。

合宿で学びしことを後輩に伝えていかむと心に誓ふ

日本の歴史に恥じない人間になりたい

（熊本大学　理　一年　竹下文雄）

私は初めてこの合宿に参加したのですが、たくさんの講義を聴き、大きな衝撃を受けました。中でも東中野先生の「士規七則」の講義では最も考えさせられました。一つの志を一人の人間に伝えるということの意味、学問の尊さ、そして、我が国の歴史のたてのつながりの中で生き、生かされていると言うことを漠然とながらも感じました。

先人の志を大切にしていくことが、これからの我が国を正していくことになると確信しました。

私はまだ未熟ですが、勉強に励み日本の歴史に恥じないような人間を目指したいと思います。貴重な体験をさせて戴きありがとうございました。

天皇という存在と自分との関わり

（鳥取大学　医　一年　江頭一成）

私は今まで天皇という存在を漠然とした概念で捉えていた。学校で教わった、日本国憲法第一条の「天皇は日本の象徴」も言葉として記憶していた。今回の合宿で、吉田松陰の士規七則に初めて触れた。この中に、「人君民を養ひて、以て祖業を継ぎ、臣民君に忠して、以て父志を継ぐ」という一文がある。東中野先生はこの文に際して「天皇と国民は糸でつな

がっている」とおっしゃった。この言葉は頭で理屈では理解できているが、心から実感することはまだできていない。

今回、御製に触れてみてはどうかというアドバイスをいただいた。連綿と続いてきた日本の国柄と切り離せないであろう天皇という存在と自分との関わりについて考えてみたいと思う。

得たること多きに心まとまらずしばし休みて考へんと思ふ

先達の生き方を受け継ぎたい

（電気通信大学　電気通信　一年　中島誉主也）

今回初めての参加です。何よりも、この短期間に大変すばらしい講義を次々と聴けたことが嬉しかったです。事実を正確に知ることの大切さと必要性を感じました。日本の歴史にはその事実を正しく学んでいきさえすれば、自然に愛国心や人間としての生き方を見出せるだけの力があるように感じます。又、そのような歴史を築き上げてきた多くの先達には今こうして私が生きていることへの感謝がわいてきます。

特攻隊の方々の遺書を読むと、現代の我々よりもはるかに力強い生命を感じます。しかし「生きる」ことに執着することはなく、未来の我々になんらかの夢を託して散っていかれたように感じます。

私自身もそのような先達の生き方を受け継ぎたいという思いをこの合宿で強くすることができました。

カメラ・レポート11

二日目の夜、「吉田松陰の『士規七則』」と題して亜細亜大学教授・東中野修道先生による輪読導入講義が行なはれた。吉田松陰の文章を紹介される中で「人は繋がりの中に生き、生かされ、そして死んだ者とも繋がって生きているといふ歴史といふ生命の縦軸」について語られた。

日の本を仰ぎて見れば誇らしく先達の志を我も継ぎたし

日本の良さを見つめる

（明治大学　理工建築　一年　小柳雄平）

班員との話合いが最も私には為になった。同じ世代の学生たちに励まされる所が多くあった。「今の日本はどんどん悪くなっていく」と何度も耳にしてきたが、班員達の話を聞いているとこれからどんどんよくなっていきそうな気持ちにもなった。この合宿では日本の悪さを言うのではなく、逆に日本の良さを見つめている。良いものを観る、聴く、それだけでも、人間の心は豊かになっていくはずである。

日本の文化をないがしろにしてきたから今のような状態になってきたと思う。日本国民が、日本の文化を心で感じるようになったとき、さらに国際社会としてなくてはならない存在になるはずである。少しでも日本が日本らしくなるためにこの合宿で学んだことを生かしながら生きていこうと思う。

江田島で御国を思ふ仲間等の清き心を逞しと思ふ

自分の心の動きを知ることができた

（京都大学　総合人間　一年　中原有輝）

合宿初日には、全く未知の世界に飛び込んだような気がした。講義の内容も初めて聴くものばかりで、小柳先生は、「明治の精神」という演題でお話されたが、今まで自分で美しいと思える日本人の生き方について聞いたことはなかった。日本人のすばらしさを先生が誇らしげに生き生きとした眼差し、語り口でお話になったのも印象的であった。

教育参考館では、国のために我が身を顧みず勇敢に戦った日本人に触れることができた。これまで学んだ大東亜戦争とは、日本が侵略の一点張りであったため、頭をガツンと殴られたような気がした。

又、短歌相互批評を通して、いかに自分が一人合点して言葉を並べているかを知らされた。自分の心の動きを知ることができ、自分に対して素直になるきっかけを得ることができたように思える。

江田島に集ひし友らと語らへば己の思考の未熟さ知りぬ

勇気をもって行いたい

（筑波大学修士課程　地域研究　二年　寺澤知之）

自分の良心が正しいと思うことを勇気をもって行いたい。ただそれだけです。

待ちわびていざはじまりし合宿は飛びゆくやうに過ぎていきけり

みともらの創りし歌に向かひ合ひいかにありしとともになやみつ

沈黙と笑ひ声とをくり返し喜びと共に出来し歌かな

心より思ひぶつけし班員にいかに答ふかと我沈黙す

日本人としての根っ子を大切に育みたい

（九州工業大学　情報工　四年　安土茂亨）

私は今回初めての参加ですが、カッター体験や先生方の心のこもった御講義を通して貴重な体験をさせて頂きました。

最初はうまく話せなかった班員とも次第に打ちとけ最終日にもなると本音で色々な事を語り合うことができ、このまま分かれてしまうのが非常に残念に思われました。この合宿でできた仲間は特別な存在だと思います。志を同じくし、心の奥底を吐露し合える関係はなかなかありません。そのつながりを合宿が終わってからも続けていきたいと思います。

又、教育参考館で、祖国のために尽くしてこられた先人の方々の思いにふれたことや小柳先生の御講義をお聞きして、大きなつながりの中に自分が生き、生かされているのかと思うと非常にありがたい気持ちになりました。二十一世紀という激動の時代の中において日本人としての根っ子を大切に育んでいきたいと思います。

江田島で友と語りし五日間深き思ひで忘れたくなし
日の本を支へきたりし英霊の思ひ偲びて夜は更けゆく

「事実」の威力

（㈱アルバック　北浜　道）

話をされる山内先生のお姿に、我国文化の連続性と奥深さ

カメラ・レポート12

三日目の午前、国民文化研究会副理事長・元九州造形短期大学教授の小柳陽太郎先生による「明治の精神」と題する御講義が行なはれ、村垣淡路守や岡倉天心といった人物の日記や和歌を紹介しながら、その活き活きとした姿を参加者の前によみがえらせ、大らかな「明治の精神」といふことについて話された。

を感じ、圧倒されました。

冒頭で先生は、戦後教育は既に現在の私達の自己を形造つてをり、その否定は自己の全否定につながりとてもできることではない事、肝心なのは「歪まされ抜け落ちた何か」を知る事であると指摘されました。

戦後思想の代表を「民主主義」とすれば、それを戦後特にトラブルなく受け入れ得た事は、それ以前の民度が十分なレベルに達してゐた事を示してゐると思ひました。そしてそれ以前の「民度」について自分なりに知りたく思ひました。

言葉一つ一つを、語感に即し歴史的背景を思ひ返されつつ押へてゆかれるお話は、さうして確認された「事実」それ自体に威力がある事、そしてその故に私達がそれに殊更に何かを付加する必要は全くない事を感じさせるものでした。

今上天皇御製（千葉県全国豊かな海づくり大会）を読みて

海中にしばし止りし小平目に目を止め給ふ御心偲ばゆ

第六班―男子学生―

理解できない話を理解したいと思った

（日本不動産専門学校　一年　百澤大伍）

思うことや考えていることを緊張し、どもりつつ発表したのは初めてだった。あんなに緊張したのは久しぶりだった。そして、自分と違う考えを持った人が世の中には沢山いることに気づかされた。自分は講義についての知識を持っていないため、話したくても話ができなかった。その点、班友は知識があり、凄くうらやましかった。班別研修で思うことを分かりやすい言葉にできず、不甲斐なさを思った。でも久しぶりに自分で勉強してみよう、理解できない話を理解してみたいと思った。これは自分にとって大躍進でした。

夜の集いは最高でした。ぶっつけ本番で肉体芸ができたことと共に、班の全員でやり遂げたこと、その後、互いにたたえあったことに感動しました。すっきりした気分でした。

「真実を見ぬける眼」を確立したい

（九州工業大学　情報工　二年　小川剛史）

班員と共に話していると、勉強不足と分かっていつつも、他の班員の話についていけず、心狭い思いがした。しかし、その時思ったのは、知識が少なくとも、班員たちと話すうえでその根底となる精神や気持ちは劣らない。ここは年号・人物・出来事といった数値ではなく、どんな人がどんな思いに基づいて動き、歴史を構築したかを見、世の中を行き交うものから真実を見ぬける「眼」を確立していくことが大事ということだ。合宿では歴史の見方や和歌の創作を講義で学び、真実を見る眼を少し見つけるきっかけになった。

実際、真実を見ぬく眼を形成していくのはこの合宿を終え、

書物を読み始めてからになるだろう。人に流されることなく、自分の意見でこの時代の大海原を乗り越えていきたい。

海原は大波うねり高かれど泳ぎ続けむ岸に着くまで

歌を通じて特攻隊の方々の御心が直接伝わってきた

（明治大学　文　二年　吉永博彰）

私は大学での専攻上、万葉集に触れることが多いのですが、実際に自分で歌を詠んだことはなく、歌を作ることはとても新鮮であり、また美しいことであると感じることができました。英霊の方々の御心も今までは遠く、よく分かりませんでしたが、特攻隊の方々が出撃される前に詠まれた歌を教育参考館で目にした時、私の心に直接感じられるものがあり、また何か一つ自分の中に新しい何かが芽えた気がしました。

また、今回の合宿を通じて実際に得たところのものはと言えば、自分の知識や経験が明らかに足らないということ（気づき）であります。このことを念頭に、今後も様々なことを通して自分に磨きをかけたいと思いました。

早過ぎし日々を思へば我が友と語りしことを思ひ返さむ

相互批評を終えると班友への感謝がこみあげてきた

（関西学院大学　法　四年　村田　龍）

私が今回の合宿で得た最も大きなものは、友達との出会い

三日目午後の参考館見学の前に、防衛庁技官・山根清氏によりビデオ「天翔ける青春」の一部を紹介した後で「日本の将来のために命を捧げられたといふ事実を我々は偲ぶ必要があるのではないか」と指摘された。

です。普段の生活で出会う友達とは、なかなか本音を出しあい、日本の国について意見をぶつけあうことはできません。それが二・三日前に出会ったばかりの友達と出来るのは、この合宿の綿密に組まれたプログラムと短歌であると思います。

カッター体験で皆と協力して船を漕いで達成感を分かち合ったことは、確実に班員の結束を強めました。そして短歌相互批評では、自分の作った歌を発表し、皆に真剣に検討してもらい、協力しながらより素晴らしい歌をも作ることができました。私は歌を詠むこと自体が初めての経験でありましたし、相互批評を終えた後は、自然と皆への感謝の気持ちがこみあげ激しく感動を覚えました。

日本の国柄とはしきしまの道だと思った

（佐賀大学　理工　四年　片岡正憲）

今合宿では「自分の目で物を見、自分の目で歴史を感じる」ことと、天皇様、国、人と繋がりを回復することの二点が心に残りましたが、これは和歌の世界と思いました。日本の国柄とはしきしまの道だったのだと思いました。

班員の歌を味わい心を交わした喜び、教育参考館の拝観では英霊の歌から国との繋がりを感じた体験、東中野先生の「日本人が天皇陛下を仰いできたのは、他を思い慈しみの心をもちたいと願ってきたから」とのご指摘から、万物へ心を働かそうと思った合宿でした。一つ一つの繋がりに日本は守られ、創られてきたことを知り、改めて和歌を学ぼうとの思いが致しました。そうした繋がりに生きる喜びを思い、学友と日本の心を交わし、日本再生の力になりたいと思いました。

言い知れぬ一体感を覚えた

（亜細亜大学　国際関係　三年　大橋広和）

今年で三回目の合宿となった。一回目は班友との語らいと輪読、そして短歌の創作、相互批評が印象的であった。その時の班友とは今も交流が続いている。今回も共に参加した班友もいる。今回はなかなか班員と心を割って話せないもどかしさがあった。だが、短歌相互批評で班員達との間にあったよそよそしさも一気に溶けた。お互い率直に意見を言い、自分の気持ちを真剣に伝え、皆で一つの短歌について考える。この作業を通じて、何か言い知れぬ一体感と満足感を覚えた。私は心から短歌とはいいものだと思った。合宿後も班友たちと一杯酒でも飲みながら語らいたいものだと思った。

合宿後も続けゆきたし班友と共に学びに励み努めん

踏みこんだ国家・道徳を語って欲しい

（北海道大学　農　四年　石田晃一）

中西先生のご講義は素晴らしかったと思う。他の先生の講義も良かったが、もっと踏みこんで国家、道徳を語って欲し

かったと思う。今回、合宿の参加の目的は道徳とはいかなるものか、何かヒントを得たかったからだ。中西先生が指摘しておられるように、「進歩と伝統」「個人と共同体」のバランスをいかにとるか、つまりは平衡の叡智が求められているように思う。

しかし、講義や班別討論ではあまりに安易に愛国心や心と心のつながりみたいなものが語られ、私もその土俵の中に組みこまれてしまった。更に不快なのは、自分の意見を要求してくることだ。悩みぬいているからこそ、語り得ぬこともある。言葉を出したくない心情を分かって欲しかった。

私達の世代に課せられた「宿命」を果たしていきたい

（日本青年協議会　本庄寛行）

歴史に迫る姿勢（言葉への厳粛さ）を改めて省みさせられることが多く、自分が先生や友の思いをいかに受けとめようとしていなかったかを痛感する連続でした。この痛感を忘れずに、友との語らいや学問に努めていこうと思いました。

講義では中西先生の講義で「宿命」という言葉が深く心に残りました。これから日本が直面する危機とは何かを正確に認識し、それを克服していかなければならない「宿命」が自分たちの世代一人一人に課せられていると思われました。先生が述べられた「①国家としての原則を無視して経済を優先してきたこと」「②大東亜戦争観が歪み、世界を認識し確か

カメラ・レポート14

「教育参考館見学」　教育参考館の歴史について詳しい説明を受ける参加者。

な自分を持つことが無かった事」「③民主主義の考え方を間違ったこと」という三つのご指摘を胸にうけとめ、日々その克服の為に精進して参りたいと思いました。

回天を生みしは廃れし君臣の義正す為と述べし大人はも
二十歳とふ若さながらも一身に国背負ひゆくその覚悟はも

第七班―男子学生―

勇気と誇りを持って生きること

（早稲田大学　政経　四年　池田光政）

今回初めて合宿に参加させていただきました。五日間、先人の偉業を偲び、海軍兵学校を見学する中で感じたことは、人の力の偉大さです。松吉正資命を始め、特攻に赴かれた勇士の方の言葉を偲ぶ中で、人はここまで勇気と誇りを持つことが出来るのかと深く思われ、その思いは体の中を満たしていきました。

我が国の危機が叫ばれて久しくなります。しかし、海上自衛隊の方も特攻隊の勇士の方も、そして私たちも同じ人の子です。同じように強く誇り高く生きることが出来るはずです。日本を蘇らせることが出来るはずです。この合宿で様々な方に励まして戴いた事を忘れず、まずは勉学に励んで参ります。英霊に千分の一でもお応えする自己でありたい。

泳ぐことあたはざりける赤帽も遠泳成し遂ぐと伝へ聞きしも
先人の勇気と誇りと力をば見せられて我は励まされたり

日本文化のことをもっと学ばなければ

（慶應義塾大学　総合政策　二年　川上裕央）

「一国の独立は公にあらず、私にあり」を、実感した実り多き合宿となりました。来年から米国の大学へ留学します。それまでに、日本のこと、日本文化のことを、もっと学ばなければという意識が高まりました。その目的は、この合宿を経て一つの明確な形となったと思います。この有意義な合宿が今後もずっと続くことをお祈りして、感想とさせていただきます。有り難うございました。

願はくばこの瞬間がまだ続けばと友らと語らふ夏の江田島

将来の日本はまだ大丈夫だと安心しました

（皇學館大学　文　二年　下村俊昭）

この合宿に参加して本当に良かったです。私は現在六十二歳ですが、昨年、伊勢の皇學館大学の文学部国文科に入学し、現在二年生です。神職と国語の教師（非常勤）になるべく、学んでおります。

班単位の六名の合宿生活は、自分以外は皆二十代前半の若人で五日間いろいろなことについて話し合いましたが、みんな正しい、しっかりした考え方の持ち主で、こういう頼もし

い学生のいる限り将来の日本は、まだまだ大丈夫だと安心しました。ですから、この輪をだんだん広げて行けば良いと思います。来年もぜひまた来ます。その時は、口コミで友達を連れて来ようと思います。

よみがへれ遠き正しき正論に集ひ来たれよ若きはらから

先人におこたえする自己となりたい

（東京大学　文　三年　石村善之亮）

私は今年で四回目の参加です。毎年楽しみにしているのは、友との出会いです。私はどちらかというと、コミュニケーションが下手な方ですから、最初の頃は会話さえ苦労しました。でも慣れてくると本当にいろんな人と様々な話題で話し合えるようになりました。私は人との出会いは絶対に財産になると思っていますから、合宿で出会った人との出会いは、ずっと大切にしていきます。

最後に一番印象に残った事は、教育参考館で拝見した、特攻隊の方々の遺書・書簡です。そこに見られる爽やかさと潔さに心を打たれました。国家の一大事を目前にして、私も先人の、せめて千分の一でもいいので、何事にも動じない自己と行動する勇気を持ちたいと思いました。

思ふこと三十一文字におさまらず我が未熟さを思ひ知らさる

カメラ・レポート15

戦艦「陸奥」の主砲の前で説明を受ける参加者。教育参考館には幕末から先の大戦までの海軍関係者の書や遺品などが多数展示されてゐる。

貴重な友との出会い

（宮崎医科大学　医　五年　宮元周作）

日本中には、これ程多くの人が、それぞれの思いを持って散らばっているのですね。どんな人がどれくらいやって来られるのか、不安と緊張と期待を秘めてこの江田島の地に足を踏み入れました。そこで出会った七班の六名は、みな個性的で力強く、快活な人ばかりでした。私がこれまで抱えてきた疑問、もしくは講義を通して生まれた疑問を全て彼らにぶつけてみると、的確で、それでいて一筋縄ではいかない答えが返ってきました。貴重な出会いでした。一人じゃないんだ、日本中のどこかで誰かが頑張っているんだ。そう実感した合宿教室でした。本当に来て良かったです。

道も見えぬ暗闇に独り立ちぬれど誰かのこへに灯一つ
また一つ灯ともる暗闇を未だ手探りされど前進

英霊は今の日本を見て如何に思われるだろうか

（福岡工業大学　社会環境　一年　近藤将勝）

教育参考館では何か目には見えないけれど、どこか英霊の思いが漲っているような、神聖なものを感じ体が震えました。展示を見て行く中で、特に心に残ったのは、特攻の父・大西瀧次郎中将の、敗戦後自決される前に残された遺書中の「日本人たるの矜持を失ふなかれ」という言葉です。中西先生の講義にもありましたが、戦後日本は個人と共同体のバランスが崩壊してしまい、公を担う感覚がおかしくなり、精神の危機とも言うべき状況にあります。今日の我が国を大西中将が見られたら、どのように思われるだろうかと思わずにはいられませんでした。夜の慰霊祭では、空には雷鳴が轟き、それを聞いたときには、天の英霊様はお怒りになり、お悲しみになられておられる様に思われました。

危機の時代は国家の運命と自己の運命が限りなく接近する

（日本青年協議会　別府正智）

中西講師の講義中「宿命」と言う言葉が心に残りました。「今本当の危機を迎えている。日本は二〇二〇年程までには日本の行く末は決定してしまうであろう。日本の命運は皆さんにかかっていると云ってもよい。危機の時代には国家の運命と個人の運命が限りなく接近する」との言葉には、我らの世代が背負っている「宿命」なるものを感じさせられました。自らの運命と国家の運命のつながりを思うとき、小柳先生の講義で紹介された、名も知られぬ一外交官・村垣淡路守範正の姿が大変心を打ちました。「えみしらもあふぎてぞ見よ…」の和歌には、国家を担う気概が満ち満ちており、「おろかなる身をも忘れて…」には、飾りの無い心がそのままに謳われている。何と大らかで力強い人だろうかと感動致しました。我らに求められる精神とは、古人の言葉の中にこそ求めて行

くのだと深く思わされました。

第八班―男子学生―

真の学問とは

（京都大学　文　四年　服部源憲）

慰霊祭がとりわけ印象的でした。悪天候の中での挙行となりましたが、雷の音や光、雨滴、風など、あらゆる自然現象が、英霊の方々の私達へのメッセージであるかのように感じられました。やはり私達は、ただ知識として日本の歴史を学ぶのではなく、このような「体験」を通して、祖先、先人とのつながりを実感できるのだと思いました。

中西先生や東中野先生が、真の学問とは知識の上すべりに終わるのではなく、心に沿うもの、深く心に刻みつけるものだと述べられていました。このことはこれからの学生生活の中で、常に心に留めておきたいと思います。

今年の合宿も素晴しい班員たちと班付の先生方に恵まれ、とても実りある合宿となりました。感謝申し上げます。

兼田裕光君へ

胸中の思ひを和歌に詠み込めし君の表情晴れやかなりぬ

三日目の夜、元高千穂商科大学教授・名越二荒之助先生による講話「世界に生きる日本の心」で先生は、学徒出陣し沖縄海域で戦死された松吉正資さんの文章や和歌を引用しつつ、戦時下の学生の心情と思想について自らの体験を語られた。

言霊のさきわう国

（明星大学　大学院　人文　一年　高橋希久朗）

言霊のさきわう国、日本。国が乱れる原因は言葉の乱れにあると感じた。短歌を創作して、心を表現し、伝え、くみとることの難しさを痛感した。毎日の生活の中でどれだけ己の心と向き合っているだろうか。ご講義の中で「言葉は人を生かす」という言葉をいただいた。言葉の一つ一つが力を持っているのだ。その一つ一つに感謝して大切にしていかなければならないのではなかろうか。教育参考館で英霊の御遺書を読んだ時、私は涙が止まらずその場に立ちつくした。言葉に集約された英霊の生き様と母を想う心に泣いたのだ。

先人に恥ずることのない生涯を、後世に伝えることが私の目標である。心を震わせる言葉と、その言葉を生み出すに足る生き様を遺したい。

言霊のさきはふ国に己が身の生き様ひとつ遺したく思ふ

美しい歴史を築く

（皇學館大學　文　四年　星野洋太）

狭い伊勢の地から飛び出し、違う大学の人と話し合ううちに、忘れていた初心を取り戻す事ができました。

私としても神道を学ぶ立場から、友達に何かしらのメッセージを伝えることができたと考えますし、逆に全く違うアプローチからインスピレーションを受けました。我々の為すべき事は、連綿と受け継がれてきた皇国の歴史を、先人に負けぬように、さらに美しいものに築き上げてゆくという気概を持って日々の生活を営む事にあるのではないでしょうか。そうして我々が自信を持ち胸を張る事で、次の世代により高いステップで受け継いでもらいたいと常々考えておりますが、今回の合宿で、そのような決意をより強固なものにすることができました。

いにしへの歴史受け継ぎ美しく我々の手で受け渡しゆかん

みんなで語り合ったよろこび

（慶応義塾大学　商　四年　引地　海）

今回参加して最も勉強になったのは、同班の同年層の友人との語らいであったと思う。勿論先生方による素晴しいご講義はためになったのだが、そもそも日本に関する知識が少ない私にとって、語らいの中で感じることの方が素直に吸収できた。

私は十一歳の頃から約七年間アメリカで生活してきて、「日本人であること」を常に考えなければならない環境の中に育った。過程は違えど、同じように「日本人であること」を追究している、同年代の友人達の言葉はとても刺激的であった。最終日の前夜は、夜遅くまで日本についてみんなで語り合ったが、その時のよろこびは忘れない。

実生活に戻ってみなければこの合宿の意味はわからないと思うが、新鮮な出会いがあっただけでもうれしく思える。

明日(あした)には別れつげゆく友達と時惜しみつつ語らひにけり

心嬉しい事

（明治大学　理工　三年　月野木匡彦）

いざ合宿を終えてみると、心嬉しい事はなはだしい。どうしてこんなに様々なことを学んでみたい、本を読んでみたいと思えるのであろうか。たった五日間しか経っていないのに。

様々な先生方のご講義をお聴きして、人としてのあり方、自分としてのあり方、歴史や家族などのつながり等、日本人としての自覚に目覚めさせてもらった気がした。

私は建築を勉強し続けようと思っているが、これまで日本の伝統的な建物などには興味を持つことができなかった。しかしこの合宿を踏まえて、自分の考え方が一変したことに気づく。日本人であるならば、まず伝統的な建物について知り、それを自分のものにできるようになることが大事だと思った。

大変お世話になりありがとうございました。

日本のことをよく知らない自分

（九州共立大学　工　一年　兼田裕光）

この合宿前には、戦争というものについては暗い部分しか

カメラ・レポート17

「慰霊祭」。戦時、平時を問はず、祖国日本の為に尊い命を捧げられた方々の御霊を、屋外に設営された祭壇で心静かにお慰めする。

私は見ることが出来ないでいて、もし大東亜戦争について聞かれたら、日本が悪いかもしれないとしか言えなかったでしょう。しかし合宿で先生方のご講義を聴き、堂々とした先人達の活躍を見て、そして感じろというような言葉をもらい受け、日本人なのに今まで日本を恥ずかしく思い、日本のことをまだよく知らない自分が見えてきました。この合宿に来て良かったと感じました。

また、班内での短歌批評が一番の思い出となり、素直に表現するという短歌の基本を、これからの生活で目指したいと思いました。

この合宿を教えて下さった宝辺先生に感謝します。

窓見やり外の景色の雨空に友との別れさびしく思ふ

人と人とのつながりに感謝

（高校卒業　折田安正）

今回何もわからぬままに参加しました。しかしこの合宿は己の心の中に強く残ることになりました。着いてすぐ班に分かれ、全く初めて出会う六人と同じ班で行動することになり、不安をかかえたまま一日目を終えましたが、日を重ねて心にひびく多くのご講義を聴きながら、何よりも強く感じたのは人と人とのつながりの面白さでした。

合宿を終え、日本国の歴史、精神を学ぶことで自分なりの考え方が少しできるようになり、短歌創作を通して自己を表現し、相手の心を感じとり、そして何よりも友人たちと一緒にいることが楽しく、刺激的で充実した日々でした。

このような機会を与えてくれた父親と、今ここに自分が存在できる周りのすべての人、祖先に対し感謝します。

真剣な話し合ひ

（札幌西陵高校　教諭　本田　格）

毎年同じやうに行はれる合宿だが、一つとして同じ合宿はない。つねに新しい出会ひがあり、新しい発見がある。

私自身合宿生活は苦手な方だが、合宿の良さは理解できるつもりだ。合宿を終へ、今回もまた何か力を与へられたやうに思ふ。

学生班の班付きとして、年若い人たちの生き生きとした真剣な話し合ひの場にゐることができた。助言も何も適切にできなかつたが、本心を語り合ひ、一生懸命な姿を素晴しいと思つた。

言の葉に頭ひねれどなかなかに歌の姿となること難し

英霊たちの姿が浮んだ

（久留米高校　講師　小林国平）

私が今回の合宿教室の中で最も印象に残っている事は、名越先生の御講義の中で目を閉じて聴いた戦艦大和の十三発の

号砲である。私は以前吉田満氏の『戦艦大和の最期』を読んだ事があって、その中の国を守らんとの思いで散っていった英霊たちの姿が脳裏をよぎった。大和の号砲は胸に響き、力強く、また悲しい叫びのようでもあった。今の日本をあわれみ、悲しむ叫びであり、「立ち上がれ」と今を生きる私達日本人にぶつけられた激しい叫びにも思われた。鳥肌が立ち、一時豪音が耳から離れなかった。今年は社会人一年目で三日間しか参加できなかったが、江田島という日本人にとって神聖な地へ足を踏み入れる事が出来た時間は、日本人として今後の私にとって大きな財産としていきたいと思う。

第十一班―女子学生―

声を合わせて音読する気持ちよさ

（首都師范大学　国際交流　影近育美）

仲間達と歌を音読すると自然と全員の声がそろう。歌に限らず感動を共有したいときは、私達は小学校から全体で一つの声を出してきた。あたりまえの事である。そして天皇の御製を読む時は姿勢を正し正座する。これはかつてあたりまえの事であったそうである。なぜ忘れさられてしまったのであろうかと考えても、今の私では答えは出せない。今はただ仲間達に合わせて正座し、当時の事を考えながら音読する。

四日目の午前、神奈川県立厚木南高等学校教諭・山内健生先生による講義「日本の国柄」で先生は「歴史的な国家」の視点から見れば憲法第一条の意味するものも見えてくるはずであるとして、「これまでの日本の歴史を事実に即して静かに振り返る必要」を訴えられた。

みんなで感動を共有しようという気持ちがなくなったら、合図一つで各個人バラバラに音読するような時が来てしまうかもしれないと思う。短歌を声を合わせて音読するという、日本の気持ちよき習慣を失っていくのは惜しく思う。これからもこのような習慣は残していかなくてはならないと思う。

まどろみてまどろみの中ゆきこえ来るなじむ師の声ここちよきかな

私達が学ばなければ…

（東北女子大学　家政　二年　今美穂子）

今回この合宿に参加することが出来て、本当に良かったと思っています。参加前は、四泊五日は長いと思っていたのですが、振り返ってみると、毎日が慌しく過ぎ、とても短く感じました。

まず班別研修では、自分の考えを頭で整理し、それをまとめてわかりやすく話すということが、こんなにも難しいものだったのかと痛感しました。そして、考えを述べるには、事実を知り体験することも必要だと感じました。

また、講義の中で一番心に残っているのは東中野修道先生の吉田松陰の御講義です。その中で松陰は自分の命を懸けて日本のためにペリーの船に乗り込もうとしたというお話しをされました。私はその話を聞いてそこまですることが本当の学びなのではないかと感じました。その後の班別研修で班員の一人が「私達が学ばなければ、昔の人たちがしてきたことも学べない」と言っていたことが、すごく印象に残っています。この言葉を聞けただけでも、合宿に参加した意味があるように思います。

さらに、合宿中は短歌を生まれて初めて創るという機会もあり、「教育参考館」で遺書を拝見させて頂いた折、その想いを率直に短歌にすることが出来たことが、とても忘れられない思い出となりました。

最後に、たくさんのことを教え、諭し、そして笑いも頂いた先生方、そして班の仲間と一緒に出会い、学びあえた事を本当に嬉しく思います。この合宿を機にもっと日本について、自分について考え続けたいと思います。

日本といふ国に生まれて今を生き思ひ出たちは忘れがたかりし

日本が誇れる先輩について学びたい

（福岡女子大学　文　一年　馬場智茶）

この合宿は本当にきつかったけれども、終えてからの達成感は、気持ちのいいものです。先生方の御講義を聞いたり、班別研修で自分の意見を言ったり友達の意見を聞いたりする時も、精神を集中し、考え抜いた気がします。毎日の生活の中で、ゆっくりと目を閉じて考えるような時間はなかったので、じっくり考えながら自分の意見が徐々に出てくるようになったことは、うれしいことでした。しかし、御講義は難しく、班別研修で友達の意見を聞き、そんな見方は私には出来

ないと思い、知識の乏しい自分が本当に恥ずかしくなりました。これからも日本が誇れる先輩方について学んでいきたいです。そして日本がヨーロッパとアジアのかけ橋であるということをいろいろな人に伝えられるくらいになりたいです。

先人の血潮受けつぐこの身なればその生き様を学びて伝へん

最良の友人達と出会えた

（宮城学院女子大学　学芸　二年　三瓶華子）

今回の合宿は、先生方のお話しを聞き班全員で理解を深めたり、短歌を創ったりするなどの課題をこなすのにギリギリの時間しかなく、班員同士で深い交わりがあまりできなかったことが残念です。もっと、他の班の人達とも、いろいろな話ができればよかったと思います。また、班長の長内先生の言葉は全てに重みがあり、先生とお会いできただけでも、この合宿に参加して良かったと思いました。国家、文化に対する考え方を深めるには不十分な時間でしたが、出会いのチャンスとしてはとても有意義なものでした。出会いは一期一会といいますが、最良の友人達に出会えたことに感謝します。これは今回の合宿で私が得た最も大きいものでした。ありがとうございました。

空見上げ遠きあの日に思ひはせ友の笑顔に心満たさるる
友と見し明けくる空の夏の雲同じ気持ちで言葉かはさず

戸田建設㈱青山直幸先生による「創作短歌全体批評」。全参加者の歌稿をもとに作者の気持ちをたどりながら批評し、添削が行なはれ、相互批評のポイントを話された。

改めて身近な人々を大切にする気持ちを学ぶ

（慶応義塾大学　文　四年　山口蝶子）

今回、二度目の合宿でしたが新たに学んだことがありました。それは、祖先を敬い大切にするためにはまず自分の両親、祖父母や家族を大切にしなくてはならないということです。合宿では様々な事がありましたが、中でも教育参考館で若い人達の出征前の遺書に触れたとき、彼らの祖国や家族への想いを、もっとたくさんの人に知ってほしいという気持ちになり、さらに慰霊祭では、「私達の祖先が、いつもそばにいて私たちを見守っていてくれているのだ」ということを実感しました。そんな祖先に対して私の出来ることは彼らを偲び自分の身近にいる人々を大切にしていくことなのだと思います。これから私は社会に出ていきますが、この合宿で学んだ事を忘れずに生活していきたいと思います。

父母の深き願ひを受けとめて力いっぱい生きたしと思ふ

五日間の合宿を過ごして

（東北女子短期大学　二年　安藤　恵）

私は初めてこの合宿に参加しました。最初は不安で仕方なかったのですが、日々過ごしていくたび、仲間にもうちとけ、いつのまにか、不安は、なくなっていきました。

諸先生方の講義をお聞きして「自分はあまりに日本を知らなさすぎる、もっと日本について勉強しなくてはならない」と感じました。また、班別研修などにおいては、自分の考えを述べ、そして仲間の考えを聞き、普段の生活では得ることのできない何かを学びとったようにも思えます。

こんなに充実した合宿に参加して本当に良かったと思っています。長内先生をはじめ国文研のみなさん、本当にありがとうございました。

江田島で不安と期待抱きつつ仲間と共に学びを始める
合宿で友らと心かよはせて不安の二文字いつしか消える

第十二班―女子学生―

日本人に生まれて良かったと嬉しく感じた

（京都産業大学　外語　四年　大河内ルデヤ）

日本の事を学び、日本人で良かったと素直に嬉しく感じました。班別研修では回を重ねる度に、本音での話しが出来るようになりました。とても嬉しかったです。この合宿がなければ出合うこともなかった仲間と、こうして日本のことについて語り合える……奇跡に近いこの出合いを、この先も大切にしていきたいです。

私は日本を学ぶとき、頭での理解よりも、心が何かを感じていくことが大切だと気付きました。小さな事にも心を動か

し失いかけていた日本人の情緒を取り戻すきっかけとなりました。

日本人であることを誇りをもって言えるように、学びそしてそれを実行にうつしていきたいと思います。

日を増して仲深まりし乙女らの熱き語らひ尊しと思ふ

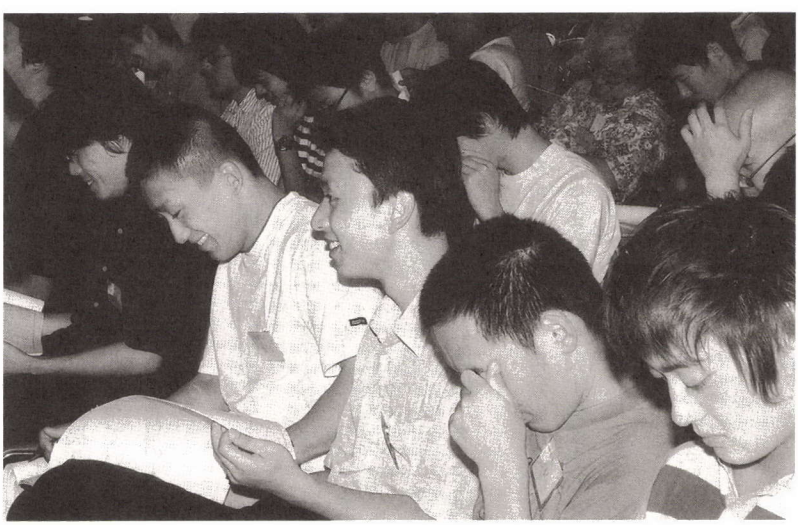
日本のことがどんどん好きになった

（恵泉女学園大学　人文　四年　原川　泉）

私がこの合宿に参加したのは、島に興味があったからです。島と云えば自然にとても恵まれているというイメージがあります。だから江田島と知った時惹きつけられました。学校生活最後の年に当り、自分自身について眞剣に考え、そしてこの時を本当に大切に過したいと思いました。

常日頃人と話すのが大好きな私、だからこの合宿で全国から集った様々な大学の人達と本気で話せまた聞くことが出来るという事で、どきどきした心で当日を待ちました。

私は日本史が嫌いで苦手だった。自分の国が好きだとは言いたくなかった。だけど合宿五日間の多くの人の言葉によって、日本の事がどんどん好きになっていきました。ここには一生懸命ひとつになろうとする情熱と真剣さがありました。普通の受験のための日本史を勉強してきた私には、とても新鮮だったし、全く違う日本の今までの道を知る事が出来ました。こんなに素晴らしい日本に生まれ、その心を受けつぎ持っ



「創作短歌全体批評」の一コマ。作者の気持ちを丁寧に辿られ、時にユーモアを交へつつ言葉を直される青山先生の批評に、共感の笑顔がこぼれる。

た「日本人である自分」に対し、少しずつだけど好きになれました。日本を真に愛し、真剣に考える先生方の目はとても優しかった。

ここには全てを書くことは出来ないが、私には今までの人生に無い経験をすることが出来ました。これからの人生の方向を変えていくだろうと思います。多くの話を聞いてくれた班のメンバー、そして先生、御講義をして頂いた先生、この合宿を支えてくださったスタッフの皆様、本当に有難うございました。

存在すべてのものに命あり気づきし瞬間愛しさあふるる

日本の心を知り、その本当の姿を垣間見た

（中村学園大学　流通　三年　倉富美幸）

私がこの合宿に参加したいと思ったのは、海国の島、江田島の教育参考館が見たい、たゞそれだけの軽い気持でした。江田島が世界に誇る海軍の島だということは以前から知っていました。教育参考館があり、見学を実際することが出来、本当に心に残り、感動しました。教育参考館が併設され、威厳に満ちたその全体の姿は、ある意味で身ぶるいが起こるような感動を覚えました。私は戦後の生れで、何も出来ない無力な人間かもしれませんが、もっともっと若い人達に伝えてゆきたいと思います。この合宿で日本の心を知り、日本の本当の姿を垣間見ることが出来て、その心は大きくなりました。

合宿のとても厳しいスケジュールの中でありましたが、立派な先生方の講義を受け、体力を使い、親しい友人との交流をはかるという、とてもぜいたくな生活が出来たことは、とても幸に思いました。また元の生活に戻りますが、こゝで得た事を忘れず、生きていければと思っています。

我が心友の心を胸にひめさあ旅立たう希望の未来（あした）へ

自分の目を開くことが出来た

（宮城学院女子大学　学芸　二年　桑原史織）

四泊五日の合宿を終えて、今まで自分の中で目をつむり、事実を見ようとしていなかった自分の目を開くことが出来たように思います。自分の中の思いを表現する言葉をいかにして築きあげていくのかは、自分の頭で考えを見い出すしかないと実感しました。

班別の研修を重ねるたびに、自分の口数が次第に増えていきました。心に生まれた言葉を表す喜びを知ったからです。自分を外に出すことが苦手だった私にとって、この事はこの合宿で得た何よりも大きなことです。

心から申し上げたいこの思ひ健康でゐて下さいいつの日までも

無関心な日常生活を強く反省させられた

（東北女子大学　家政　二年　對馬周子）

この合宿で何よりも感じたことは、自分がいかに無関心であったかということです。合宿で学んだことは新しい知識となり、その得た知識とともに様々な事を考えることが出来ました。

四泊五日という限られた時間の体験は初めてのことばかりでした、カッター体験はつらいと思いながらも皆で力を合わせて進む喜びを感じとても嬉しく思いました。

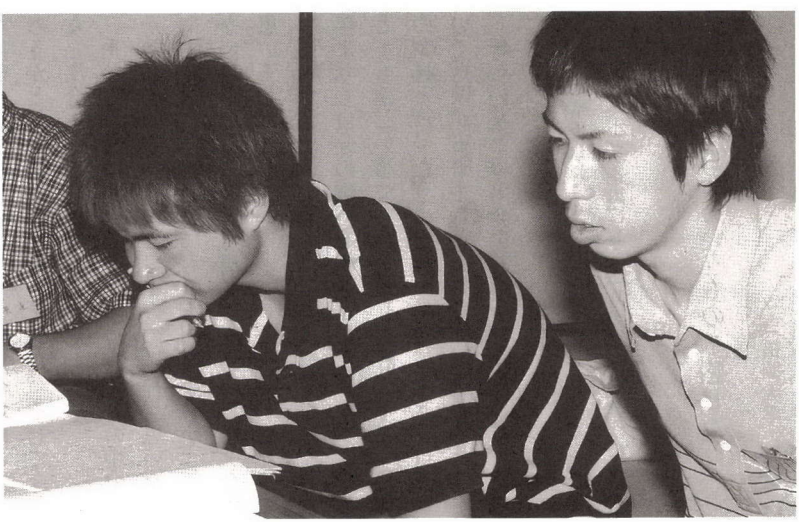
特に旧海軍兵学校への野外研修で、教育参考館の見学では、戦争に参加した多くの英霊の遺品を直接目にし、愛国の心、その熱い思いを感じ、とても悲しいような、うまく表現できない気持が込み上げてきました。また慰霊祭での不思議な雰囲気、短歌の創作など新たな知識となりました。

新しき友と語りし言の葉は我が胸内に深く残れり

いい友達ができた事を嬉しく思う

（東北女子短期大学　生活　二年　中嶋紘子）

この合宿では、多くの人と出合い、色んな方々の意見を聞くことが出来ました。良い友達が出来た事を嬉しく思っています。班員と話しをしてみて、同年代でとてもしっかりとした意見を持った彼女達を尊敬しました。同時に自分の知識の



班別による短歌相互批評。班員の歌を一人づつ皆で作者の気持ちを確かめながら、歌の表現をより的確になるやうに添削していく。

無さや、表現力の無さを感じ、自分自身の課題を見つけることが出来ました。それにまた、戦争についてあんなに眞剣に語りあった事も思い出の一つです。今まで自分が知らなかった事を知ることが出来たし、自分の意見を素直に言える事が出来て嬉しかったです。

もう一つ印象に残っているのは、カッター体験で、手に水ぶくれができるほど頑張って漕ぎました。教育参考館の見学はとても印象深いです。今まで話を聞いたり活字を通して見ていたものが、あんなにリアルに心に伝わってくるとは思いませんでした。特攻隊の方々の遺書は、自分の生き方を考えるきっかけにもなりました。先人が後世に生まれてくる日本人の為に、命を賭けて戦う姿に感動し、自分は今までどんな風に生きて来たんだろうと思いました。

この合宿では勉強だけでなく、様々な体験を通して、得るものが多く、とても充実していました。この合宿に参加させて頂き大変有難うございました。

夜中まで友と語らひ学びあひそれぞれの道今歩きだす

すばらしい友と出会える事が出来た

（福岡女子大学　文　二年　黒岩礼子）

今年再び参加したのは、去年の参加によって受けた印象が一年を通じてずっと心に残っていたからです。やゝ不安がありましたが、今年は去年とは違う心境で、「どんな話が聞けるだろうか、また私の知らないことを沢山学べるんだ」という期待に溢れたものでした。また今年はどんな友に会えるだろうかという楽しみがありました。そして今年もすばらしい友と出合えることが出来ました。

先生のお話の中で「人とのつながりの中で、人は生き、生かされている」という日本人の精神、思いを実感しています。去年は自分がいかにものを知らないか、いかに言葉を知らないか、ということを痛切に感じました。今年も同じことを思いました。

短歌創作では、去年は本当に悩まされましたが、今年は去年よりも自分の気持をすっとことばにすることが出来ました。とても嬉しい事でした。相互批評の中で、班付の先生に自分の気持とぴったりの言葉を教えて頂き、自分としても満足のいく短歌が出来ました。本当に嬉しかったです。

「新しい友との出会を期待し、楽しみにし、来年もぜひ参加しよう」と今私は思っています。

清掃の折に
床をはふ小さき虫にも心ありつぶさぬやうにと気をつけて掃く

祖国の生命（いのち）というものを感じた

（福岡大学　経済　卒　柴戸喜子）

今合宿で二つの事を学びました。

一点目は、国文研の先生方が話された言葉からでした。し

みじみと実感をこめて話されました。こんなにまで自己の思いや心をこめて話すことの大切さを知り、驚きと共に深く感じ入りました。和歌の創作という体験を通し、「言葉は生きている」という実感と言葉の持つ力を考えさせられました。

二点目は、江田島教育参考館で英霊達が、手書きで書かれた遺書に触れた時でした。今回英霊達が征かれる直前に墨で書かれた一つ一つの文字――「無我一念」「護国」「必沈」――等に本当に自分の生命や思いをのせて書かれている事を感じました。本当に此の国を護ろうと戦われたお心を偲び、これまで恐ろしいという思いで、目をそむけていたことが申訳ないと思いました。私の中に祖国の生命を感じる瞬間になりました。今までずっと心の中にある殻が打ち破れたのでないかと思います。本当の意味で歴史とのつながりを実感したのだと思いました。

よき合宿となり得たことは師のあたたかきみ心ありてこそ

第十三班―女子学生―

日本人としての誇りを持てるようになった

（上智大学　文　三年　青砥敬子）

私は自分が日本人であることに誇りを持てずにいました。そして、日本という国に対しても誇りを持てませんでした。

カメラ・レポート22

「夜の集ひ」は屋外でキャンプファイヤーを囲みながら、班や大学別に寸劇や歌が披露された。合宿最後の夜、心の通ひ合った友等とのこの一時は忘れられないものとなった。

それは何故か。私が戦後教育という偏った考えの下で育てられ、自然と日本人であることに嫌悪感を抱かされたからです。

私は中学生の頃から英語が好きでした。英語を勉強していくうちに外国人の友達ができ、交流する機会が多々ありました。そのような中で当然私は日本人を代表する一人として接しなければなりませんでした。しかし、前にも述べたように私は日本に誇りを持っていませんし、誇りを持てない日本について勉強したことはありませんでした。従って、私は自国に敬意と誇りを示す外国人の前で自信のない日本人をさらす結果となってしまったことを恥じました。

日本についてあまりに知らないことが多過ぎました。いや、意図的に知らされなかったと言った方が良いでしょう。だからこの合宿に参加する機会を与えて下さった方々には本当に感謝しています。今までに受けたことのない衝撃が心を走り、目からうろこが落ちたような思いです。事実を正しく認識することの重要性を痛感しました。そして、正しい認識ができると自信が持てるのだと思いました。実際、合宿で先生方が伝えて下さった事実は、私に日本人であることへの誇りと自信を与えて下さいました。先人の優れた精神が私たちの中に続いているというお話も大きな支えとなりました。この素晴らしい伝統と万世一系の歴史を持つ日本。このつながりをしみじみと感じると同時にうれしくもあり、ほっとするのでした。

もっと知りたい、そのために勉強する必要が私にはあると感じています。この合宿で芽生えた意欲をもって一層学びに励みたいと思います。

祖先とのつながり尊しと感じたりはじめに古事記読みて学ばむ

日本が少し見えてきた

（人間環境大学　人間環境　二年　片山里子）

私は高校まではただなんとなく日本は戦争で悪いことをしたんだ。何でこんなことをしたのだろう。日本って馬鹿だなあなんて思っていました。しかし、大学に入学し様々な講義を受けるようになり、諸先生方の話を聞いた時は衝撃を受けました。先生方から南京大虐殺の真実や日本人の心のよさなどを教えていただき、自分は何という思い違いをしてきたのだろうと思いました。それで、今回の合宿では、大学で聞き学んだことの視野をもっと広げよう、もっと真実を知りたいと思って参加しました。

実際、参加してみると様々な講義の中で日本というものが少し見えてきたと思いました。私は、この合宿は戦争時の話だけかと思っていましたが、その話は勿論ですが、他にも日本語の大切さ、意味深さを知り、日本語の使い方をもっと学ばなければ日本人として恥ずかしいものだと感じました。一つの講義に多くの重要なキーワードが入っており、とても勉強になりました。はじめて創作した短歌も素敵な歌にするということがとても難しく感じ、良い体験となりました。

班別研修の時は同じ位の年代の子がどのような意志を持っているのかを沢山聞けて、なる程と思ったりし、良い勉強になりました。今回の合宿を元に自分自身を振り返りもっと多くのことを知りたい、学びたいと思いました。

江田島で多くの意見交はし合ひ学ぶ意欲を沸かして帰らむ

女性としての役割を学んだ

（早稲田大学　教育　一年　小林由香利）

私がこの合宿を通じて最も学んだことは女性としての役割です。私は、将来は教育出版系への道を進みたいと思っておりました。そして、社会で役に立つ人として働いていきたいと思っておりました。外へ外へと私の目は向いておりました。しかし、私は、女性として生まれてきたからには、子供を産み育て、心温まる家庭をつくっていくことが大変大切であると気づかされました。と言いますのも、実際、教育参考館を訪れ若き戦士達の遺書を見て、親を思い、国を思い亡くなった方々の雄々しい姿に涙を流したためでした。女性として学んだこの経験を将来子供にも語り伝えたいと思います。日本人としての謙虚さや国を愛す心、人としての思いやり、人が困っているときに自分のことのように親身になって考えてあげられる子供を育てていきたいです。そのためには、まず、自分自身がこれらのことを実践していきます。

それと共に、大学で国文学を学ぶ一人として、短歌を通じ

「夜の集ひ」の寸劇に興じる一コマ。

て味わう感動の心を語り伝えて行きます。短歌班別相互批評を通じ、理屈ではなく素直な心で歌を詠むために、もっともっと自らの感受性を磨いていく必要があるとも感じました。班員一人一人が班友の短歌に対して思いやりを持ち、一緒になって短歌を作り直して行く作業も大変心に残っております。良き師にめぐり逢い、良き仲間にめぐり逢い、江田島という大切な地で五日間学び合えたことに大変感謝しています。カッター五番は皆に助けられました。本当にありがとう。

友達と悲しきこともうれしきも心の声を語り合ひけり

自分のこと、自分の考えを見つめなおすことができた

（東北女子大学　家政　二年　皆川裕美）

私はこの五日間の合宿を終えて、この合宿に参加できて本当によかったなあと思いました。毎日とても勉強になる講義を聞き、講義の後には必ず班員と話し合い、語り合うことによって相手の考えを知り、そのことによって自分のこと、自分の考えを見つめなおすことができました。今まで、私は友達と自分が住んで暮らしている日本のこと、戦争のことなどを話し合ってこなかったので、班員達の話を聞き、自分はなんて浅い考え方しかできないのだろうと痛感しました。このことを自覚できただけでも参加してよかったと思いました。

この合宿では、講義を聞くだけではなく、カッター研修や教育参考館見学、短歌創作といった今まで経験したことのない体験をすることができて非常にうれしく思いました。

一番印象に残ったのは、教育参考館で「遺書」を見たことでした。日本への愛国心、昔の日本人の心を感じることができました。

合宿で打ち解け合ひし良き友と別れ淋しく故郷に帰る

子供達に愛国心を持たせるような教育をしたい

（東北女子大学　家政　二年　勝木愛子）

私自身がこの江田島での合宿で得たことは大学の講義の中だけでは学べないことばかりでした。私の専攻は児童学で、将来は、小学校教員になりたいという夢があります。私は合宿に参加する前、「自分は本当に教師に向いているのだろうか、本当にこの道を進んで間違いはないのだろうか」と悩んでいました。しかし、それはただ単に現在問題になっている学級崩壊や幼児・児童虐待という事実から逃避していたのだということをこの五日間の合宿で学び得ました。

私が五日間で学んだのは、理想の教師像です。子供が大好きで、一人一人の子供の個性を引出す技術を備えていることも重要ですが、それ以上に、自国に誇りが持てるような教育をしたいと思いました。というのは、戦後の日本は負の面ばかりを強調した教育をしているように思えるからです。「万引きをしてはいけない」など悪い例ばかりを用いることがその例です。戦前の「よく学びよく遊べ」のように良い手本を

示すことが大切だと私は思います。日本の文化である茶道や短歌など素晴らしい文化を子供に伝えたいです。特に短歌は三十一文字の中に情景や感情が凝縮されていて、人の心に触れることができます。人と人との触れ合いが、良い人材を育て、良い社会を作り、そして、皆が愛せるような国になるのではないかと私は考えます。だから私は愛国心を持たせるような教育をしたいです。

友達と布団の中に身をうづめ語らひやまぬ時忘る程に

運命としか言いようのない六人の友との出会い

（日本体育大学　体育　四年　近藤雅美）

カッター研修、江田島旧海軍兵学校見学と体感を通して共に学ぶ喜びを感じました。また、班別研修では、先生や仲間と講義中の疑問点を話し合ったり、人前で話したりすることによって講義の内容を噛み締め合うことができ、自分の学んだことを整理することができました。これは本当に意義深いことだと思います。それは、同世代の人がどのような考えを持って生きているのか、また、私達よりずっと経験豊富な先生の生の体験を交えたお話によって、講義の内容がより深く心に留まるからです。

更に、短歌の創作という自分の心を短い文に入れ込んでいく作業や短歌相互批評において自分の歌だけではなく、友の歌についても友の気持ちを汲み取り考えたことは大変貴重な

カメラ・レポート24

「合宿を顧みて」と題し、国民文化研究会会長・小田村四郎氏は、合宿初日からの各講義を順を追って丁寧に振り返られた。

経験でした。これらを通して仲間の大切さを感じ、この合宿が十倍にも二十倍にもなりました。全国から集まった七人とたった五日間でこんなに強い絆が生まれたのは運命だと感じました。

五日間寝食共に過ごしたる友との出会ひは財産なりけり
江田島で共に過ごせしともどちに出会へしことに縁思ほゆ
六人の友と出会へし合宿に不思議な縁を思ほゆるかな
江田島で縁のありし友どちと遠ざかりても会ふていきたし

「この道で間違いないのだ」と確信した

（熊本学園大学　社会福祉　二年　折田成予）

今回は私にとって二回目となる合宿であり、さらに父や弟と共に学べるということで楽しみにしておりました。合宿に参加する目的として、日本についての意識を深めたいということや同志と共に語りたいというものがありました。大学で国について話したり、戦争に対しての考えを述べ合ったりできる友人は本当にわずかで、国文研の合宿に来ると落ち着きを取り戻せる気がします。

中西先生の言われる「正しい認識を持つ、自己の確立、勇気ある行動」とは実に難しいことであると共に、自分にはいつもそのことに対しての焦りがあるように思います。自己の進むべき道はどこにあるのか、今の自分はその道を踏み外してはいないか確かめることができず、不安定なまま自己の確立ができないでいます。しかし、この合宿における先生方の力強いご講義や心置きなく語ることのできる友人との出会いによって「やはりこの道で間違いないのだと」という確信が湧き上がってくるようです。先人が持っていた日本人であるという誇りを「縦のつながり」の中に生かしていけるよう、自分が日本の女性であるという自覚と判断をもってこれからも学びたいです。

輪になりて集へる友との語らひは我が胸内に希望となりぬ

第十五班―高校生―

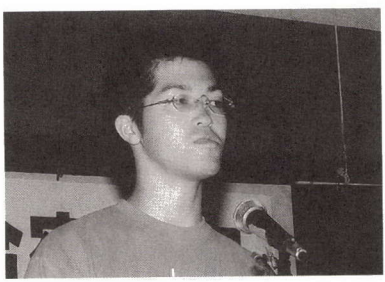
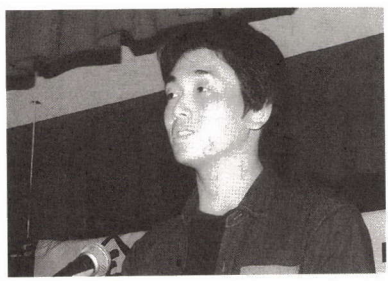
青年の遺書に感動した

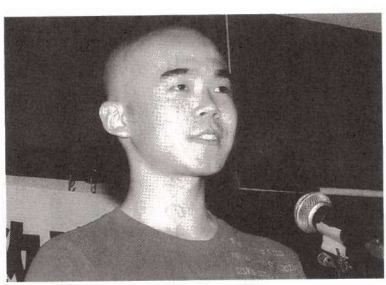
（福岡県立香椎工業高校　二年　後藤寛大）

私は初めてこの合宿に参加させていただきましたが、最初は大学生や社会人の方々が聞くような話を私たちは理解できるか不安でした。

教育参考館に行く前に見たビデオで、「私は年をとったお父さんやお母さんや幼い弟たちのために行くんですよ、だからお母さん涙だけは流さないでくださいね、でもお母さんやっぱり寂しいですね。」という青年の遺書に感動しました。本当に家族のことが大好きだったのだなと思いました。

二日目のカッター体験は、皆一所懸命で、大変心に残る思



「全体感想自由発表」最終日、合宿での感想が次々と登壇する参加者より率直に語られた。

い出となりました。こんなに日本のことを考えている人たちと一緒に過ごせてよかったです。

日の本の明日の道をてらさむと共に学びし友ら忘れじ

「心」を味わい体得した

（私立聖光学院高校　二年　大河内恩人）

合宿全体を通して、振り返ってみると、僕がこの地で学び、そして得たものはいろいろな葛藤があったが「心」に尽きると考えさせられる。それは単なる知って得るというものでなく、味わい体得したというものであった。最初の講義の時から感じていたことだが、一人一人先生が心を込めて話されるので僕の胸にも言葉がぐっと入ってきた。また、班ごとの短歌相互批評の折に、小柳先生が部屋に入ってこられて僕たちの短歌を観てくださったことがあった。そのとき感じたのは、心が非常に深い人だな、もしかしたら心のみで生きておられる方ではないかということであった。この感じは先生方のみならず国文研の会員の人達と接した時でも湧いた。一見何気ないように見えた人でも接するとその人に対するイメージががらりと変わるということが何度もあった。この合宿に参加できてよかったです。どうもありがとうございました。

話さなかった人に初めて話しかけられて
沈黙の壁を破らんと君は今僕のところに近寄りにけり

日本語の豊かさを知った

（福岡県立福岡高校　二年　馬場章央）

最初、回りは大学生ばかりで高校生は僅かに六人だったのでかなり心配しましたが、頑張って大学生たちに負けないように必死で五日間を過しました。その五日間の中でも非常に心に残ったことは、短歌相互批評です。この取り組みは僕にとっては初めてのことでどんなことをするのか疑問でした。お互いに短歌を批評しあい、より素晴らしい短歌を作り上げるときいた時には、恥ずかしく思いましたが、そんな私に白濱先生は「素晴らしい短歌を創る人もいるけれども、どんなに素晴らしい短歌を作っても皆で相互批評すればもっと素晴らしい短歌が出来上がる」とおっしゃいました。そしてみんなで歌をさらによくしていったのですが、どうしても高校生の知識には限界がありました。そんな時に小柳先生が部屋に来られました。先生のおかげで皆の和歌はこれまでとは比べ物にならないほど素晴らしいものになり、改めて小柳先生の素晴らしさを感じさせられました。それと同時に日本語の豊かさも知りました。どんな様子もどんな感情も日本語で表せないものはないと感じました。こんな風にして五日間を過ごしたのですが、班の友人とも仲良くなり家でじっとしているよりは素晴らしい夏休みが過ごせたと思います。

全国の有志がつどひ江田島で先人の志共に学べり

本当の日本人に回帰したい

（私立香川誠陵高校　二年　諏訪大地）

私は今回、高校生としてこの合宿に参加させて頂いた。台湾で言われる「日本精神」とは何なのかを確かめたいと思ったからである。今回の合宿でその一片でも垣間見ることができ、言葉にはたとえられない感銘を受けた。先人はやはり偉人だ。現代人はやはり愚かだ。

私自身とても先人には及ばない。国を愛する精神、父母を気遣う優しさ、敵艦に飛び込む度胸、どれをとっても勝てそうにない。しかし私は日本人だ。少なくとも私はかつての日本人の熱い血を引いている。私にその器量や資格があるかどうかは分からない。しかし、私は少しでも本当の日本人に回帰したいと考えている。

この合宿に来られた方々も本当の日本人のあるべき姿を真剣に求めて来られた方々だと思う。私は、心底この方々と五日間過せたことを幸せに思う。来る道中、カッターをこぐ時、ともかくあらゆる場面で親切にしていただいた。私のような若輩に礼を持って接してくださった。優しく、朗らかで、清らかなそんなかつての日本人の姿が断片的にちらついて見えた。私は今までいかに、寮という閉ざされた空間の中で自分を駄目にし、小さく生きてきたかを改めて痛感させられた。そして、私は初めて大学生というものにあこがれをもった。私は初めて学校の先生というものに心からの尊敬の念を覚えた。

崩れゆく国日本。これは我々に課せられた試練だと心得る。私は文の道に志し、日本の再生、先人への少しばかりの恩返しをしたいと思う。そのためには、広く見識を求めなければならぬ。そのために、大学に進学せねばならぬ。今の成績では大学になど入れそうにもないが、この合宿のことを心に刻み、精進していきたいと思う。

江田島の潮風なびかす日の丸に我が身照らすすべもあらず

合宿に参加してよかった

（広島県立大門高校　二年　藤井雅啓）

私はこの合宿に参加して大変よかったと思います。普通では体験できないことを多くさせていただきました。一日目は名前も顔も知らない人達と五日間も生活するということで緊張しました。しかしその不安はすぐに消え去りました。部屋にはいると「こんにちは」という声がし、緊張がほぐれ、ずいぶん楽になりました。夜には布瀬先生の講義で、台湾の教育事業に徹した六氏先生の話などを聴き、分かりやすい言葉で説明してくださり、実にいい勉強になりました。カッター研修では、恐い教官に怒鳴られ、最初はびっくりしたけど、それはけが人や事故を防ぐためにだということに気づき、厳しい言葉の裏のやさしい面に気づきました。三日目の夜の慰霊祭の天候の変わり方は今でもはっきりと覚えています。説

明の時には雷鳴、雷音、豪雨が降り続いていたけど、慰霊祭が始まると、まるで御霊が舞い降りたようでした。四日目には短歌の相互批評があり、小柳先生に指導していただきすごく嬉しかったです。そして今日、五日目、五日間共に過ごした友人と別れなければなりません。たった五日間だったけど楽しい時間を過ごした友と別れるのはかなりつらいです…。

この五日間本当にお世話になりました。

江田島で共に過ごしたよき日々を忘れはしないぞどうもあんがと

高校生の素直な感性が感じられた

（熊本県立教育センター　白濱　裕）

高校生班の班長を担当させて頂いた。生徒達は皆、終始真剣に研修に取り組み、成果も上ったと思ふ。高校生は余計な先入観に捉はれてゐない分、講義内容の核心をストレートに受止めることができる感性を有してゐることを実感した。特に歴史の真実や先入の真心にふれた内容の理解は、年齢や経験を超越するものだといふことを確信した。

それにしても現実の高校の現場が「生きる力」の育成をと言ひながら肝心の思想や生き方に係る教育内容を避けてゐるという今日の高校生にとっての不幸を思ふと共に反省させられた合宿であった。

いつの日か大学生となりし君達と酒くみ交はすときの待たるる

合宿教室で学んだことを実践してゆきたい

（久留米大学附設中学　教諭　名和長泰）

江田島という由緒ある開催地で特色ある企画運営にあたられた皆様に心より感謝申し上げます。遅刻早退で何のお役にも立てず申し訳ありません。いよいよからみあった立場になり、合宿教室で学んだことを一つでも二つでも実践できるよう気持ちを新たにとりくみたいと思います。

ひとすじの信につながるみ友らとここ江田島にまみえうれしき

第二十一班―社会人―

旧友にお会ひしたい一心から参加して

（㈱オキ　沖　守）

「今度の第四十七回合宿は君の地元の江田島であるので、合宿が終る迄に一度お会ひしたい」との長内君からの御便りをいただき、私も合宿が終る迄に必ず一度お会ひしたいとの思ひが胸に溢れて来ました。

私は矢も楯もたまらない気持で「よし！私も合宿へ参加しよう」と決意しました。

私の体は脳梗塞による半身の不随による不自由がまだ体に残り、その上難聴があって人の話が全て耳に聴き取れない状

態なので講演会や会議は私の不得手な範疇でしたが、何にしてもやれるだけやって見ようと思ひ、申込期限ギリギリの七月末頃出席の申し込みを済ませました。

出席を決意した頃から、何としても合宿参加を成功さす為に体調の万全を図るのが私の絶対的命題でもあるので、爾来出発する前日の八月七日迄それに集中して来た日々でしたが、全身全霊の気合を込め、大袈裟な表現ですが、私はそれに集中し必ずやり通すとの決意で出席した此の合宿でしたが、最後迄やり通す事ができ、その上度々み便りをいただき、お会ひする日を夢にまで見た君にもお会ひ出来て私は非常に感激した日々を過ごす事が出来ました。毎日毎日が全身の力を奮ひ立てた自分との斗（たたかひ）でしたが、どうにか最終日を迎へる事が出来、班の皆様周囲の皆様にも本当にご迷惑をかけました。

心から感謝してゐる次第です。自分の事だけになりましたが会の皆様に心よりお礼を申し述べさせていただきます。

主催者の国文研の皆様にも本当にお世話になりました。

今後尚御指導下さいます様お願ひ致します。

若き日の思ひ定めし我が友に会ひまつらむとここに来にけり

二十四年振りに合宿に参加して

（ワイ・エス・ケー㈱　岡山工業　内田厳彦）

今合宿は昭和五十三年の第二十三回阿蘇合宿以来二十四年振りの参加でした。

閉会式。国民文化研究会副理事長、磯貝保博氏は「本を読むこと、友を尊び共に勉強する友を持つといふことは、志を持って生きようとする者にとって大切なことである。今後のお一人お一人の精進に大いに期待したい」と奮起を促した。

学生時代から連続八回参加させて頂いた合宿も、これだけ遠ざかると、参加すること自体が乗り越えられない「カベ」のようになっていました。

そのような時、上村さんから「開催地が近いし、久し振りに君に会いたい」とのお電話を頂き、また他の先輩方の今年の年賀状にも同様のことが書かれてあり、その言葉の「強く懐かしい響き」に魅かれ、この江田島にやって来ました。

師友と二十四年振りの再会を果たしただけでも今回参加の目的は充分果たした気がしていましたが、久し振りに聞く御講義・講話・体験発表等全て素晴しく、初参加の時のような新鮮さがあり、聞き洩らすまいと一所懸命聞き入りました。

講議レジメの内容等も今の若い人が取り組み易いよう原文の解説があったりし、随所に工夫が施されていました。

私が属した社会人班は五十歳以上で、相当社会経験の有る社会人ばかりで構成され、講議後の班別研修でも特に時事問題に関し活発な意見が交わされました。

今までこの合宿や国文研のことを知らなかった方々でも、日本の政治・教育・マスコミのことを憂い、独自で勉強し、行動しておられる方が何人もおられるのには驚かされました。今後共、この類ひ希な機縁を是非大切にしたいと思う。

振り返ると小柳先生の御講議の中に登場する「村垣淡路守」のことや、夜の集ひで社会人の女性が歌われた「因幡の白兎」のこと等、期間中の印象的なことが次々と脳裡に甦って来ます。日本人であることの誇りと有り難さを本当に痛感させられた四泊五日でした。

久方に会ひ得し友と江田島に再び語り学ぶ嬉しさ

合宿教室の素晴しさに驚いた

（経営者漁火会　正木　篤）

私は今合宿は初めての参加です。

私は「経営者漁火会」という団体に所属し、国文研のことも聞いてはいたのですが、自分も独自の活動を行なっており「国文研何するものぞ」という気概はありました。

また、国文研合宿にも得るべき所があれば自分の活動にも取り入れられるという思いがあり、百聞は一見に如かずと思って参加しました。

こういう動機ではありましたが、初めて参加して見て「国文研合宿とは凄い」の一語に尽きます。合宿教室が営々と引き継がれて来たその歴史と重みを全身で感じています。それが最大の成果であり、何か大きなものに自身が包み込まれているような感激を覚えます。

自分が生きて来た道を振り返る時、今まで接して来た友人・知人そして数多くの先人達とのつながりの中に今の私が在ると実感する。

過去・現在・未来と命の連続性を実感し、私の心は躍動する。父母や祖父母、ご先祖の皆々様に「有り難うございました」と声を大にして感謝の意を表したい。

私は常に「立派な日本人たれ！」を胸に秘め、日本人であることを誇りに思いつつ、この国が多くの草莽の士の赤き心根に護られて来たことを同時に思う時、自分がこのままではいけないと力が湧いて来る。

語りたいこと、書きたいことは山ほどあり、皆と別れるのは心残りではあるが、来年の合宿のことを思いつつ筆を置く。

雨が降る別れ惜しまる英霊の御声のごとき今朝の雨おと

合宿の成果を教育現場に生かしたい

（広島市立美鈴が丘小学校　稲垣幸一）

国民文化研究会のホームページを見て、開催地が近いので、迷うことなく参加を申し込みました。初めての参加でいくらか不安もありましたが講義を受けたり、班別研修を行なったり、合宿日程が進むにつれ次第に手応えを感じました。

講師の先生方の著作のいくつかは目にしていましたが、実際に目の前で話を聞くことができ、大きな刺激になりました。

合宿で得た多くのことを職場（小学校）に持ち帰り、二学期以降の教育現場で生かして行きたいと思う。広島市内からの教職員の参加が私一人であることに少しがっかりしましたが、来年度の参加者が増えるよう、しっかり宣伝しようと思う。

合宿初日より最終日までの一コマ一コマがとても新鮮なものばかりで、四泊五日の合宿があっという間に過ぎたように

閉会式で学生を代表して挨拶する九州工業大学四年の安土茂亨君。「この合宿で学んだ事を普段の生活と関連づける事が大事だ」と挨拶した。

思います。

私の班は全て50才以上の男性でしたが、一人一人が自分の考えをしっかり持たれた方ばかりで、それぞれの人が人の話にしっかり耳を傾け、また自分の思いを述べることが出来ました。また「新しい歴史教科書をつくる会」の地方の支部長をされている方が二人もおられ、それに関連する意見を交換出来、嬉しく思いました。

参加されている若い人達の合宿への取り組みにやや失望させられる部分もありましたが、同時に随分頼もしくも感じました。

それは最終日の「全体感想発表」での若い人がしっかりとした言葉で自分の思いが述べられた時であり、国文研の合宿が若者の心に沁みる内容を有している証拠だと思います。

日本全国には、今回合宿に参加した若者と同じ気概を持っている人が数多くいると確信している。

教育現場の責任の重大さは重々承知しています。私が知る所では広島市内ではこの合宿内容とは程遠いものが子供達に教育されていることは否めません。

取り敢えず自分のできることとして自分のクラスの子供達にこの合宿で学んだことを噛みくだいて話していこうと考えています。

有意義な四泊五日の合宿を提供していただいて有り難うございました。

集ひ来て学びしことの心地よき言の葉見つめし四泊五日

新しい力が生まれて来た

（中島法律事務所　中島繁樹）

江田島といふ合宿地はわが国の歴史と伝統を思ひ起こすのに大変適してゐたと思はれる。多数の参加者を得たのも、講師のお話がひとつひとつ心を打ったのも江田島の伝統の故であったやうに思ふ。

天候に恵まれたことも大変嬉しいことであった。

二十一班の班長といふ役目をどうにか終へることができた。班員の方々は全員が見識のある人ばかりで、私は議論をまとめるといふ苦労は全くなかった。班員の方々のお話をうかがって大変有意義でもあった。

今回の合宿で多数の参加者を得て、新しい力が生まれて来たことを感ずる。

国のためいのちのかぎり輝きし人らを憶ひ日々を過ぐしぬ

今後なすべきことと覚悟が定まった

（日立製作所勤務　日高廣人）

合宿に先立ち靖国神社に参拝し、新装なった遊就館も訪れ英霊の遺品、遺稿にも触れる機会を持った後、江田島に来た。

初めて合宿教室に参加して、当初は不安もあった。学生諸君との交流はほとんど無かったが、同室の仲間とはすぐ打ち解けて日頃の疑問をぶつけ合うことが出来た。

講話を聴いて印象が生々しいうちに感想を述べ合って理解を深めることができた。

齢六十五を越した今、為すべきことは二十一世紀の日本を背負ってゆく若き世代に日本の本当の姿と日本の心を伝えて行くことである。

短いようで中味の充実した研修を通じて得たものは多々有る。自らの気力を充実させて、それを後世に伝える。

これからも益々事実を見つめ、自分の頭で考え、自分の心で感じ、勇気を持って実行する覚悟が固まった。

合宿の始めは不安覚ゆれど気力漲(みなぎ)り江田島を去る

日頃の悶々とした思いを整理できた

(株)オキ　香田克己

ただ漠然と昨今の日本の国情を憂う気持のみで、何をどうしたら良いのか、悶々と過ごすのみの私でしたが、今回の合宿教室に参加して、本当に助けていただいたような気持です。

五日間多くの先生方からお話を聞き、その一つ一つのお話が一本の大きな流れに収斂され、気持の整理が出来ました。

我国が真の意味の独立国家としての基盤を確立する為には、究極的に憲法改正が絶対必要だということが明確に理解出来ました。

現在、日本をとりまく多くの問題の病根を絶つ為に、少なくとも憲法九条第二項と二十条第三項は抹消すべきではない

別れを惜しみながらも、「また、来年会はう」と堅い握手が交わされた。

でしょうか。技術的に色々困難は有ると思いますが、心ある多くの方々と共に一人一人の努力の積み重ねが、近い将来憲法改正という難事業を可能にするような気がします。

目標が明確に定まると、大きな力に結集出来ると思います。

末筆ながら、四十七回という回数を重ねるこの合宿教室に尊敬の念を禁じ得ません。有り難うございました。

合宿で拙かれども歌詠めば創る喜びいや増して来ぬ

英霊の護りを感じた慰霊祭

（鹿児島県信用保証協会　野間口俊行）

私は、歴史ある海軍兵学校のあった江田島で合宿が開催されることもあって参加しました。

我々社会人班は班別討論においても活発な討議がなされました。その根本にあるものは日本の現在・将来を憶ふ一心でありました。

将来を荷ふ若者達の潑剌とした姿も頼もしく思いました。合宿を支えていただいた皆様、有り難うございました。

慰霊祭にて

英霊は雷になりて江田島に集ふごとし慰霊祭のとき

慰霊祭始まりぬればすさまじき雨降り止みて奇しくもあるか

学生さんとも話し合いたかった

（自由業　岡田重道）

私が属した社会人班では班の方々との年代も近く、充分討議は出来ましたが、やはり現役の学生さん達の素直な声を耳にする場が欲しいと思いました。学生どうしの討論で「学問・人生・祖国」について学ぶことを深め、新しい時代を荷う若者・人材を育てようとされる会の方針は充分理解できますが。

四泊五日間が本当にあっという間に過ぎました。合宿中に得たことが、これから実生活にどのような変革をもたらすか、どのような勉強・実行動を展開してゆくか、予想も出来ず、非常に楽しみです。

若人のたき火に集ふほがらかさ張りし心も笑ひほぐれぬ

第二十二班―社会人―

「思い出すこと」の大切さ

（横浜舞岡病院　村島　明）

班長さんがかってこの合宿で、小林秀雄先生の謦咳に接した方で、小林先生に纏わるいろいろなお話を伺い興奮しました。小林先生は「思い出すこと」の大切さを説いておられますが、私もこの合宿をよく思い出して自分の血肉にしていこ

うと思います。ありがとうございました。

江田島で歴史を思ふ友を得て語りあかせば時は過ぎゆく

歴史の真実を学び考えること

（九州電力㈱　木村和久）

この合宿に参加して「事実を見る」「自分の頭で考える」という当たり前のことであるが、普段の自分が忘れていた事を再認識させられた。これは即社会人として会社での行動に実践する事が出来ると感じている。

もう一つ「歴史の真実を学び考える」ことの大切さを学んだ。この事は、今までの自分の知識のなさも痛感したが、スタートは遅いが、まず自分の子供に伝えられる歴史の真実を学びたいと言う気持に切り替った。

日々の仕事に追われながらではあるが、「学び考える」時間を今日から作って行きたい。

江田島で夜ごと語るる友どちの最後の夜に本音きこゆる

有意義な体験に感謝

（福岡コミュニティ放送㈱　谷口　学）

今回は取材ということで、初参加させて頂きました。

合宿に強い思いはありませんでしたが、日を追うごとに国文研の活動のありがたさや、日本という国家に対する考え方、今の日本の現状を考えさせられ、大変ありがたい時間を過ごすことが出来た四泊五日の合宿でした。

収録テープは九十分を七本、六百三十分を撮り、その中から伝えるべき大切な部分を編集します。映像としてどれだけ多くの方に伝えることが出来るのか不安ではありますが、私には貴重な仕事となりました。

又、同じ福岡の占部先生に直接お話をして頂いたり、中西先生の講話が間近で聞けたことは思い出深い経験となりました。

戦後に国文研の皆様のすばらしいスケジューリングと合宿運営のお蔭で有意義な体験が出来たことに深く感謝致します。ありがとうございました。

収録の本数増へて気が重く伝へる思ひに気持ち複雑

悩んできたことに対する答えのヒントを得た

（㈳福岡県中小企業経営者協会　萩原眞之介）

まず、この合宿に参加する機会を与えて頂いた（社）福岡県中小企業経営者協会に感謝致します。

私は当初、この合宿に参加するにあたり、どのような内容か、どのような人が集まるのか、正直不安でした。しかし、講義を聴き、又仲間たちとの研修を行なっていく内に、非常にショックを受けました。

今まで自分が学んできた歴史と真実の歴史との違いや、自

分がどれだけ「日本人の心」を失くして生きてきたのかということに気付きました。古代より受け継がれてきた日本の心が全て解ったとは申しません。これから私自身が勉強し、日本の歴史と日本の心をもっと理解し、私の人生の糧となる様、努力して行こうと思います。

また短歌を通し、改めて日本語の奥深さや難しさを知りました。たった三十一字に自分の心を素直に表わすことができるのは、日本の言葉及び短歌だけであると思います。これは人と接し、人と話をする時に非常に重要なことであると知りました。私のいいたいことが相手に伝わらなかったり、誤解されたりした事が社会に出て多々あり、非常に悩みました。今後は言葉をしっかり考え、伝えて行きます。

最後に私はこの合宿に参加し、仕事や人間関係等で今まで悩んできた事に対する答えのヒントを得たと思います。このヒントを基に、自分の今後の生き方をじっくり考えたいと思います。

我が思ひ言ひ表はせぬもどかしさ言葉の重さ改めて知る

短歌の素晴らしさを知った

（ドコモサービス㈱　阿部良太）

この度、国文研の合宿に参加できたことを大変嬉しく思っています。

合宿を通して痛感したことは自分が如何に日本語の素晴らしさを分かっていないかということと、文章としての表現力がないかということを知らされました。

特に短歌に対しては中学、高校の国語の時間では文法や語句の説明だけは教えられましたが、短歌が誰でも自分の気持ちや感じたことを表現できる最良の手段であることは教えられませんでした。今になってそのことが分かったのは嬉しいと思う反面、学校で味も素っ気もないようなやり方で短歌を教えられたことに対しての怒りと悲しみが湧き出る気持を否定できません。

しかし、遅まきながらも短歌を創作することの難しさと、先人達が後世に残してくれた短歌を声に出して詠み味わうことの楽しさを知ることができました。

この合宿に参加することができて本当に良かったです。

それからこの合宿で班の中でいろいろな人々と出会えたことも大きな喜びでした。特に国文研の占部賢志先生に出会えたことに感謝しております。

次回もこの合宿には是非参加させていただきますので、その時はまた宜しくお願いします。

過ぎ去りし合宿の日々を振り返れば学びの楽しさ難しさを知る

自分を見詰め直す機会になった

（民主党島根県第一区総支部　濱口和久）

久し振りに合宿に参加して諸先輩方や懐しい方々にお会い

しいろいろなお話をすることができ、感謝申し上げたい。

日々忙しく過していると、学ぶこと考えることが疎かになる中、合宿中の講義や様々な体験は、一時立ち止まって自分を見詰め直す機会になった気がした。今回初めて同世代の社会人班に入り参加したが、学生班とは違ってまた味わいのある班であった。

教育参考館の見学をさせていただき、先人の方々、特に特攻隊の方々の出撃前の遺書を一つ一つ読んでゆくうちに、体の中が大変熱くなり、胸に込み上げてくるものがあった。

現在の日本、いまだに戦後の不健全な精神構造が続いていますが、この合宿を通じて私自身に、この不健全な精神構造に立ち向かう力を与えてくださり、本当にありがとうございました。

班員の語る思ひを聞きながら我の身体も緊張走る

先生の一言が私を変えた

（フルーツショップ　ソノヤマ　園山佳紀）

私は参加する前は人並以上に国に対する思い、愛国心があると確信していました。そして歴史、国のあり方、及び国の未来についての思いは誰にも負けまいと決意し、私は正論を言っていると思っていました。そして合宿二日目が経ち何かもの足り無さを感じていました。

しかし一人の先生により、その思いが全く覆されるのを感じました。それは抽象的な言葉で国家を論ずることはしない方がよいという言葉であり、私はその時自分の中でそれについて「なぜだ?」という思いがすぐに感動に変わったことを今でも忘れることができません。

その内容については省略しますが、私はその一言が私を変え、今後何をすべきか、日本の夜明けと共に、私を導いてくれることを感謝し、日本を幸せにできると思いました。

占部賢志先生、ありがとうございました。

今思ふ心の中はすっきりとありがたうと感謝を込めて

「慰霊」の体験

（福岡県立太宰府高校教諭　占部賢志）

まづは運営委員各位に心よりお礼を申し上げます。二泊三日の短期間参加でしたが、江田島の地は本当に良かった。合宿地の息吹を堪能出来るといふことも大切なことです。

さて今回ほど、合宿開催の第一義は「慰霊祭」の挙行にあると痛感したことはありません。慰霊祭を「体感」するといふことは何にもまして代へ難い。靖国、教科書、外交等々、憂ふべき問題を前にして何を論じ何を主張しようとも、「慰霊」の体験が欠如してゐれば力ある言葉は生まれない。つくづくとさう思ひ至りました。

第二、第三の意義は「古典輪読体験」と「短歌相互批評体験」だと思ひます。言葉を心読する体験を共有出来るのも、

慰霊祭同様この合宿教室ならではのものです。国文研合宿が他のセミナーとひと味違ふのはそこにあると考へます。

小生が今回の合宿に新しい友を誘ったのも、その三点を体験して貰ひたかったからにほかなりません。この独自の魅力ある伝統的企画を、さらに練り上げて次回合宿にバージョンアップしたいものです。我が班の社会人諸氏、また小生との縁で初参加した諸君が共通して魅せられたのも、以上の企画内容でした。

第二十三班―社会人―

かけがえのない仲間達

（九州電力㈱福岡支店営業部　樋口公一）

今回、初めての参加でした。会社からの出張というきっかけで、事前に届いた日程表に目を通すと、「明治の精神」や「慰霊祭」などがあり、もしかするとちょっと怖い団体なのかと不安いっぱいのまま江田島に来たのが私の率直な気持ちです。開会式でも、国歌を二度も歌い、黙祷も一分間と、本当に危ないところに来てしまったと思ったことでした。

しかし、班別交流に入るとごく普通の学生や社会人がいることを認識し、安心した。講義の内容は、私の知らない事ばかりで、意味もわからないことが多く、なかなか自分のものにすることが出来なかったが、大きなきっかけづくりにはなったと思う。この先、自分の考えに出来るよう、自分なりに勉強していきたい。もう一つ大切なことは、今回の合宿で得たかけがえのない仲間達である。多方面の業種の方々が集い、いろんな話が出来ることは、自分にとって大変有意義なものになった。

今の日本は、芯の通らないフニャフニャした国のように思う。幕末の若かりし方々の勇気や愛をたくさん吸収し、今後、自分が出来ること、小さな事から、勇気を持って、大胆に行動していきたい。

この手づくり合宿を裏表で支えて下さった国文研のみなさま、大変お世話になりました。ありがとうございました。

いとうれし日本の明日の希望の灯は今なほ残る我らの志に

全霊を込めた一言

（無職　佐久間俊輔）

今回の合宿はなりゆきで来たようなもので、最初は右翼かな？とかマイナスイメージが強く働きましたが、一つ一つの話が体系的につながっていくにつれ、今日（五日目）にはそれが「あたりまえの歴史の理解」とそのつながりにおいて「あたりまえの我々のあり方」というふうに心が動いています。右翼も左翼もない自分自身の歴史の受けとめ方がぼんやりですが定まりつつあります（うまくは言えませんが……）。

短歌創作では、班長が私の表現したい言葉を探して、それがことごとく納得ゆかないということに、自分の心が求める表現とは自分自身であり、こうも妥協できないものかと知りました。そのとき、特攻に飛んだ人達の一句に秘める気持はとてつもないものかもしれない、自分が感性をみがくことでもっと一体になれたのかもしれない、今まで通り過ぎてきた故人、先人の一言（全霊を込めた）に失礼だったなと思うようになりました。

霧雨の緑に飛びゆく白サギを見送る我に香る草木

一番印象に残った言葉

（大阪大学文卒　安岡一成）

来年四月より新聞記者となる私にとって最も肝心なものは感性であると思っています。記者がいちばん感動しなくては読者に伝わるはずがないからです。しかし、この合宿で研修をこなしているうちに気づいたのは、自分はまだまだ感性が鈍いのではないかということでした。参考館で特攻兵士の遺書を読んでも、自分はこの兵士の気持ちをいったいどのくらい分かっているんだろうと考えこんでしまいました。

次に、いちばん印象に残った言葉は中西先生の「国の運命と個人の運命は限りなく接近している」でした。日本が日本でいられるか、日本でなくなるか、それを決めるのは日本自身であり、それはそっくりそのまま自分にも当てはまります。自分の人生を決するのは他人じゃない、本当は自分なんだと強く思いました。

合宿で魂磨きし若者の夢は必ず結ばるると思ふ

先人達の強い志を感じた

（白生会胃腸病院　須藤修治）

会社の上司の命令でいやいや参加しましたが、参加してよかったと思いました。

会社ではまず耳にしない言葉ばかりで、最初はとまどいましたが、講義を聞き、班別研修で内容を仲間で語り合ううちにだんだんと講義内容のおもしろさ、重要さに心がひかれていくのが自分でも不思議に思いました。

参考館を見学して、実際に遺書・遺物をみると、先人達の強い精神・志が感じられました。

また、頭だけでなく体もきたえられた。カッター体験は大変印象に残る貴重な体験でした。

帰路につく我が目的は同僚に学びし心伝へる事なり

日本はいい国だ

（三次市役所・たのしいまちづくり課　高岡尚正）

日本はいい国だ。

それだけは絶対自信を持って言える。

日本が大好きだ。
誇りを持って言います。
もっと多くの人に伝えたいと思いました。
そのための言葉と技を磨きたいと思います。
それが今回の合宿教室を終えての決意です。
もっと勉強してきます。
班長さん、班の友だち、御迷惑をおかけしました。
ありがとうございました。

英霊の深きみ心身に沁みぬゆめ忘るまじ江田島の雨

日本人であることを再確認した

（㈳福岡県中小企業経営者協会　新納誠朗）

参加のきっかけが、自分の意志ではなく、職場の薦めによるものであったため、参加するまでは気も進まず不安もあった。しかし、合宿の二日目、三日目と講義を受けていくうちに、この合宿が深い意義と目標を持って活動していることがわかりはじめた。右寄りなのか左寄りなのかという浅い議論ではなく、真剣に日本の現状に問題意識を持ち、将来を見据えた考えで活動していることがわかってきた。特に、日本人の特質や文化をとらえ、その意味を再確認するということは今まで自分が忘ってきたことであった。即ち、再確認とは日本人が日本人であることに誇りを持つということであり、グローバル化が進む現代でこそ、必要なことと思う。短歌を創ることは、日々の出来事に豊かな感受性をもつことになり、必ずや人としての資質を高めるだろう。今回の研修は自分が抱いていた日本に対しての認識に幅を広げる良いきっかけになったことは確かである。

別れの日周りをながめふり返る仲間の顔と思ひ出の日々

つながりの中に生きる

（㈱みずほコーポレート銀行　小柳志乃夫）

宝辺運営委員長の「合宿を顧みて」の一言一言、昨夜の藤新君の体験発表の言葉が心に残ってをります。一人一人の思ひに心をこらす、つながりの中に生きる、といふことに努めてまいりたいと存じます。

社会人班の班長として、若き社会人諸君の気持ちにどれだけ迫れたのか、心もとない面もありますが、今後も交流を続けていきたく思ひます。

慰霊祭を始め、不可思議の力に支へられてゐることを思はしめられる合宿でした。

藤新君の発表を聞きて

「人の言葉が聴けますやうに」と朝な朝な神に祈るとふ君をし思ふ
逝きませし父君への君が断腸の思ひしぬばれ胸あつくなる

得ることの多かった江田島合宿

（鳥栖市役所　西山八郎）

今回の合宿では社会人班に参加させていただきましたが、多くの班員は、目的意識を持っておられ、発言内容も具体的で現実的なものが多かったように思います。都合により三日目の午後退出いたしましたが、各人それぞれ得る所はあったものと思っております。私自身、中西先生との班室での懇談の場にも参加でき、このような機会を設けていただいたことを大変有難く存じました。

参加者の中には新聞や雑誌を見てこの合宿を知り申込みをした人もおられ、やはりマスコミの活用は今後の展開を増進させる上からも有効な手段であると感じました。

江田島を離るゝ折に

若きらの巣立ちゆきたる江田島に我ありと思へば胸のたかなる

国の為尽くしましたる若きらの尊き思ひ忘れざらめや

第二十四班―社会人―

日本への回帰の気概を感じた

（財団法人モラロジー研究所　出版部　富田裕之）

この夏合宿には私の求めてゐたものがあった。講義前後の号令は、参加前の生ぬるい気持ちを引き締め、また、教へを受ける者のあるべき姿勢を思ひ起させた。

そういった雰囲気は、運営スタッフと先生方の〝日本〟への回帰を目指す気概によるものだと感じた。

また来年も参加したい。

膝あはせ語りし友と別れても心は一つと皆で誓はむ

江田島が好きになった

（中尾スタジオ　中尾国博）

学生時代より三回目の参加となりました。

初めての江田島の地は、すがすがしく、ここに集まった人々とても充実した時間を過ごすうちに、江田島がとても好きになりました。

また来たいと思えるすばらしい時間でした。

時に追われ一心不乱に歌を詠む足りないものは時間だけかな

日本人としての誇りを持ちたい

（日本植生㈱　小森賢也）

今回初めてこの合宿教室に参加して、多くのことを学びました。数多くの御講義を受けましたが、心に残った言葉は、「今の日本人は誇りがない」でした。私自身を含め、現代の人は、昔の人が持っていたものを失っていると思います。誇

りを持ってさえいれば、今のこの日本は、別の日本となっていたかも知れません。

今回の合宿を機に、自分を見つめ直し、この体験を少しでも生かしていきたいと思います。

国想ふ若きともしび消えしとも後輩受け継ぐ大和魂

日頃の想いを堂々と語ることができた

（横浜市職員（社会福祉職）　徳田浩介）

私には、周囲に友人がたくさんいます。しかし、国の将来を語ることのできる友は、未だ発掘できていません。

この合宿では、志を同じくする方々がたくさん参加され、日頃抱いている想いを堂々と語ることができました。なんとも心強き友です。

これからは、友らと将来を語りつつ、国のため尽したいと思います。これからもよろしくお願いします。

江田島を去るとも我は忘るまじ海に生きゆく益荒男たちを

慰霊祭を経験できてよかった

（㈱ナガオカ薬局　長岡　聡）

今回、この合宿教室では、面白い話を聞くことができると楽しみにしていました。しかし、「日本の文化を知る」と、大きな題を掲げながら、終始武士道・戦争評価・歴史認識・教科書問題などしか話さず、これからどうすれば前進できるかを聞くことができず残念でした。

班別研修も細部のことのみを話し合い、全体を大きくとらえて自分や他人はどう考えるのかが話し合われなかった。

今回この合宿でよかったのは、慰霊祭を経験したことです。初めて経験し、どのような形式で行事を進めるのかが分かりました。この合宿に参加していなければ、おそらく経験することはなく、ありがたい思いでした。

もちろん、共感できる言葉や意見も多くありました。しかし、前述したように、先に進む考えのきっかけを感ずる機会がなかったことが残念です。

真剣に考え動くきっかけを見つけ得ぬまま終はりむかえる

自分（日本人）に誇りを持つべき

（自由業　川口大介）

この合宿教室に初めて参加して共感できることがいくつかあり、「やっぱり俺だけやなく、この人らも同じこと考えてるんやあ」と思いました。様々な年齢層の人に囲まれて、まず感心したのは、四十代や五十代の人々が今からでも勉強しようと思い、それを実行に移していることでした。俺からしたら「勉強しよう」ではなく、「勉強すべきだ！」という気持ちがないと話になりません。もっともっと上を目指し、自分自身のレベルをとことん上げ、追究しなければ、自分の目

標は達成できません。

俺は日本人です。一人でも多く自分（日本人）に誇りを持つべきやと考えます。これは当たり前のことですが、悲しいかな、現実はそんな感じやないです。ではどうしたらエエか？それは皆に分かりやすく、魅力を感じ、刺激を与える思想をあみ出し、かっこエエ形で伝えていけばよいのではないかと思います。俺はそれを作るために毎日努力しています。それぐらい本気やないとアカンと思います。

心込め一首の短歌作らむと言葉探せど難しきかな

久しぶりに充実できた

（内閣府金融庁　山下哲也）

当初全日程参加で申し込んでいましたが、仕事等の都合で土・日のみの一泊二日だけの参加となってしまい、物足りない状態で合宿を終えてしまうのが残念です。

ただ、名越先生、山内先生、青山先生のお話を拝聴し、また班別研修で班員のお話を聞いていると、日々の多忙な仕事を忘れ、久しぶりに充実できた気がします。

しばらくは、仕事に忙殺され、勉強もできないと思いますが、早く仕事に慣れ、自分なりに勉強をしていきたいと思います。

班別研修の折

率直に自分の思ひを語りたる友らの姿心に残りぬ

心に刻まれる言葉

（地方公務員　大日方　学）

二泊三日の短縮日程での参加でしたが、大変充実した三日間であったと思ひます。日頃書類の処理に追はれ、多くの文章に目を通してゐるのですが、心に刻まれる言葉といふものは僅かです。この合宿教室では講師の先生方のお話や先人の言葉を心を集中して読み味はひ、正に心に刻み込んでゐるのだと思ひます。

今回改めて吉田松陰の「士規七則」を輪読し、「冊子を披繙せば嘉言林の如く、躍々として人に迫る。」といふ言葉の何と力強く、生き生きとした文なのであらうかと思ひ、自分の心も息を吹き返し、活力を与へられる気持ちがしました。

班での研修は、班員の皆さんが一人ひとり志をもってをり短い時間でしたが、大変楽しく過ごすことができました。この機縁を大切にして、これからも切磋琢磨していきたいと思ひます。

最後になりましたが、宝辺運営委員長をはじめとする運営委員の皆様、指揮班の皆様、また事務局の皆様に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

御祭りのいかになるらむ雷鳴のとどろく音に胸騒ぎせし

不思議にも雨風止みぬ御祭の齋庭に向かひ足を運べば

御霊らの守りますらむ合宿を支へる人の祈り通じて

第二十五班―社会人―

自分なりに自分の力で考える

（九州電力㈱　田代哲也）

「戦後の教育について議論し合う」そんなイメージで参加したこの合宿は私にとって自分を振り返るいい機会となった。

それは現在社会がかかえる問題に対していかに自分が中途半端な考えしかもっていなかったこと、そして自分の考えを人に正確に伝えることの難しさを知ったことの二点である。理想と現実との間でついつい先送りしてしまいがちな問題に常に正面から立ち向かい最善の策を自分なりに自分の力で考えること、そしてあらゆる機会を通して様々な意見をもつ人たちと議論し、お互いを理解することが重要だと改めて認識した。

先人の勇気と誇りに学び得た日本の心永遠に守らむ

自分の心を見直す

（㈱ダイキョープラザ　杉　慎一郎）

今回、合宿教室社会人短縮コースに初めて参加させていただき、短歌を作る喜びと自分の心をもう一度見なおす事の重要性を改めて感じました。またどの様な言葉を使えば良いかなど分っておりませんが、日々の時間の中でもこういった和歌を考える時間を作っていこうと思います。

短い間でしたが、講話、また班友との会話の中でいろいろと学ぶことがありました。

本当に良い機会をいただき、ありがとうございました。

席につき歌稿を広げ班友と顔を見合はせ照れ笑ひする

考える良い機会となった

（伊佐ホームズ㈱　大宅哲郎）

今回、この合宿に参加して、いろいろな先生方のお話を聞き、自分の解る所、解らない所とありましたが、その中でどの部分が自分に置きかえて考えられるかということを考えながら聞いていました。いろいろと自分の知らない事実、考えなどを聞き、そのことを自分はどううけとめて自分のものとしていくかを考える良い機会となりました。

今回の合宿で、このような合宿に参加している時以外でも日頃日常の中にある様々なことについても同じように感じて考えることが必要でなおかつ行なっていくよう心がけたいと感じました。ありがとうございました。

長旅で江田島港におり立てばやさしくむかへる温かき風

先人への感謝の気持ち

（日本植生㈱　忠政儀洋）

今回初めて合宿教室に参加しましたが、どれも初めての経験でとても新鮮に感じられました。講義内容も普段では聞くこともないものでしたし、短歌創作では、短い言葉で他人に自分の思いを伝えることがいかに難しいものであるかわかりましたし、やっと一首できた時は大変感動しました。

また慰霊祭では雷の鳴る悪天候の中、静かに行われましたが、この時ふと「自分が今現在何不自由なく生活できるのは先人の方々のおかげなのだ。」と思われて、感謝の気持ちで胸が一杯になりました。

短い期間でしたが、充実した日々を過ごせたと思います。今後は日本人である誇りを持って、日本の未来が素晴しくなるように勉強していきたいと思います。

先人のあつき思ひに触れたとき自分の姿を恥づかしく思ふ

己を知ること

（東京食品販売㈱　大和泰之）

孫子曰く「彼を知り己を知れば殆うからず」あまりにも有名な言葉である。戦後日本はこと精神面において、他国（彼）に気を使いすぎ、己（自国）を知る、伝えることを蔑ろにしてきたのではないか。孫子は戦いは最後の手段であり、戦わずして勝つことを最上の兵法としている。いかに自己を正確に把握し有事に備えておくか日々の我々の意識が肝要であろう。今合宿において改めて先人の息吹に触れることができ、より一層自分のルーツを確認できた。これからも日々の研鑽をつづけ真実の学問を希求し、後生によりよい日本を引き継ぐ決意を強くした次第である。

最後に今合宿の企画運営等に携われた方々、また諸先生方に対し深く御礼申し上げます。

慰霊祭前後

壮厳な大和の最期届いたか天は雷雨で答えたまふらむ

何が真実なのか

（西部ガス㈱　内野伸一郎）

今回、合宿に参加してまず感じたのが「真実を知る事の恐さ」です。普段の生活の中でいかに自分が何も疑問を持つことなく漫然と過ごしていたかに気づかされました。まず小学校で使用する教科書が全てではない事、そしてテレビや新聞で報道される内容が真実ではない事です。先生方の講義を聞き、その事を知った時には何が真実で何が虚像なのか解らなくなりましたが、先生方の助言のおかげで見極めの目を持つ事が大切であることがわかりました。

またこの合宿では私にとって大きな「宿題」をつきつけられました。それは、なぜ今の日本人が日本人としての誇り、

自信を失っているかという事です。戦後教育の影響、マスコミの誤った報道のせいだけではどうしても自分として納得いきません。この宿題を考えつつ、これからの生活を高い意識をもって過ごしていきたいと思います。

日の本の誇りを忘れた我々に古びた遺言が静かに語る

合宿の体験を生かし更に学びたい

（シバタ工業㈱　諏訪田義憲）

今回この合宿に参加したのは父の強い勧めがあったからです。私は今年で三十を数えようとしていますが、実は十六の時からずっと言われてはいたのですがその時及び二年前までは国文研の活動について知りたいとも思わないし、自分に関係のない世界であるとすら思っておりました。しかし二年前小林よしのり氏の戦争論を読んでから私の考えは百八十度変わり、まるで雷にうたれた様な感触を覚えました。それ以来、父に対する私の態度は全く変わり、最近では政治についても少しは話をするようにもなりました。

この合宿に参加して思ったのは講師の方が本当に今の日本に対し憂えていると共に愛国心があるという事です。私の人生の中でこの合宿に参加したのは非常に意義ある事と感じ、この不勉強な私ももっと学びたいと思います。

この貴重な体験を今後の自分の生活にも生かそうと思います。

瀬戸内の青き潮風浴びてゐると灰色のわれ洗はれるやう

自分の生き方を省みさせられた。

（若築建設㈱東京支店　池松伸典）

江田島といふ日本海軍の歴史において由緒ある地での合宿教室であったが、それにふさはしい思い出に残る内容であった。先生方の御講義を通し先人の文を味はっていくなかで、また日本のため命を奉げられた学徒らの遺書に接していくなかで、必死に生きてこられた姿を目のあたりに見せつけられて、現在の自分の生き方を省みさせられた。

現在の不安定な社会情勢の中で今後いかに生きていくかは、厳しいものがあると思うが、ありのままの自分を見つめ直し反省ばかりではなく、今一歩を踏み出していきたい。

自分の立場から考え実行していきたい

（福岡市立香椎小学校　是松秀文）

広島湾に浮かぶ風光明媚な江田島に行くことができたことが何よりの素晴らしい思い出になりました。また、海上自衛隊の中の様々な施設を見学したり、特に教育参考館で佐久間勉大尉や回天特別攻撃隊の黒木大尉、仁科大尉についての貴重な資料を拝見することができ、このような企画をして下さったスタッフの方々に心より感謝申し上げます。

講義は、中西先生のご講義が特に心に残りました。中西先生がこの合宿教室の意義をよく理解されていて、一般論的な国際関係についての話ではなく、学問・人生そして祖国について、自分自身がどのように考えるかという学問の立脚点について、親しくそしてわかりやすく話されたことにとても感動しました。

今後、中西先生のご講義をもとに自分の立場から考え、そして実行していきたいと思いました。

第二十六班―社会人―

次回も参加したい

（藤村酒造㈱　藤村孝信）

約十五年振りの合宿参加でしたが、合宿中最も印象深かったのは、東中野先生に依る吉田松陰の「士規七則」でした。今迄意味が解らなかったのですが、現代文によって、全容を理解出来た事です、又、過去の合宿時の友人と再会出来、自分を覚えて呉れていたことも嬉しい事でした。

最後に、私が再び、合宿全体に真剣に取り組めた事、全て感動の連続でした。有難うございます。

合宿で出会った人達へ

江田島の集ひの場にて得た友の気持伝はり我が胸は燃ゆ

新しい友と出会う事が出来た

（九州電力㈱　立山和幸）

同年代の人と同じ部屋に寝泊りし、研修を受ける事は、新入社員研修以来で、緊張しましたが、三日間の中で、新しい友人と出会い、多くを語る事が出来たのは、貴重な経験でした。

研修では、日本の国、文化を守る為、命懸けで取り組んで来られた先人達の思いに触れる事が出来ました。先人は、自分の思い、目的を、国の有り方という観点と同じ所まで高め、行動して行ったのであると云う事を知りました。

今の自分に同じ生き方が出来る自信はないが、社会人になった時の初心に返って今後の人生、仕事に取り組んで行きたいと思います。

江田島見学の折

松の木の空に向ひて真すぐにぞ伸びる姿に我が心正す

生命の言葉を交わす喜び

（筥崎宮　田村邦明）

初めての参加で、多少不安に似た気持ちが有りましたが、班員の仲間と共有した時間と空間に身を置き、班別研修で、単なる伝達の道具としての言葉ではなく、共感する生命（いのち）の言葉を交わして、胸の内を開いて語る事が出来た事が、何より

嬉しく、印象深い事でした。又、面識の無かった人同志が、研修が終わって友人同志になって行く、これこそ大和の心なのだと感じました。有難うございました。

先人の守り固めし国をまた護るは我等の務めなりしぞ

歴史の中に生きている喜び

（㈱山口銀行　濱本慶二郎）

私は、現在学生の採用を担当しておりますが、自分の思いを本当に伝える事が出来ているのかと、不安で、自問自答しておりました。

然し、この合宿で、自分自身の在り方をつかむ事が出来たように思います。それは、歴史についての認識を新たに出来たこと、連綿と続く歴史の中で、私が生きていることの素晴らしさに気付いたことで、自分に自信を持てるようになったからだと思います。

これからは、日本の歴史と伝統を受け継ぐ一人として、何事にも物の本質は何かという事を十分に考えて、行動して行きたいと思います。

江田島に今日の日本を憂ひたる若き友ら集ひて
慰霊祭御国の安泰願ひたる御霊に対し我ら誓はむ

歴史に学ぶことの大切さを知った

（㈱タケイ商会　竹井俊介）

この合宿で、明治、大正、昭和のお話を聞かせて戴き、自分の祖父母の時代には、まだ日本人の武士の魂が残っていたんだと云う事を痛切に感じることが出来ました。特に名越先生の御講議では、具体的な事実を解り易く、お教え戴き、より身近に感じられました。

合宿参加者で、ご高齢でありながら参加の牛島さんの女学校時代の教育の様子で、日本の誇りを学ばれていたことのお話を聞き、大いに現代の教育の問題点が浮き彫りにされました。

経営者としての毎日の中で、一本のスジを通して頑張って行きたいと思います。

江田島の空にはばたくつばめたち朝日を浴びて金に輝く

あっと言う間の三日間でした

（産経新聞社　大内保治）

あっと言う間の三日間でした。又、この合宿は初参加でしたが、敬愛する故小林秀雄先生のご講義のテープを擦り切れるほど聞いていましたので、まるで昭和四十五年より参加しているとの心持ちでありました。

先生が御講義された昭和四十五年には馳せ参じることが出

来ませんでしたが、やっと後れて三十三年後、先生ゆかりのこの合宿に参加する事が出来ました。心より御礼申し上げます。

改善点として、同じ班の人以外の交遊がほとんど不可能なので、出来れば夕食時でも、立食パーティー式で、いろいろな方々との交遊が出来ればと思いました。

微力ながら、今後も支援させて戴きます。

友人の長野県知事選への挑戦を想ひて

た、かひにいどみし大兄を想ひつつ言の葉紡ぐ夏の江田島

日本の宿命への心構えを新たに

（伊佐ホームズ㈱　伊佐　裕）

小柳陽太郎先生の御講義の中で紹介された、岡倉天心「東洋の理想」の中の、生命はつねに自己への回帰のなかに存すると云う文章が、非常に力強く響いて参りました。

人の生き方も、国の有り様も、常に、己の過去への思いを致す、国の歴史に同体となる事に依り、自ずと人も国家も本来の力を発揮出来ると云う事、グローバル化の中での日本人の宿命も、この一点より踏み出し、戦って行くという事だとの思いを新たにする合宿でした。

教育参考館にて

国の為失せ賜ひたる若き等の遺影の前に額づくのみなり

人の話を聞くことの大切さ

（日章工業㈱　山下誠彦）

今迄の自分の生活の中で忘れていた、学ぶ事、人の話を聞く事の大切さを思い出させてくれた三日間でした。

人の話を聞く事は、簡単なようで一番難しい事で、合宿中自分には、理解出来ない言葉も数多く有りましたが、これから、友人、家族、会社の仲間とともに学んで行きたいと思います。

日常話す事が下手な私ですが、短歌に表わすことで、心を落着かせ、短かい言葉で語る事が出来る日本の表現方式、心を大事にしたいと思いました。

江田島で学びしことを胸に秘め再会願ひて海渡りゆく

講義終へ友と語れば至らざる己を知りて心ひらかる

第二十七班―社会人―

新たなる力を得た

（熊本市役所　折田豊生）

今年も諸先生の御講義により、また、友らとの語らひにより、新たなる力を得ることができた。

戦後、わが国の混迷はいよいよ救ひ難いところまで来てし

まったが、中西先生から、六十年周期により、戦前の思潮への回帰が行はれつつあること、危機的状況下においては、国家の運命と個人の運命が近接し国家観が明確化するであらうこと等を伺ひ、わが国が本来の姿に立ち返ることにあらためて期待の念を強くした次第である。

見学で訪れた海軍兵学校跡には、今も、建物の内に外に厳粛な空気が流れてゐた。祖国のために、かけがへのない青春を、そして生命を捧げられた御霊の前には、黙して立つ外はない。

ますらをのかなしき生命しのぶかな兵学校の学舎跡に
吾子二人その友二人伴ひてこの江田島にともに来にけり
子ら四人何学びけむこの日々の学びのつどひに友らと語りて
おほひなる道に連なる喜びを知らなむおのおのわづかなりとも
今昔国の内外にこまやかに思ひを寄せて学びゆかなむ

伝統の息吹が感じられた

（産経新聞者　柴田眞佐）

体力的に私にはややハードな日程であったが、入社時の研修以来、久方ぶりの団体生活は新鮮なものであった。

歌心のない身にとって、短歌づくりは苦手であり、緊張したが伸び伸びと思いの丈を述べる新たな表現方法と考え、気軽に臨むとさほどではなかったが、短歌創作は感動を発見する心と、豊かな日本語を磨く覚悟が必要であると思った。

講義を通して印象に残ったことは、「国柄」論である。山内先生のわかりやすい講義で改めて、我が国の世界に誇る伝統を再認識できた。この思い（国を愛する心）は、東中野教授の吉田松陰論や名越先生の特攻にまつわる講話など、本教室全てに一貫しているものであると思う。

雷光る中での慰霊祭、都心部に長い私にとって、身近かにみる神事は新鮮なものであると同時に、表現し難いものの太古の昔から我が国に伝わる伝統の息吹が感じられ、血の騒ぎをおぼえる感動のようなものを呼び起こすものであった。

江田島で御霊に逢ふるうれしさに日本の明日への誓ひ新たに

学生達が日本再建に立ち上がるものと信じる

（折尾愛信高校　松田　隆）

今回、私は二度目の江田島でしたが、初めて今回講堂の中に入ることが出来、誠に幸いでした。それにしても、参考館の中の兵学校関係者の、先輩方の御名前を印した石碑の部屋は、二度目の今回も思わず、手を合わせずにはいられませんでした。

最後に、私は自由発表の際に、茶髪（金髪）の学生になぜ、貴方達は、茶髪（金髪）にしているのか代表者一名程に、聞こうと思っておりましたが、この十二日の最終日になって、その気持ちが無くなりました。それは、十一日の夜の集いにて、皆がそれぞれのアイデアを持ち寄って、夜の集いを盛り

上げ、その内にその気持が無くなったからです。
創作短歌にあるように、いずれ日本の国のことを教えられた学生達は、日本再建に立ち上がるものと信じます。それを信じて、私も又、明日より勤務先においても頑張って参ります。

朝のつどひにて他の研修団体の様子を見て

江田島の青年の家に集ひたる幼き子らは君が代を歌へず
君が代を歌へぬ子らは父母に日本のことを教へられざる
青年の家に集ひし若人も教へられれば日の本を知らむ
日の本を知りし若人増えたれば日本の国はよみがへるらむ

歴史の連続性を痛感

（湯亭こんや　青砥誠一）

夏空の下ここ江田島にて、合宿教室に参加出来ました事は、誠に幸福であったと思います。
此の度の合宿には、私、妻、長女、三名での参加でした。この国文研の体験を通じて、家族の絆が、一段と深まってくれる事を期待します。
講義に於て先生方の御話を聞いていて共通して言える事は、現在私達がここに存在しているのは、過去から連続している歴史の流れの中に居るのであって、過去の祖先、先人の方々の尊い犠牲の御蔭で、現在幸福に暮らしている事を決して忘れてはならないということです。過去を全て否定して、自分達がいかにも偉いかの様な思考法は、現代人の傲慢という以外何物でも無い。

真夏日の暑き太陽照りつけし蜜柑畑は連なりてあり
気持良き夏の海風身に受けて元気を出して体操をする
連綿と続ききたりし我が国の歴史の中に生きむとすらむ
真夜中の空突然に稲光りす慰霊の庭を照すが如く

正しい日本の文化を伝えてゆきたい

（静岡県立沼津商業高校　深澤直幸）

「姿は似せ難く、意は似せ易し」という本居宣長の言葉があります。ある国の文化伝統、歴史を学び、その「意」を理解することは、誰でもできますが、いかに理解したとしても、その文化伝統、歴史という「形」を自らの生き方として生きることは、なかなかできるものではありません。
現在、日本の文化、伝統・歴史というものが、あるべき姿形としてあらわれていません。政治、経済、教育等、全ての分野で日本という「形」が歪められ、危機に瀕しています。今回この合宿に参加して、教育に携わる者として、正しいことを正しいこととして、伝えてゆかねばならない責務が、一層強まりました。
有意義な体験ができたことに大変感謝致します。

世の中はうつろひゆくともここにある日の本の道たしかめ歩まん

国を思う事は両親、兄弟を思う事

（長崎中央郵便局　橋本公明）

社会人になって2回目の参加で、とまどうことばかりでしたが、社会人短縮コースで学ばさせて頂きました。

十数年ぶりの事もあって、何もかもが新鮮でした。

場所は、江田島という、歴史ある場所で、祖国・学問・人生を肩ひじ張らずに、自然な気持で学びました。

合宿で言われていることですが、国を思うと言う事は、自分の祖先、両親、家族、友人を思うと同じ事だと言う事をこの江田島の合宿で学びました。

自分の身近な生活の中から、又自分の職場を通じて日本が見える、世界が見えるような学び方をしてゆきたいと思っています。

班別討論の中で

それぞれの思ひの深さ偲ばれて怠りし身の励まされたり

歴史のつながりを実感

（肥後銀行　赤星貴紀）

何の予備知識も得ず、今回の合宿教室に参加しました。普段のこれまでの生活において、全く、関心を持っていない「天皇」「戦争」「精神」「文化」といったキーワードについて、私なりの「思い」は、ぼんやりと心の中にはあるものの、形としての見識は全く無く、自らの考えを述べられる方々の、熱心さに圧倒されました。

「考え方」の違いは、明らかに感じる事もありましたが、特に次の事柄について普遍的なものではないかと、心に残りました。

○歴史上の縦軸の上に自分も存在し、つながりの中において生きていること。

○正しいと思う事（義）を勇気をもって続けて行えば、更なる勇気が生まれてくること。

山緑島の緑に横たはる世界に通ず江田島の海

小柳先生の若さと情熱に感動した。

（ギャラリー源　清田　進）

小柳陽太郎先生の御講義の明治の精神で、村垣淡路守の態度と調和の精神、闊達とした営み、見事な人物像に親しみを感じました。また明治初頭、大きな宇宙観をもってアジアの問題に対した天心も改めて、その巨人たることを確認いたしました。

幕末から明治。真摯に生きた当時の方々が、国際人であり個性豊かであることが、現在の我国の退廃の主因を婉曲に物語ってゐる気がします。

それにしても小柳先生の若さと情熱には、恐れ入ります。講義の内容について、内容の素晴らしさに感謝申し上げると

共に、この偉大な先人のお話に接することもまた、それだけで、大いに幸せを感じております。

鳴る神も照覧あるか依代のさかきを濡らす雨は止まりき

第二十八班―社会人―

心が高揚した毎日であった

（元アサヒ飲料㈱　坂東一男）

九州、東京以外の地、ここ江田島での初合宿は大成功であったと実感。社会人短縮コースの班長を務めさせていただき感謝してゐる。日本の現状を憂ひ、現状を打破しようとの各方面での意欲ある人々に多く接することが出来、心が高揚した毎日であった。

班別討論でも、すぐに問題の核心に入ることが出来、互ひの思ひや志が伝はり合ったやうに思ふ。質（内容）、量（参加者）ともに充実した合宿であった。

江田島参考館にて佐久間艇長のメモを拝見して

うすれゆく意識のもとで記したる事故の状況綴りしメモはも

『大丈夫のかなしきいのち…』に込められしその歌思ひしばしたたずむ

かへりみて怠り多き日々なれど守りゆきたしこの日本を

確かな手ごたへがつかめる討論を！

（戸田建設㈱　青山直幸）

私自身は、今回、初めて社会人班の班付になった。若干とまどいもあったが、班員全員がそれぞれに問題意識を持って参加してをり、講義についての理解も深いと感じた。反面、講義の中で投げかけられた課題について、徹底的に議論をしてゆくといふ緊迫感に欠けるやうな気がした。本合宿に参加される社会人は、各々の職場や団体で活動され、苦労も多いと推察される。従って本合宿に参加することで、一種の精神的安堵感を得てゐるのではないか？そのこと自体は、悪いことではないが、もう一度、初心に帰ってお互ひに思ひをぶつけ合ひ、上すべりではない、確かな手ごたへがつかめるやうな討論が求められるのではないかと思ふ。

「全体感想自由発表」にて、日体大四年近藤雅美さんの発表を聞いて

自らの思ひと異なる主張にも反論できぬ悔しさ語る

自らの思ひ堂々と述べらるる勇気得たりと嬉しさ語る

口に出し自らの思ひ語り得る喜び溢れ涙ぐむ君

新鮮な感動を改めて感じた

（㈱エイド　山本茂夫）

第一日目の導入講義で布瀬先生から、今合宿の心構えとして「事実を見ること、自分の頭で考えること」を提起され、

初日から最終日まで一貫した流れの中で勉強させて戴きましたことは、特にこれまで過してきた会社を中心とした人生の〝良き反省の場〟を得られて幸せでした。今回、同年代以上の方々と心の交流が出来ましたが、各々が各方面で活躍されておられることを知り心強いものを感ずると同時に、これからも同じ志を持って相補い、互いに勉強を通じ心を通わせ合うようにして行こうと思います。それにしても、合宿に参加させて戴く度に感ずるのは、初心に帰るというか、新鮮な感動を改めて感じさせて戴ける体験が次から次へと出て来ることです。

稲妻と雷鳴ひびく齋庭（ゆには）にて心の静けさいやましにけり
明日ははや帰る日迎へ今夜のみ思ふ存分語りつくさむ

体得した眼識を明日からの行動に生かしたい

（広島県教育会議　奥中正之）

崩壊した公教育の立て直しを目指して活動している広島県教育会議に関わり、この日本が亡国の危機に瀕していることを痛感している。この危機を打開するには、正しい歴史観、国家観を持つ必要があることを改めて学ばさせて頂いた。

フランスのシャルル・ドゴールは「国を守ることは国を愛することに始る」と言い、更に「国を愛することは国を知ることに始る」と言った。大東亜戦争に敗れ、アメリカの占領政策とコミンテルンの赤化戦略のはさみ討ちによって断絶させられた我々の過去の歴史、誇るべき歴史文化の伝統の全貌をまだまだ体系的に把握していないことを改めて知る合宿教室であった。濃厚な学習スケジュールの中で体得した眼識を明日からの行動に生かすことを誓う。

雷神もしづまりしじまにかうべたれ父祖のみたまに祈りささぐる

誇りある日本人として努力したい

（㈱デノン　小笠原俊晴）

このたび、初めて参加させて戴きました。学んだこと、驚いたことは数多くあります。歴史の縦糸を大切にすること、決して傲（おご）らぬこと、日本といふ国を意識して常に国を忘れぬ気持を持って行動すること、良き先達に学ぶこと、今日の日本の礎となられた人々のことを学んで大切にすることなどいろいろあります。とりわけ歴代天皇のお気持ちをよく汲み取って、日本人の精神に極めて良く合ってゐることを今後の私の生活に生かしたいと思ひます。無私無欲、民のことを思はれる姿は尊いと思ひます。短歌創作は苦しく、言葉の不足、表現に自分の気持を素直に写す難しさ、センスの無さなど痛感致しました。これからも世の中を見、歴史を学び、誇りある日本人として努力したいと思ひます。

教育参考館内の兵学校卒業写真を見た後

この島に学び始めにし吾が父の十六の春偲びつるかも

敷島の道に私もつながった

（ツクダ商会　紹田照雄）

今回、この合宿に参加できたことを感謝いたします。「日本への回帰」というテーマをもっておられるこの合宿と会の意義については、自分自身のテーマとしても考えていたことなので、準備されたあらゆる事が、私の心にかなった事でした。ほんとうに会の皆様ありがとうございました。集われた方々も、古い方も新しい方も気持のいい方ばかりで、初対面とはとうてい思えない程でした。短歌創作もはじめての経験でしたが、敷島の道に私もつながったと実感できうれしく思いました。縦につながった自分の生に一層の自覚と自信を覚え、さらに横のつながりもでき感謝にたえません。

敷島の道につながり我もまた日本人たる自覚あらたに

改めて日本の良さが解った

（㈱正和電工　東上床健二）

初めての合宿でしたが、それぞれが新鮮な驚きと感動でした。この合宿で先生方の講義を聞いて改めて日本の良さが解りました。世界に誇れる国だと思います。我々の世代は戦後の教育の中で日本人として誇りを持つような教育を受けてこなかったということを強く感じました。又、日本がいかにゆがめられた歴史観を持たされているのかが解り、怒りを覚えます。今後はさらに勉強を続けると同時に、同じ問題意識を持った人達で手をたずさえ、実際の行動に移す事が重要だと思います。

江田島に集ひてうれし夏休み多くを学びて友とわかるる

慰霊祭は得がたい体験だった

（産経新聞社　佐伯浩明）

中西輝政先生の講義に始まる一連の講座は皇室制度の尊重を基とした日本の伝統文化の系譜を踏まえ、祖先と我々をつなぐ縦軸の感覚を持つことを訴えた堂々たるもので誠に勉強になるものでした。また合宿の中心である慰霊祭は祭壇作りから参加させて戴き、誠に得がたい体験でした。玉串奉奠は思いもよらないことで、坂東様には御世話になりました。折からの時雨で湿った大地は厳粛な式典にふさわしいものとなりました。皆様のご苦労に改めて頭が下がる思いです。さらに、この合宿の特徴である短歌創作は日本語の美しさ、大切さを呼び覚ますにはうってつけであると思います。高校の時以来の短歌創作を味わうことができ、本当に楽しい体験でした。短期コースの夜の集いが時間切れで終ったのは残念でした。

健児らも乙女らも学ぶ和歌の道笑ひ響きぬ創作の朝に

興国の念を次世代にかたりつぎたい

（島根ふるさと情報ＩＴ（協）　安部忠宏）

久しぶりに学ぶ体験をさせて頂き、短歌作りをしてみていかにすなおな感性が必要かを感じました。短期間でしたが、国想う同志に巡り会い、真に興国の念を次の世代に、そして母となる若き女性にかたりつぎたい気持です。各界各層そして全国津々浦々より集いし人々、若き世代の多きを見るにつけ、五十代、六十代のこれからの役割を改めて再認識させて頂きました。行政に対してもっともっと積極的にかかわる必要があります。現在地方は町村合併で頭が一杯で、国の事や教育の事など考えていないのが現実です。このような時に、具体的に、現実的にどう展開すべきか？映像で訴えられれば若人らの関心も得られると思う。プロジェクトＸのように明治から昭和、敗戦までを写真や映像でつないでＣＤ化したらどうでしょう。

吾が想ひ国の行ひ正さむと仲間集ひてかたりかけたし

第三十一班―社会人―

伝統につながって生きていることに気付いた

（主婦　小山泉子）

合宿教室に参加させていただき心から感謝申しあげます。先生方のお導きでみ国の伝統に細々ながらもつながって生かせていただいてきたことを気付かされ、深めさせていただきました。満ち足りた気持ちで帰ることができます。御会の末ながい発展をお祈り申し上げます。

日本回帰への希望を持てた

（主婦　牛島雅子）

今回初めて参加し、各方面の勉強ができて感謝致します。中西先生の御講義で二十一世紀は帰るべき所に帰るという回帰の時であり、六十年毎に今までの歴史がはっきりとしてくることを教えられました。日本もやがて祖父達が築いた日本古来の姿に立ち帰るという希望を持つことが出来たのは誠に喜びでありました。

名越先生からは、戦艦大和の号砲を聞かせて頂き感無量でした。鎮魂のラッパは私の胸に焼きつき永久に忘れることは出来ません。言葉には現せない感謝でした。

大君の深きめぐみをいただきてこの日の本に生きる幸せ

講師の魂のこもったお話

（主婦　安河内階子）

三日間の合宿に参加出来ましたことを感謝いたします。一流の講師の魂のこもったお話を聞いて幸いでした。講師お一

人お一人のお言葉の中に日本への祈りを感じ言霊を感じることが出来ました。

中西先生の話の中で我々がもっと目覚め、日本の尊さを知り、毅然としたら近隣諸国も変りますとの言葉に励まされました。また東中野先生の御人格にもふれることが出来て感動しました。さらに小柳先生はさわやかな清いお姿で明治の日本人を讃え愛をもって私達に悟して下さいました。戦争をくぐって来られた先生のやさしさ、全てが勿体なく体にしみております。ハイライトは慰霊祭です。素朴で深い鎮魂の祈り、厳かで聖なる空気、それに煌く稲妻の光、天地一つの祭りに参加出来て感動でした。

なぎさより沖へこぎ出す思ひして出会ひの旅のありがたきかな

日本の心を大切にしていきたい

（元教員　古波蔵啓子）

この合宿に参加できましたことを大変有り難く幸せに思います。密度の濃い内容の高い、すばらしい講義でした。

幕末の志士、吉田松陰をはじめ、村垣淡路守の気品ある言動に胸うたれました。志を持ち、常に人としての道を極め、職務を全うされたこと、今の政治家・官僚に学んで頂きたいと思います。

左傾化した日本の社会に対し、又、職務をきちんと果たしてもバカを見る社会に諦める気持ちも心の深い所ではありましたが、名もなき民として日本の心を大切にした日々を送りたいと考えております。

若い学生の皆様が是非この合宿での勉強の成果を実生活に生かして、日本再興の核となって頑張って頂きたい。

国文研の諸先生方、合宿中も裏方をなさった運営委員の皆さま、ありがとうございました。深謝申し上げます。

江田島で若人と学んだ合宿も思ひ出されて名残り惜しけり

第三十二班―社会人―

先人の思ひ無駄にすまい

（企画・デザイン工房ｂａｎｕｐ　諏訪田尚子）

今回の合宿で最も印象に残った事は、小柳先生のご講義「明治の精神」です。明治の外交は今と違って卑屈にへり下ることなく対等にあらうとした。しかし決して驕り高ぶることはない、華美な物にも心惑はされず、責務を全うした。

このやうな事は、自分の利益ばかり考へて生きてゐたのでは到底ててこぬ発想です。ご先祖様を敬ひ、未来の子孫を思ひやる心があったからこそ出てくる行動だったのだと知ることができました。

今我々日本人の大半が忘れてゐる感情を知り、心が洗れる思ひがしました。そんな素晴らしい先祖の方々を誇りに思ふ

と同時に、我々はそれらを引き継ぎ、語り継いでゆかなければと、心に深く刻みました。

我が父祖の堂々ひるまぬ志今の我らに勇気賜る
世の中の不満をならべたてるならまづは己れが立ち向ふべし

日本の事、自分の事を見つめ直すことができた

（小浜保育所　古賀若菜）

私はこの合宿教室の事を何も知らないままに参加したのですが、先生方の講義を聞いているうちに、自分の無知にショックを受け、色々な事を考えさせられました。班別研修で自分が今生きている日本の事、日本の過去の事について自分の思っている事、感想等を話し合う事は貴重な経験でした。

今まで短歌をつくった事がなくどうすれば良いのかわかりませんでしたが、自分の思いや考えが自然に短歌としてよむことができました。

参考館の見学は最も印象に残っています。先人の遺書を読み、胸がしめつけられる思いがしました。そして今の自分がしっかりしなければ、今の時代の子供達に正しい日本を伝える事ができない、今のままで満足していてはいけないと思いました。

毎日同じ事のくり返しで、平凡な日々を過ごしてきた私でしたが、日本の事、自分の事をしっかり見つめ直し、考える事ができました。知識はもちろん、考え方、視野さえも変った気が致します。

きらきらと光かがやく江田島の海を見つめて故郷思ふ

日本のことをもっと知ってゆきたい

（小浜保育所　河原畑めぐみ）

私が今度の合宿で一番感じた事は、自分の国のことをあまり知らなかったのだな、という事です。

短歌を創った事も小学生の時以来で難しかったけれど、良い経験になりました。自分の今思った気持ちを三十一文字という少ない文字で表現する――。無理なようで、やってみると意外に楽しく創作することができました。

参考館の見学はとても良い思い出になりました。特に特攻に行かれた方々の遺書が印象に残りました。私と同じかそれより若い人達が進んで行かれた。もし今、同じ状態になったとしたら、私にはとても無理な事だと思いました。そのような方々の事を胸に生きておれば、今までとは違った考えが生まれてくる気がいたします。

私が生まれ育った日本という国を、もっと良く知る事ができるよう努力したい。そして自分の国の事を大好きになり、（今でも好きですが）日本人である事を誇りに思い、自分自身にもっと自信を持って生きてゆける女性になりたいと今回の合宿教室に参加して思うことでした。

人の為己（おの）が為にも分りたし父祖の思ひと日本（にほん）の歴史を

考え方が変わった合宿教室

（日の出保育所　濱岡典代）

私がこの合宿教室に参加させて頂いて良かったと思う事は、日頃考えなかった事を見たり聞いたりできた事です。そして全ての物の見方が変わったように思います。

印象に残ったご講義は、東中野先生のご講義です。松陰先生のように歴史に名を残す事はできなくとも、自分のできる範囲で正しいと思う事を何か一つやりとげたい――人の役に立てる何かを。そのような事を心に留めつつ、誓いをたてました。一、笑顔を絶やさない。二、履き物は揃える。三、挨拶をする。そして四、自分の考えを持つ――。途中で挫折しないよう、自分に厳しくしていこうと思いました。

参考館では、特攻隊の方々のお手紙や写真を見た時、涙が出てきました。お国の為にと愛する者を残していく心情はとてもはかりきれません。御両親も特攻隊になる為に育てられた訳じゃないのに――と悲しくなってきます。私達と同じ年代の若者です。これからやりたい事だって沢山あったはずです。自分の身を粉にしても守りたかった祖国――。彼らの気持ちを忘れてはならないと思います。

短歌の批評では周りの動物、物、人間、そして自分自身に無関心で生きてきたかという事が身にしみて分かりました。今日という日は二度とこない。今の一分一秒を悔いのないようしっかりと生きたい。常に五感を使う努力をして行きたい。そしてこの合宿で学んだ事を忘れないよう、自分の心田を耕しながら人様のお役に立てる事を考え生きて行こうと思います。二泊三日、有難うございました。

先人の勇ましき姿学んだが今の我らに真似出来ようか
本当は仲良くしたいはずなのに何故起こすのか人は戦（いくさ）を

先生方の熱い思いがまっすぐ入ってきた

（㈲マックス　牧　美和子）

今回の合宿には短歌の勉強の為に来ましたので、開会式で皆さんが高らかに国歌を歌い始めた時には怖くなって、間違ったところに来てしまったと思いました。今までの私は漠然と日本に対する危惧感は感じていましたが、天皇家にも国政にも日本の歴史にも無関心でした。ですから「今どき自衛隊に入りたいという若者ってどんな人なんだろう」とか「皇居で旗を振っている人って何を思っているのだろう」とか考えていました。

しかし、この合宿に参加し、講義を聞くうちに少しずつ、そういった方々の気持ちが理解できるようになりました。最初のうちは、講義中に集中力を欠いていたのですが、日程が進むうちどんどん頭が冴えてきて、重要な史実、先生の思いなどの耀く言葉の数々を一言も聞きもらしたくないと、熱心に聞き入りました。

特に印象的だったのは、小柳先生がご紹介された遣米使に

ついてです。彼らのブカナン大統領との会見は、ワシントン新聞報道において「使節の人々の品格の高さ、名誉を備えた聡明さ、たしなみ深さは、礼節においても、役目に対する責任感においても、アメリカの全知能をもってしてもこれ以上何かを加えることは不可能だ」と絶賛されました。「言葉の違いや文化の事前情報の全くない異人種に対して、どうしてそこまでわかるのか」と思い質問致しましたが、先生のお答えは「そんなものがなくても伝わった」ということでした。そして私は、これほどまでの感動をアメリカ人に与えた私たちの先人の凄さに改めて驚き、人間の中身や心というものは、言葉や文化を超えて通じるものだと感じました。

現代の日本は文明が発達し、また言葉を上手く操れる人も増えたと思います。そこには、理屈やマナーの上では間違っていなくても、マニュアル通りというか心がないと感じることがたくさんあります。

今回の講師の先生方には、それぞれの方の中に自分の意見があり、それを伝えたいという熱い思い、心があり、それがまっすぐ私の中に入ってきて、受けとめきれないくらいでした。

誇るべき日本の文化と先人を学ぶうち、過激なナショナリズムの象徴と考えていた特攻隊を始めとする戦争従事者とそれを祀る方への考え方も一八〇度変わりました。

私の班の班長が去年この合宿に参加後、見える世界が変わったとおっしゃっていて、最初は不可思議に思いましたが、私にも同じ変化が起こったと感じます。今回の合宿で得た宿題を、長い時間をかけて応え続けていかなくてはと思います。

みたままへに恥づべきことが何か知り恥ぢ入るばかり江田島の夏
先人の後ろ姿を追ひかけて今授かりしつとめはたさん

涙があふれてとまらなかった

（無職　小菅紀子）

合宿は密度が濃くて、体力的にも精神的にもとても疲れましたが、来る前と今とでは明らかに自分の中で大きな変化が感じられます。

一日目の講義で布瀬先生が、「仕事の基本は事実を見ること、自分の頭で考えること」「既成のもの、先入観等に安住していては進歩はない」とお話されました。小さい頃から父が日曜日の夕食の時「お父さんのお話」という時間をつくって、歴史の話をしてくれており、今もそれは続いています。私はいつも父の話をなんとなく聞いているだけでしたが、とても有難いことだったのだと改めて感じました。只、合宿中先生方が言われていたことは「自分で」事実を正確に見つめ、「自分で」考えることが大切だということでした。何事も自分の中で深めていく努力をしようと気付きました。

東中野先生の講義では、「自分がたてからのつながり、横とのふれあい」によって生かされていることを教わり、その後の参考館の見学で、数々の遺書と遺影を拝して「母さん、

よくやったと言ってくれ」「弟よ、妹よ、私を忘れないでくれ」という言葉を見て、若い身で死に直面する気持ちが深く伝わってきて、それでも「九段に会いに来てください」と言って明るくいさぎよく征かれた方の心に対し、今の私達は、自分も含め、裏切ってしまっている様で、涙がにじむというより、あふれてずっととまりませんでした。こういった資料館に行ったことは何度かありましたが、あんなに泣いたことは初めてでした。いろいろと勉強した後に直接その言葉にふれると、じかに心に伝わるのだなと知りました。

慰霊祭では豪雨がピタリと止み、終了するとまた降り出すという不思議な体験をし、私達の合宿を応援し、見守って下さっているような気さえしました。

短歌相互批評は初めての経験でしたが、皆さん本当に真剣に考えて下さり、またそれを通して、自分がその時に感じた気持ちが鮮明になり、友達の短歌を批評していく中で、人の気持ちをくみとるという難しさ、伝える難しさを知りました。

感じたこと、経験したことがとても多く、まとめきれません。ただ班長さんが最初の自己紹介の時に、「帰る時には景色が違って見える」と言われた意味が、今なんとなく分ります。また同じ班の牧さんとは、色々なことをお話でき、初めて会ったとは思えない気持ちが今はします。全てはこの合宿のお陰です。これからも合宿で教わったことを少しずつ自分のものにしていき、本を読む努力をし、祖先を敬う気持ちを忘れずに、私にできることを、小さなことからできたらと思います。

限りなき誠の命を受け継ぎて我の命に続く尊さ

班友の牧美和子さんに

班友が閉会式では堂々と君が代歌ふ姿うれしき

目からうろこ状態

（福岡コミュニティ放送〈FM・ミミ〉内野美佐緒）

番組で、この合宿の様子を紹介したことは、何度もある。しかし、自身が参加したのは初めてだった。最初スケジュールを見た時、自分の〝心〟が鍛えられるのか心配だった。が、実際に参加して思ったのは、「良かった」ということ。確かに、長時間の講義は、大変だった。でも、一度も、眠たい、退屈だと思わなかった。色々な話を頭に入れる度、その昔、歴史の教科書をめくっていた頃を思い出した。でも、そこにはなかった話が、山の様にあった。目からうろこ状態でした。私事で、一泊二日での参加だったが、私の中では、とても大きな二日間でした。

合宿中に創作された「短歌詠草」

―しきしまのみち―

短歌創作について

この合宿教室では、例年、主催者を含めて参加者の全員が、短歌を作ることにしてをります。これは、この合宿教室の大きな研修課題の一つであり、今回も多くの短歌が創作されました。

短歌は、現代においては、人々の日常生活には馴染みの薄いものとなり、文学的趣味の一つとしてしか受け容れられなくなってしまってをります。従って、この合宿教室に初めて参加する学生青年諸君にとって、短歌創作は大きな戸惑ひであり、かなりの負担でさへあるかに見受けられるのですが、合宿日程を追ふにつれ、自らの心の動きを言葉にすることのむづかしさ、まごころの籠った言葉の奥深い味はひを多少なりとも体験して行く中で、次第に、その意味が把握されて行った様に思はれます。

そもそも日本人は、千数百年の昔から、「万葉集」に見られるやうに、あらゆる身分・職業の人々が、学問知識の深浅、老若男女の相違を越えて、五七五七七の定型の中に、折々の自己の思ひを素直にうたひ上げてきました。自己の内心を赤裸々に短歌の上に表現することは、同時に厳しい内省を伴ふものです。いはば短歌創作の過程で、厳しい心の鍛錬が行はれるのです。そこで私達の祖先は、短歌を詠むことを人生の修行の一つの手段と考へて「しきしまの道」と呼んできました。日本人は、短歌を詠み交はすことによって、人間にとって最も大切な心の働き、情意を厳しく鍛へ合ってきたのです。先祖の歌を学ぶことは、私達一人一人の心の中に先祖の姿を蘇らせる作業であり、自分が紛れもなく先祖とつながりをもった日本人であることの発見であり、また自覚なのではないでせうか。現代の教育では、知識の集積や論理の整合に重きが置かれ、人間にとって最も根源的な心の問題がなほざりされてをります。本合宿では、かうした現代教育の束縛を自ら感知し、そこから一歩でも抜け出さうとする営みが、この短歌創作とその後の参加者同志の相互評価によって集中的になされてゆきます。心の奥底に眠ってゐるまごころを呼び覚まし、人のまごころに敏感に感じる、素朴にして溢れる人間性を取り戻さうとする

試みが、ささやかながらも実現されてゆくこの貴重な経験は、参加者全員にとって、忘れがたい印象として心の奥深く刻み込まれるに違ひありません。

合宿二日目の午前、是松秀文氏（福岡市立香椎小学校教諭）により短歌導入講義がなされ、短歌を作る上での基本的ルールが指導されました。その後三日目の夕刻までに各人が創作した第一回目の短歌が提出されました。慌ただしい日程の中で生み出された短歌ではありますが、作者の集中された内心の働きがはしばしに表現されてをり、作歌上の巧拙を越えて、強く惹かれるものが籠ってをります。提出された短歌は、同時に国民文化研究会会員による選歌・印刷のための清書作業を通じて、翌日には歌稿となって参加者全員に配布されました。この歌稿をもとに青山直幸氏（戸田建設㈱開発課長）によって、短歌全体批評がなされました。ユーモアを交へた御話の中にも一語一語に含まれる作者の心を全身をもって偲ばれ、直されてゆく姿に、参加者は短歌批評のあり方を自然に感得したのでした。

その後、各班ごとに班員全員による相互批評が行はれ短歌の表現を通じお互ひに友達の心に触れ合ふことが出来、合宿生活において、寝食を共にし、胸中を披瀝し合って来た友情の結び付きが、一段と確認されました。

短歌創作を通して展開された、まことに稀な精神生活の体験は、参加者ひとりひとりに、言ひ知れぬ喜びをもたらすことになりました。

ここに収録された歌の数々は、班員の心を集結して推敲・添削されたものです。その表現形式においては稚拙なところも見受けられますが、これらの短歌の中から瑞々しい貴重な魂の輝きをお読みとり下されば、と心から祈念する次第です。

短歌詠草（しきしまのみち）合宿第一回目の創作作品（参加学生の第二回目の作品は感想文の末尾に収録）

第一班

亜細亜大学院卒　清田直紀

次こそは声を合はせて息合はせ櫂漕ぎたしと
後ろの櫂みる
國のため尽くしし人のふみ読みてこみあぐる
涙ぐっとこらへる
父母の御名を大きくしるしたるふみおきて行
きし若人しのばる

東北大学院教育学二　大岡一亘

佐久間勉艇長の御遺言書を拝観する
乾燥機は折り目破れ目をつけられて格子のご
とく区切られてあり
色あせし紙の上にぞ残りたる鉛筆の跡の濃厚
なるあり

慶應義塾大学理工、数理四　堀江良明

炎天下暑さにだれる我が心厳しき号令でぐっ
とひきしまる
繰り返し水をとらへてオールこぐ両の腕（かひな）に
汗がしたたる
手を休め周りの景色に目をやれば江田島から
の遠きことかな
私心なき特攻隊の顔見れば驚くほどに涼しき
ことかな
参考館一歩入れば澄んだ気に心洗はるる心地
するかな
カッターをこぐ学生のみこころはいかなこと
かと思ひ巡らす

人間環境大学人間環境学三　角田誠治

カッターと切るカッターを間違へて恥づかし
ながらも楽しみに思ふ
並びたる我らに一喝する声の内なる声に心打
たるる
初めての海の怖さに身を乗せて恐れを押して
いざ漕ぎださん
とにかくに余裕なきまま漕ぐゆゑに景色見れ
ぬは少し悲しき
風をきる音の違ひに気がつけば皆の心が一つ
になりけり
緑葉と塩の香と波の音肌で感じた江田島の夏
女の子隣に乗せて漕ぐ船は櫂も心も軽くなり
ける
手の痛み熱き日射しはあるもののなぜか楽し
きカッター体験
国のため国のためにと亡くなるる誰の御魂に
我が国見せん
明日には死ぬ身なれども悔いなしと今を生き
たる姿雄々しき
回天に乗りて行くらむ大海の何処に光を見出
しけるかな
同い年書きたる遺書を読みけるに郷土の友を
思ひおこさん

九州大学農農政経三　森永賢司

号令に合はせて海面をこがむとす手に伝はり
く櫓の重さかな
暑き日差し浴びつつ沖へとこぎ出づれば風強
く吹きて快きかな
吾が船を追ひ越してゆく船をれば負けたくな
しと思はるるなり
先をゆく舟に追ひつかむとがんばるもこぐ手
徒らに疲れゆくなり
沖に出で櫓をこぐ腕を休めつつ茶を飲みたれ
ばおいしかりけり
かけ声を皆で合はせつつ船こげば早くすすみ

たるやうな気のせり
日の本を守りし東郷元帥の絵ゆ感ず遠く見つめる強きまなこを

中央大学文英米文二　岩　越　弘　毅

持ち帰る先は畳の上かな海原を吹き抜ける潮シャツの中
炎天下直立したる松の木はいつかの海の遠い人かな
帰り来て畳にまろべば今もなほ潮舞ふ海の眼かひにあり

九州工業大学情報工制御システム二　多　賀　裕之介

瀬戸の海オールをこぎて進み出でみ空仰げばひたすら青し

熊本大学工環境システム工一　坂　口　晋

声合はせみなで気持ちを揃へつつこげば動きぬ速力増して
国を思ひ旅立つ心安らかにただ父母よ泣くことなかれと

第二班

早稲田大学法二　高　木　将　史

教官の怒声のひびく艇内にもるる笑顔に昔思ほゆ
国防の心を知らず育ちつも若人の声胸に迫り来

明星大学人文学心理教育四　久　田　広　光

腰折れでいいから相手を想ひ出し和歌を詠まうと大人はのたまふ
「いちにい」と皆で合はせてこぎゆくといつしか沖は遠くにゆれるも
電灯の明かりのもとで日記かく我を思はれ声をかけらる
先生の「暗くないかい」と述べられし言葉に心も和みゆくかも
煙あげ火を引きながらも敵艦へ突入せむと急降下せらる
先生の読まれしところをじっくりとみつめて線引く友は尊し

防衛大学校人間文化三　鵜　川　優一郎

暁に英霊眠る江田島にいかにぞ歌はん日の本の歌

亜細亜大学国際関係三　熊　田　康　則

国思ひ御魂を賭した先人の御顔はなんと美しきかな
浮雲の間からこぼれる陽光に照らされたのは我がこころなり

九州工業大学情報工学生物化学システム三　大　津　健　志

ひさびさに「静かにしろ！」と怒られてはづかしくもありうれしくもあり
本当のきびしさ知らず生きてゐる今の子思ふととても悲しき
オール漕ぎまめをつぶすも気にせずに声を出すのは気持ちよきかな
予科練の走る姿を思ひつつ青草しげるグランド眺める

人間総合科学大学人間科学二　上　田　真　一

情けなや我が生き方と比ぶれば先人たちの思ひはふかし
亡き祖母の元気な姿しのびつつ葬式行けずに涙を流す

中央大学商会計一　寳　邊　浩太朗

暑ければこぎたくなしと思へども終れば心ちょっと満足
泣くまいと覚悟を決めて眺めつもなかなか読めん昔のことば

高校卒業　新　垣　貞　治

太陽にやかれて坂を下り行けば山一つ越ゆ坂
に詫び入れ
道の端の木陰を選び歩いても流るる汗は一歩
づつ増え
厳しさでカッターの危険教へんと声張りあげ
るやさしいおじさん
オールからふと目を上げれば大海を我カッ
ターはぐんぐん進む
大海を風きり進むカッターの乗り心地これ最
高最高
櫂たたく波からちぎれし波しぶき顔にかかり
て汗と交りゆく
乗る前は「笑ふな！」一言指導員女子の笑顔
見笑みを浮ぶる
思ふより速く滑りしカッターは皆の力の結晶
ならむ
特攻の精神これは偉大なる世界の平和望む心
ぞ
ますらをの命をかけて愛さるるもの護らんの
心眩しき
我これをいかなる歌によみあらはさん崇高な
魂の書の清らかさ
大西滝次郎中将の書に我の謬り教えられ新な
思ひ湧き出にけり
国守るのみ特攻の精神と我考へし今の今まで

九州大学院数理学研究院講師
高　瀬　正　仁

空と海のあはひに映ゆる島かげに若き友らの
カッターの見ゆ
同学の若き友らと語り合ひて新たな道の芽生
え覚ほゆ

（二回目の作品）

大雨ありて涼風そよぐ合宿の夏の海辺をなつ
かしく思ふ

アサヒ飲料カテゴリーマネジメント部
澤　部　和　道

パノラマに広がる海山見渡して目にやきつけ
るこれは江田島
宮島の鳥居くぐりてせし参拝は最高だよと大
人の語るる
今の世にはかり知れない先人の思ひの深さ胸
にせまり来

第三班

國学院大学法三　古　川　貴　祐

我忘れブレード見つめこぎし後瀬戸の海風す
がしと感ずる
巨大なる主砲を仰ぎ見つつをれば陸奥の勇姿
の偲ばるるかな
木の影におかれし碇は雪風のものとわかりて
心ふるへる

麗澤大学国際経済四　栗　原　　章

参加者の大なる声を耳にしつつ和して歌へば
心高ぶる
若きゆゑ私が征くと母なだむ勇士の姿決して
忘れじ
この思ひ御魂に誓ふ覚悟もち我も続かん御国
の為に

防衛大学校国際関係三　大　野　毅　彦

若人等両手のひらにまめつくり徐々に合ひゆ
く櫂のしらべは
短艇の操法難し櫂合はず櫂と格闘暑さ忘るる
英霊を参りて後に思ふかな国への誠いかに深
きか
国のため若きもののふ身を尽くし今の日の本
我生ける也

九州ルーテル学院大学人文三
野　口　寛　記

湧き水を囲みてはしゃぐ子らを見てなにげな
き日の尊さを知る
炎天下いつもの場所で待ちぼうけいつもの様
に溜息をつく

東京理科大学二　小　堀　知　輝

汗をかき江田島見ゆる舟の上飲みし飲料のど沁みわたる

江田島の海の広さにひるがへるわが日の丸のたけだけしさよ

島根大学法文学社会システム一　首　藤　直　樹

にはか雨かみなりの音におどろいて池に飛び込むモリアオガエル

就職先皆無に等しき世なれども為すべき仕事は山のごとくに

先人の生き方学び自らの認識深むる道を行きたし

九州工業大学院生命体工学脳情報二　高　橋　俊太郎

家を出て遠くへ来たと思ひつつ江田島見やり心引き締める

早い夜寝れるものかと気にしつつ旅のつかれでぐっすり眠る

滝の汗かきたる後に飲みたるはうまき水にて一気に空にす

白砂の熊手のあとに江田島の細かな心をかいま見しかな

同じく参考館見学のとき今日が私の誕生日であると思ひ出して

英霊の想ひを胸に受けながら今日またひとつ年を重ねる

日本不動産学院　野見山　優　亮

炎天下四苦八苦しつつこぐカッターしぶきをあげて波切り走る

国のため家族のために逝きし命名を連ねけり壁一面に

新潟工科大学工学部建築学科教授　大　岡　弘

久々に会ひたる友と語りつつそぞろ歩きぬ昼の浜辺を

掛声の聞え来る方目をやれば我らがカッター進み来るなり

往きし様と比較にならぬかいさばきに友らの精進偲ばるるかな

広域にわたりてよくぞ闘ひし御跡ししるく地図に残れり

東郷平八郎元帥の遺墨を拝見して

すめみまの生れましし日に書かれたる遺墨の文字は「天壌無窮」

四文字なる言簡にして意を尽す遺墨の跡をしばしながむる

第四班

亜細亜大学国際関係三　野　村　亮

海向ふ道の途中で友どちと期待と不安を語り歩けり

指導官厳しい口調で接したる海の危険を知るがためなり

南漠に艦もろともに沈みたる提督達の雄姿を偲びぬ

北海道医療大学歯五　鰐　原　洋　平

炎天下皆の気持ちを一つにし大海原をカッター漕ぎゆく

英霊の想ひを胸に刻みこみ心うたるる江田島の夏

皇學館大学文国史四　大　野　広　学

艇を漕ぐオールでリズム合はせつつふと感じるは皆の一体感

敷島の大和魂学びては身の引き締まる江田島の土地

先人の父母におくりし文読みて堅い覚悟に身の引き締まる

関西大学総合情報四　吉　川　元　博

皆の声波・カイの唄夏和音碧き瀬戸にぞ泳ぎ旅立て

あれこれと話はすれど結は来ず瀬戸の空にて

未だ揺蕩ふ
凛とした表情して在る陸奥の砲昔も今も何をか架けむ
倭の心学び学びし巨木なり刻みし年輪回帰の時かな
平成の乱れし世なれど先人の思ひ今なほ生きゆく地なりき

九州大学農生物資源三　村　山　賢　一

こぎ方も習はぬ前にカッターを沖へ出すためこぐやう言はれし
我の前に先生来たりてオールをば一緒にもちてこぎてゆくなり
短艇を下り救命胴衣ぬぎたれば汗にしめりしシャツにおどろく
実際に見たる主砲は写真にて想ひしよりもはるかに大なり
かくばかり巨大な砲をのせたりし陸奥はいかほど巨大なりしか
かくばかり巨大な砲をいかにしてあやつりねらひをさだめらるるか
かくほどの主砲つくりし日本の科学技術はすごしと言はれて
吾が今まで見たる兵器のいづれより巨大なりせばおどろきたるなり

学習院大学法政治二　黒　田　康　裕

風を切り波かき分けるカッターはかけ声ひびく我らが砦
先人が命を懸けし志我らも胸に秘めて進まむ

杏林大学社会科学二　青　木　啓　昌

水の上照りつける火に身を焼かれまぶしい海に我飛び込みたし
敷島の大和魂学びては身の引き締まる江田島の土地
我が祖父母国を守りしその覚悟現世のわれらにせまりきたるも
平成に惰性に生きし我が世代せめて祖父母に手を合はせよう

九州工業大学情報工学生物化学システム一　高　田　誠

先人の寄せた思ひを書きありて忘れたるもの思ひ出すかな

初めてカッターに乗りて

懸命に皆とかいをこぎいでて汗かきつつも楽しかりけり

熊本県立天草高等学校教諭　今　村　武　人

力強く「行ってきます」と父母に残せる文を読むも悲しき
新聞(すりぶみ)も「東郷元帥薨去す」と見出し大きく書かれをるなり
東郷の雲居にかくれし出来事は外国の新聞にも大きく載れり
一面の記事をし読めば国民の悲しき思ひ伝はりにけり

布瀬さんのご講義を聞きて（六氏先生と伊沢修二）

台湾に臣子の道を示さんと危険知りつも任務に就けり
先生ら惨殺されど志高くかかげて募集を行ふ
教育は人の心に這入らねばと語る言葉も激しかりけり
ゲリラらがばっこする地に八百人も教員募集に応へをるなり

カッターに乗る

その昔海軍学生も練習せし江田島沖を今航行せり
海原にひびきわたれる若人のこゑ高らかにオールをこげり

神奈川県立小田原城内高等学校定時制教諭　原　川　猛　雄

六氏先生の遭難

はるかなる新附の民の教育に命捧げしいさを尊し

カッター体験

教官の声に合はせてオール漕ぐ若人の姿写し絵にとりぬ
教官のユーモア溢る励ましに楽しく過せしカッター体験
楽しげに友と一緒にオール漕ぐ吾子の姿にうれしく思ふ

第五班

筑波大学修士課程地域課程東アジア二　寺澤知之

かじを取る役目の重たさを痛感し去年の我らが班長を偲ぶ
合宿に遅れる旨を伝へし君を今か今かと待ちこがれたり
日にあたり真っ赤になりし我が腕に時計のあとのみ白く残れり
日は昇り歩き出したるこの道をただに信じてひたに歩まむ

鳥取大学医五　江頭一成

降りるときに財布の紛失に気付きしバスにて
うろたへし我気遣ひ声かけし運転手の優しさ
我が身に沁むる
先人の言葉に触れて安らかに眠り給へとただただ祈らむ

九州工業大学情報工学制御システム四　安土茂享

ほとばしる額の汗をぬぐひつつ沖を目指してカッターをこぐ
沖へ出て船止め休む束の間に初めて気付く夏の海風
カッターを力一杯こぎ続け気付けば赤き我が両腕
教官の厳しき指導に守られて着きしと思へば感謝を覚ゆ
日の本の未来を思ひ戦ふは地に足つきし明治の姿

早稲田大学法二　穴井浩明

「かい置け」と言はれて休めば汗に満つ体に吹きくる海風涼し

明治大学理工建築一　小柳雄平

弧を描き光るしぶきをあげながら水切るかいの姿逞し
我々とかわらぬ歳の軍人の御国を思ふ心に驚く
日本の男子のつとめを果たさんと記せし遺書に心打たるる

電気通信大学電気通信学知能機械一　中島誉主也

雲霧が晴れて感ずる悦びと宿命思ひて武者震ひもす
一喝に身は引きしまり張り詰めて暑さもしばしふき飛ぶ思ひす
清き字に込めたる魂はほとばしり出今も死せずに胸揺さぶらる
海原へ皆の心を合はすれば我らが舟は前へ進みき
島々を眺めるゆとりもなくなりて笛に合はせてオール漕ぎたり
国思ひ我が身を捨てて戦ひし兵らが命より尊きものなし

熊本大学理環境理一　竹下文雄

波を打つオール漕ぎし手焼けるともかをる潮風背中を抜けて
「行ひは欺かざる」との御言葉は厳しくあれど学びゆきたし

㈱アルバック　北浜道

戦局の挽回願ひ回天の開発目ざせしおもはすがしき

是松君の短歌創作導入講義を聞きて

カッター漕ぎを心待ちにせるわれわれの気持を汲みつつ話し出さる
小学校の授業の一つでカッターを漕ぎし体験を話し給ひぬ

オール漕ぐ身ぶりを交へつ手に応へさはやかなりきと語り給ひぬ
自らの感ぜしままを話さるる話はいつしか短歌の上に
実感を確かめる如時折にうなづくしぐさは昔のままに
二十年前会ひ得し時ゆこの日まで努め給ひし跡の偲ばゆ

大牟田市立勝立中学校教諭　西原正博

教官の気迫の込もれる号令に皆の動作も機敏になりぬ
オール持つ手に力入れどもわがオール思ふがままにならず悔しき
「九番」と指導者の注意受けれども何度も後に倒れし我は

○

散華せし広瀬中佐の血痕をとどめし外套見るは悲しも
弾丸のとび来る中を三度まで中佐はさがしぬ部下を思ひて

（二回目の作品）

朝ごとに集ひて歌ふ君が代の声高まりてゆくはうれしも

第六班

北海道大学農業経済四　石田晃一

語ってもむなしく終る国家論考へ抜きたいわが身のことを
我が心伝はらないと心得ば歌作りてもむなしさ残る

日本不動産専門学校　百澤大伍

苦労して蟻の歩みに遅れてもその瞬間の汗に優るものなし
敵艦に魂ぶつけし方々の最後の言葉は家族への感謝

明治大学文二　吉永博彰

わだつみの波打つ様を眺めれば故郷の利根を思ひ返さむ
青空にくっきり浮かぶ砲身の静かさゆゑに平和なるかな
教官の厳しき声にもはっきりと我らを思ふやさしさかんず
かけ声を皆で合はせて漕ぐうちに自づと手にも力入りぬ

佐賀大学理工四　片岡正憲

「ぬけるぞ」と叫びし友の声聞きて「せえの」の声に力入れたり
握力もおとろへるほど懸命に進めと願ひ込めてこぎたる
友がらと共に流せし汗なれば暑くはあれどいと心地よし
全身を汗だくにして友がらとこぎたるカッターさんばしに着く

中西先生の講義を聞きて

公は己が身超えし目に見えぬものをかしこむ生き方なりしか
「きをつけ」の心をこめし言霊に松の木すらも真直にのびたり

関西学院大学法四　村田龍

討論で人に伝へる難しさ思ふといふでいと異なりき
英霊の御思ひ胸に刻みこみ吾も尽くさなむこの国のため

亜細亜大学国際関係三　大橋広和

初めての一人旅を思い出して

ひさかたに安芸の宮島眺むれば幼き頃の旅路を想ふ

広報係の方の話を聞きながら

伝統を守り続けし江田島の兵舎の前で心躍りけり
今もなお日日訓練に励みたる明日の士官は日の本守らむ

班別討論にて

班員と心通はずもどかしく時計の針のみ進み
ゆきたり

九州工業大学工二　小　川　剛　史

東郷平八郎が連合艦隊解散の時に読んだ
訓示を読んで

江田島で学びしことを身につけどおごることなく心の緒を締む
照りつける夏の日射しに見上ぐれば松原遠く空澄みわたる
松原をうちいでてみれば江田島の沖に広がる青き海原

福岡県立稲築志耕館高等学校教諭　小　野　吉　宣

海の上とく進みゆく笛なれば「そーれ」のかけ声一つになりて
かの昔海軍軍人鍛へたるカッターこぎに我らつらなる
航跡は白く流れて海原をつき進むかな潮風涼し

名越先生のご講義をききて

沖縄の深く冷たき海底に見捨てられたり戦士の生命
天地を引き裂く如き轟音は46サンチの大和の主砲ゆ
くり返し発射されたる轟音は英霊方の雄叫びなるか
海底ゆ怒りの声をあげますか道義地に墜つ今の世嘆き
鎮魂のラッパ鳴りたり両肩はふるへやまずも涙は滂沱

（二回目の作品）

是松兄の短歌導入講義の折に

力みなく身ぶり手ぶりを交へつつ短歌をつくる心得語りぬ
素直なる元のこころを探しあて言葉飾らず歌に詠まめや

藤新兄の体験発表の折に

父のあと会社継ぎたる学兄は戦負れし家康偲ぶと
逆境にひるまず憶さず堂々と感謝で受け止め君進みます

第七班

福岡工業大学一年　近　藤　将　勝

「気をつけ」と響きわたりし号令に我の姿勢も正さるるかな
何よりも皆の安全守るため大声はり上げ厳しく言はれり
お隣りに座られオールをこがれゆく少女の腕はとてもか細き
わづかでもよそ見をしたり気を抜けばオールをこぐ手が弱くなりゆく
ひたいからしたたり落ちる汗こらへ力の限りオールをこぎゆく

海軍兵学校に入りて

海軍兵学校に一度入るとあちこちにますぐに伸びる松のありけり
教育参考館にて外弘志中尉（ソロモン海戦にて戦死）のご遺書を詠みて
君のため命惜しまむ若桜散りて護国の花となりぬる

大西中将の遺書を拝見して

「日本人たるの矜持を失うな」とぞいまはのきはに大西中将は遺せし
中将の言の葉胸にとどめおき日々の行ひ正しゆかなむ

東京大学文三　石　村　善之亮

全員の息がピタリと合った時重きオールも軽くなりぬる

回天乗組員の手紙に触れて

わがことのただの一字もなかりけり父母はらからを案じけるのみ
わが身より父母はらからを思ひやる大和魂ここにありけり

皇學館大学国文二　下　村　俊　昭

江田島に友らと集ひ語りしが消灯過ぐるも話し尽きまじ
夏の日の陽光受けて漲りし友がカッターを漕ぎし横顔
国のためささげし命の尊さを今し新たにさとらしめらる

宮崎医科大学五　宮　元　周　作

命かけ国民守る隊員を鍛へ育む温かき鉄拳
取り敢へず乗り込む我らに前進め号令かかれど後ろへと進む
風景見る余裕もなくてひたすらにひとつふたつと掛け声かけて
思はずも身を正しけり指導員のかけ声厳しく響きわたれり
指導員の号令厳しく久かたに身をも心もひきしまりたり
ゐならびて指導員の話を聞きをればふきぬける風のなんとさはやか

慶應義塾大学総合政策二　川　上　裕　央

二十歳でも未だ子供と思ひけど櫂の軽きに驚かれぬる
若き日に林間学校で漕いだ櫂ものの軽きに童心戻る
沖に出てふりさけ見れは青々と島の緑に心奪はる
今日ここに天土の下に誓ひます我が人生公に尽すと
故郷へ思ひを果せた江田島に我ら祖先は御国守りし

参考館にて

今日の日をゆめ忘るまじ永遠に御国守りし人々のことを
死を前になほも家族を思ひやる若きいのちは輝きて見ゆ
我が年と違はで征きし若人の豊けき心根仰ぎゆきたし

早稲田大学政経四　池　田　光　政

特攻の隊士の遺書を読まんとし見入るも迫る時は許さじ
泳ぐこと能はざりける赤帽も島まで泳ぐことを叶へり
防人が心鍛へし学舎で徳と勇気と悲しみを思ふ

カッター研修にて

櫓を漕ぎつ力の限りの我が声は友らの舟まで届きゆきしか
教官の気を引き締むる号令に体育の時間ぞしのばるるかな

日本青年協議会　別　府　正　智

カッター研修にて中間の折り返し地点につきて引き戻す折

船出せし桟橋の方ふり返れば先行く二艇のカッターありけり
先行きし二艇のカッター追ひ抜けとはぶ教官の命令下りぬ
懸命に声をはり上げ漕ぎゆけば周りを見渡す暇もなきなり
わが艇はどこまで来たかはわからねどブレードのみ見て懸命に漕ぐ（※ブレード＝オールの先）
ブレードの向かふに艇のあらはれて「並んだぞ」とのはぶ教官の声
今ここぞ力合はせて抜かんとて「追ひ抜くぞ」との号令かけし
一段と皆のかけ声高なりて心一つに合はさる心地す
徐々に徐々に相手の艇は退きてつひに抜き勝つわが六号艇は
ふり向けば間もなく着くと思はれし桟橋はるか遠くに見ゆる
漕ぐ腕や体に力の入らずに次第に声も小さくなりぬ
疲れきて遅くなりしか抜き去りし相手の艇は

横を過ぎゆく
負けるまでオールを握りし手に腕に力絞りて
ひたすらに漕ぐ
追いついて抜いて抜かれて抜きかへし二艇を
抜きてたどり着きたり

○

今の世を深く憂ふるかの如く戦艦大和の号砲
轟く
まぶた閉じ号砲聞けば国護りし英霊の激しき
声にも思はる
英霊らは今の日の本見給ひて如何に思はれし
かと涙こみ上ぐ

江田島兵学校にて

なまぬるき日々と思はる江田島で鍛へし人々
のなりはひ聞けば

神奈川県立厚木南高等学校教諭　山内　健生

カッターの「乗員番号十七番」として船
先に坐して
目の前でオールを握る学生の頬に額に汗の光
りぬ
どことなく心許なく見ゆれども皆に合はさん
とオールを握る
ぎこちなくオールを操る学生の動きに合はせ
て我ら声掛く
「ソーレ！ソーレ！」と漕ぐ人も我らもとも
ども声を揃へぬ
指導員の「もっと大きく」との指示ありて我
らはさらに力を入るる
掛声の揃ふて大きくなり行かば艇の動きも滑
らかとなる

（二回目の作品）

担当の講義を前にステージ下の講師席に
て
師の君の形身の背広を身にまとひ我いま立た
ん合宿壇上に（※師の君＝小田村寅二郎先生）
クリーニングのラベルの付きし師の君の背広
をまとひ講義にのぞむ
どことなく師のまなざしを追ひかくるわが身
に気づきぬ講義を前に
平生の己が姿がともかくもあらはるるもの覚
悟を定む
なるやうにしかならぬとも覚悟して講師紹介
に耳傾けぬ
わが国の連綿性の深きこと語るが任務と演台
へと進む

第八班

高校卒業　折田　安正

カッターで汗水流し楽しんだ頭の上は青き夏
空
国のため命失ふ宿命のただ偲ばれて涙流るる

慶應義塾大学商四　引地　海

幾多もの異なる観点学びつつ全ての意味は我
にありけり
精神と歴史は言はば靴なりて我進まねば景色
変はらん

慰霊祭にて

先人の想ひ伝ふるかのごとくひとつぶの雨背
の上に落つ

明治大学理工建築三　月野木　匡彦

郷思ふ若き戦士の写し絵に見入りて思ふ己の
小ささ
炎天下短艇漕ぎて汗にしみ水のしぶきで笑み
を浮かべる

教育参考資料館にて

うつしゑの若き戦士に見入りたれば己が小さ
さ思ほゆるかな

皇学館大学国史四　星野　洋太

神の島目指す気持ちで漕ぎ出す皆の心も一に
なりける

皇国に生まれ出でたる我が因果己の宿命に向きあふ決意を
深々と頭を垂れてただ捧ぐ感謝の誠届けよ届け
誇りある神国の威信轟かす先人の名は千代に残らん
江田島に集ひし友の話聞き国思ふ気持ちさらに強まりぬ

明星大学教育一　高橋　希久朗

短艇に皆と乗りこみ汗流し肌身に染みた祖先の苦労
瀬戸の海神がつくりし島々の重なる姿に言葉うしなふ

英霊の御遺書を読みて

桜咲く靖国神社で待ちをると母に傳へる想ひを偲ぶ
外国に言葉侵され江田島の館内放送聞いて飽きれる

九州共立大学工一　兼田　裕光

カッターで思ひ出とともに持ち帰り波揺られつつ昼御飯食す
カッターと工作ばかりと思ひつつ見れば驚く立派なカッター
公と示す言葉は簡単だが定義示すと難しい言葉
うれしいよ短歌の批評で己知り表現すること今の目標

京都大学文四　服部　源憲

各地より集ひ来たりしみ友らと語らふことの楽しかりけり

村垣淡路守範正の日記を読みて

幕臣といへども神州日本の誇り背負ひていで発たるかな
自国への誇り持ちつつ真心を忘るることなき我が先人は
外国の人らを感嘆せしめたる先人達の偉業を思ふ

久留米高等学校教諭　小林　国平

声合はせ友らとかいを漕ぎければ自づと心の一になるがうれし

中西先生の御講義後の班別研修（八班）

目に見えざる自分を越ゆる公とはいかなるものか語り合ひけり

札幌西陵高等学校教諭　本田　格

瀬戸内に浮かぶ小島の山道の傍に佇む小さき亀見ゆ
日の本の国の宝のひとびとの真心学ぶひとときき過ぎぬ
いにしへの人の気高く誇らかな心学ばん語り継ぐため
われもまたおろかなる身を忘れゐて若き人らと共に学びぬ

第十一班

慶應義塾大学文四　山口　蝶子

夕立ちの雲間から指す日の光いつしか心澄みわたりける
国のため散りにし人の御心を海は抱きくるるらむ永久に変はらず

東北女子短期大学生活二　安藤　恵

青色の気分を変へる赤色の友の笑顔と一つの言葉に
新しき友らと青き空のもと語らふ喜び何にたとへん

東北女子大学家政児童二　今　美穂子

班の中自らの思ひ述べるのは難しきことでも楽しくおもふ
海の上声を合はせてソーレといふ隣りの艇を追ひ越したいな
江田島で多くの出会ひありました残した思ひ出忘れられない
日本の言葉や歴史文化・人学ばされることまだまだ多し

「教育参考館」を拝見して

御戦に命ささげし海軍兵の最後の思ひ遺書に
知らさる

宮城学院女子大学芸日本文学二　三瓶華子

二十歳の誕生日に父がやっと覚えたメールが届きて
お祝に父がくれたる「おめでたう」の五文字
のメール涙で滲む

○

逝くよりも逝かれるはうが辛いこと知ってる
あなたの強いまなざし
「おかあさん」その一言に込められた生きた
証と死ぬ怖さ

福岡女子大学文英文一　馬場智茶

群青の大海原に感動しつつオールこいだら
ひっくりかへる
凛として遺書残し征く戦士らの父母の御思ひ
いかにありけむ

首都師范大学国際交流対外漢語　影近育美

異国にて屈辱を受けし折に
こんなにも怒りを込めし我が言葉伝へられず
に残るむなしさ

熊本市教育委員会　濱口知久

江田島で早くみんなに会ひたしとアクセル踏
む足力が入る
瀬戸内の潮風いっぱい浴びようとエアコン
切って風招き入る
九時間の遠き道のり車駈り友まつ江田島に今
つかんとする
み友らとの遅れを早く埋めようと身をのりだ
して講義に聞き入る
少年の遺したことばを読みければただ自から
心をうたれる

（二回目の作品）

若人の声におされて改めて我が力のなさを感
ずる
国のため命ささげし先人の心伝はり目熱くな
る

国民文化研究会　長内俊平

三十二年ぶりに沖守大兄にお会ひして
会ふにすぐ言葉出でこずつくづくと友のかん
ばせただなつかしみみる
長内君！！と声をかけつゝ寄りて来る友の手
を握る力のかぎり
みいくさに召さるゝかたみと二人して伊勢に
詣でし友といま合ふ
合宿に来よとさそひしわが言をうべなひ友は
来り給へり
難聴の耳もつ友ゆゑおきふしを共にと思ひて
来りしものを
班長といふ大任うけておきふしを共にしえざ
るをゆるし給へや
しかれども会ふたびごとに時惜しみ語らふよ
ろこび何にたとへむ
ひざになづむ奥様置きて合宿に馳せ参じくれ
ぬいくたりの友伴ひて
若き日の心のちぎり幾十年年はふれども変は
らざりけり

山根清兄の教育参考館の説明をききて

じゅんじゅんと君が説きゆくことのはに先人
のみ魂のりうつるごとし
バルチック艦隊迎へうつべき先人のたかなる
思ひきこゆるごとし
「とどろく砲音」と唱ふしらべをききゐつつ
胸あふれきて涙とどまらず
防衛庁に勤むる君の国思ふまごころことばに
あふれてきこゆ

（二回目の作品）

かにかくに合宿終りぬ若きらが力合せて営み
し集ひも
きびしかる六日の日程に老いの身はもつべき
ものかとあやふみたりしを
女子班長といふ大任いまは漸くに終へてこの
娘らを孫かとも思ふ

一人一人己が地に立ち藤新君を見習ひてつくしゆくとき道ひらかれむ
老の身をかこつべしやは故郷に帰り爲すべきことを爲してゆくべし
いまはとて袖を別ちて友らと分るる思へばせまりくるものあり

第十二班

東北女子大学家政二　對馬周子
半日をかけて向かった江田島の知らぬ世界に期待ふくらむ
江田島の肌さす光あびながらかいそろへんとかけ声合はせり
東北女子短期大学生活二　中嶋紘子
月あかりただひっそりとまつりあとかけだす足にさみしさ残し
戦ひに征でゆく人の思ひをば胸に受けとめ進まん新しい道
福岡女子大学国文二　黒岩礼子
新しき友との出会ひ楽しみにここ江田島にやってきた
文部省唱歌　広瀬中佐を聞きて
歌にこもる意味は知らずもおのづから熱き思ひの胸にあふるる
元佐賀県立佐賀商業高校教諭　末次祐司
特攻隊員の御名を刻みし碑の前にて
若くして特攻に捧げし御霊をば偲びまつれば胸内迫りぬ
ひたすらに手を合はせ祈りけり永遠に安らけき御霊の鎮めを
（二回目の作品）
班員と共に
ひとときのふれあひなれど語り合ひ通ふ心ぞ嬉しかりけり
目に見えぬみ霊にひかれ相集ふ奇しき縁尊かりけり
北九州市立医療センター　森田仁士
かなたよりソーレソーレの声聞こえ松の木の間ゆカッター見えぬ
友らこぐオールの動きぎこちなくも楽しきさまの伝はりて来ぬ
足のけがに車イスにて参加せし乙女はファイト顔にあふれて
（二回目の作品）
閉会式の後
写し絵をともに操らむと呼び来たる乙女らの顔に疲れ吹き飛びぬ
班別討論の折
大学のゼミに学びし事どもと異りてありと思ひ沈むらむ
黙しをれどあまたの思ひめぐらむ仰ぎてはまたうつむくきびしき顔に
もの学ぶ力優れし君なればきっと見つけむ己が答へを
京都産業大学　大河内ルデヤ
すみわたる空にぞひびく君が代の国に届けよ若人の声
国のためはなと散りにし先達の赤き心の胸に迫りく
語らずも遺影の前に立ちし時赤き心の胸に迫りく
年を経て生きる時代は違へども継ぎてゆかなむその真心を
恵泉女学園大学英米文化四　原川泉
輝きて天より落つる虹衣文字なき便り無限の言葉
爽やかにシャンプー薫る風呂あがり優しき風のほほをなでゆく
中村学園大学流通科学三　倉富美幸
ヒロシマの光を伝ふ世界へと今も変はらぬ青空の彼方へ
新しき教へを受けて今ここに我は目覚める自

国への愛

宮城学院女子大学生活文化二　桑原史織

江田島の海に我が身を抱かれて心に思ふは故郷の稲穂かな

夕暮れにきき入る蝉の鳴き声に思ひやるかな蝉の心を

虫の音に心動くは日本人のあかしなりしと思へば嬉し

江田島の海に我が身を抱かれてそぞろにしのぶ故郷の稲穂

福岡大学経卒　柴戸喜子

班別研修にて

しみじみと実感込めゆき語らるる師の言の葉が胸に響けり

〝さまざまのものの中にも命あり〟と師の言の葉に感動する友

研修が終りて後も感動を友らと語る時ぞ楽しき

教育参考館にて

日の本をただ守らむと戦ひし先人らの心に涙あふるる

第十三班

東北女子大学家政二　皆川裕美

広島についてびっくりしたことはせみの多さと日ざしの強さ

ボート漕ぎ瀬戸内海の風うけて故郷の海をなつかしく思ふ

青森を出たときながめた津軽富士今はとってもなつかしく思ふ

江田島を離れてながめた瀬戸内海またここへ来たいと思ひました

江田島で古き勇士の遺書を見てただ言葉なく涙流れる

熊本学園大学社会福祉二　折田成予

首もとに吹きたる風は心地よくオールの重さしばし忘れる

爽やかな海風にふと顔上げて遠く見やれば江田島浮かぶ

ブレードを見つめてかいをひたすらに漕げば我らの心はひとつ

ふり向けば友の腕に光る汗オール漕ぐ手に力のこもる

海風に吹かれて松は何思ふ日々鍛練の勇姿を見つつ

「きみのため」文に託したその想ひ我の胸にもせまりくるなり

人間環境大学人間環境二　片山里子

汗をかきふえの音色に合はせてはよろめきながらも海をきりゆく

今思ふ己のことと國のこと昔を感じ将来を見るため

波のうへ周りを見つつ目をとぢて感じる夏と自然の豊かさ

足運び目にした遺書から伝はりぬ強き思ひと悲しき心

あまたなる辞世のうたと読みゆけば頭がさがりて心にしみる

東北女子大学家政二　勝木愛子

江田島でカッター取り組むともがきと汗もあふれる夏も本番

せみよせみよ夜もすがら泣き疲れぬかここは広島憧れの街

あと五分あと十分と寝たる罪慌わてふためき集ひへ迎ふ

ただ「ナシ」と遺書を残した青年の心を思へば涙こぼるる

上智大学文学二　青砥敬子

カッター漕ぎ心地よいだるさ感じる身体で磯の香りと風を吸ひ込む

日焼けした赤い素肌に青い空島の緑に瀬戸内

の海
江田島の合宿教室に参加して友ができればうれしく思ふ
先人の心は今も我が内にあると思はば心和みぬ
大和魂習ひ聞いて自分の先祖を誇りに思ふ
自らの命をも顧みぬ愛国心に言葉が出ずに涙が出たり

日本体育大学体育四　近藤雅美

小柳先生の講義を聞きて
師が語る明治に生まれし先人の謙虚な心我も学ばん
胸踊る謙虚に生かれし先人があまたの国民日の本の国

カッターで指導を受けし折に
厳しさの中に溢るるやさしさに雄々しき父の姿浮かびく
懸命にオールを握り漕ぐ友のほとばしる汗美しくみゆ

遺書を拝して
「死して後國の栄えを」願はれし戦士の心胸に沁みきぬ

早稲田大学教育一　小林由香利

先人の心を忘れ世の中の求むは我の幸あればのみと
国の幸あればこそのみ私の幸の忘れてならぬ国の安泰
公に尽くす祖国の心忘れまい心に誓ふ胸に手をあて
今の世の憂ふべきさま我が国の未来のために如何にかしたし

教育参考館で若き戦士の遺書を見し折に
戦士らの親思ふ心強きかなわれ先人に学ぶものあり

小田原市立矢作小学校　岩越豊雄

大和の号砲録音で聞きて
大き身を打ちふるはせて叫ぶごと大砲の音のひびきかなしも

（二回目の作品）
班員の一人がさいごに勇ふるひ壇上にたちて思ひのべたり
おのが思ひことばつまらせとつとつと語る姿に心うたれる

第十五班

熊本県立教育センター　白濱裕

旧海軍兵学校を訪ふ
この場所ゆ数多の武士巣立ちゆき御国護りし勲尊し
生徒らが朝な夕なに登りしとふ古鷹山を校舎越しに見つ
壁面に刻み込まれし四千の御霊に深く頭を垂れぬ

カッター訓練
吹き出づる額の汗もそのままにかけ声合はせオール操る
一斉に「ソーレ」と唱和し漕ぎゆけば心一つになりゆく心地す

静岡聖光学院高校二　大河内恩人

カッターの上達者より大将と高きを目指す心湧き立つ
御講義を頭で聞くとメモとらずしかも頭で考へる事せず
僕のやうな者がゐないから参加者は一つにまとまって講義に聞き入る

江田島小用港へ向かふ高速船の中で
窓外の瀬戸内海の島々は東京へ向かふ船を思はす

スライドを見る
先生の右手は高く振られけり明かりが消えた構内の中でも

カッター体験
常ならばなほ厳しとふ教官の言葉は胸に強く響けり

厳しさを胸に残して目指したいカッターが終はって汗をふきつつ

福岡県立福岡高校二　馬　場　章　央

見上ぐれば櫂より飛びし水しぶき空にちりばむ星のごときに

神風といふ名を背負ひし若人の決意を込めし瞳すがしき

香椎工業高校二　後　藤　寛　大

敵艦が恐れをなした特攻は世に比類なき軍人魂

み友らと心ひとつにかいをこぎ声をからしてスパートかけたり

広島県立大門高校二　藤　井　雅　啓

波にわれうしろを向きてかいをこぎ目に映りしは広き海原

特攻に征きし我子を思ひつつ流せし涙遺書に滲むか

香川誠陵高校二　諏　訪　大　地

六士先生を偲びて

日の本の臣子の道を尽くさむと言ひて倒れし人ぞ哀しき

愛する祖國のためいちまつの寂しさを振りきられた方々に捧ぐ

ひさかたの光まばゆき海原に御国のために水漬く我が身も

江田島ゆオールこぐ身はつらかれど隣の人に我助けらる

もののふの御心高きこと知りて痛感しつるは我が身の愚かさ

我が身すら刃と変へて征く人の父母を気遣ふ心優しさ

久留米大附設中学・高校教諭　名　和　長　泰

おだやかな青海原にかもめ降りしばし漂ひ飛び去りにけり

赤煉瓦白御影石今もなほ古鷹山のみどりにはゆる

第二十一班

（株）オキ　沖　守

長内大兄と会ひし喜こび

たびたびも君給はりしみ便りゆ吾もこがれて此の島へ来ぬ

長の月日会ひまつらねどいさゝかも変り給はぬ君の面影

両手とり言葉交せばそのまゝに昔の面影今のうつゝに

江田島参考館を見学して

若くして国の守りに散りましし物のふあまたこゝにまつれり

ありし日の思ひとどめし遺書遺影よみゆくほどに胸せまりくる

母の為命さゝげしもののふの思ひはいかでか生かさずしてなるか

元日立製作所勤務　日　高　廣　人

江田島に立つ夏雲のその下は久々に見る山の青さよ

後世に熱き想ひを伝へむとはるばる来たり江田島合宿

我が国の歴史認識正すとふ若きに交りて学ぶはうれし

國のためいのち捧げし若者が遺書に記せる愛国の情

國のため捧げんいのち育くみし父母への感謝を遺書に残せり

禽獣に異なる所以を知るべしと加冠に贈る「士規七則」を

ワイ・エス・ケー㈱岡山工場　内　田　厳　彦

二十四年振りに合宿に参加し、諸友・先輩と再会を果たして

なつかしき君が御姿見とどけて「お！」と側より肩を叩きぬ

吾が友と会ふはいつかと夢見しがここ江田島
に会ひ得し嬉しさ
様々の思ひは尽きず黙し居り友と並びて開式
を待つ
久々に会ひ見ゆ師や御友達面は少しも変はり
いまさず
合宿ゆ離りてはやも二十四年思へば永く滞
りをりし
「開催地近けば君に会ひたしと」先輩の誘ひ
に振るひ立ち来ぬ

班別討論

靖国のこと等閑に打ち過げば日の本亡ぶと老
師宣ふ
まず己成し得べきこと見定めて戦ひ始めむ
道遠くとも
中韓の対日姿勢非礼なり応ふ大臣の術も信な
し

佐久間艇長の遺書を読みて

生き死にの境にありてなほ部下の家族を頼む
艇長畏し
部下全て持ち場にありて己が身の務め果たす
と遺文伝へり

教育参考館にて

父母に最後の思ひつづられし若桜見る拝がむ
思ひに
日の本の丈夫男の子の行く道と教ふがごとし
これら遺文は
「急がむ」とのガイドの声にも耳貸さず遺文
に涙す乙女子のあり

鹿児島県信用保証協会　野間口　俊　行

目を凝らし沖つを見ればキラキラと陽に照ら
されし櫂ぞ目に入る
教官の声に合はせて元気良く掛声あげてカッ
ター帰りくる
岩はだに根を巡らせて松の枝は海面に突き出
て雄々しかりけり

古鷹山

名にしおふ古鷹山はそそり立つ岩肌みせて我
にせまりぬ
山見れば「江田島健児」歌ひをる友の姿ぞ思
ひ出さるる

自由業　岡　田　重　道

もののふの学びの庭に御国護る魂みるおもひ
に我れ立ちつくす

㈱オキ　香　田　克　己

軍神が学びし庭に潮香る歴史きざみし江田島
の海
国憶ひ命ささげし英霊に今の世の様如何に語
らん

中島法律事務所　中　島　繁　樹

カッター体験を見学す

江田島の浜辺ゆ遠く沖あひにカッターオール
の夏陽に光る
カッターの沖より岸に向かひ来てそうれなる
声ひびき聞こえぬ

教育参考館

国守る学びの庭に過ぎし日に若きら集へる写
し絵のあり
写し絵にふんどし締めて若きらの姿まぶしも
今生きをるごとく

広島市立美鈴が丘小学校教諭　稲　垣　幸　一

江田島に不安持ちつつ参加してぽちぽち楽し
二日目の夜
国難に立ち向かひたる先人の声のせまりく今
の我等に

経営者漁火会　正　木　篤

感動を書きあらはすと勇む足あれもこれもと
走馬燈かな
白い雲波走る海ますらをの光輝く純情を見る
江田島の古き昔に思ひはせたのもしき者今日
あつまる
泣くまいとおもふこころのうらはらにりりし
き顔ぞ誇りに思ふ

そのときの命つたへるふみをよみ心にひびく
たくすともしび
ますらをのあかきこころねはぐくみし母の御姿しのばるるかな

第二十二班

フルーツショップ・ソノヤマ　園山佳紀

島々の想ふ心は国の為美しいかな虹のあめ
いつの日も海の匂ひをかんじつつまたあひたしとわれは想ひして

横浜舞岡病院　村島明

日射し降り巨大なオール押して引き我が両腕の非力を思ふ
もののふの残したまへる言の葉は人の勇気の極みとぞ思ふ

㈳福岡県中経協　萩原眞之介

旅立ちに期待と不安をいだきつついざ江田島へ決意新たに
美しき緑茂げたる江田島で心打たれてしばしながめる
今までの自分の心をかえりみて失ったものをここで見つける
すばらしき古人のおしへここで知り深く心にきざみかりけり
国のため戦ひ散った魂は今の日本をどう思ひけり
暑い中友と思ひを語るればふとそそぎたる風の冷たさ
先人が受け継ぎたる士の道を学びて心正されていく

ドコモサービス㈱　阿部良太

教育参考館を見学して
敷島の軍神達のみ姿が我の心を取らへて離さず
指揮官の厳しき教へを仰ぎつつ舟を漕ぐことの楽しさを知る
江田島の緑の山を眺むれば美しき虹に思はず見取れぬ
いざ短歌作ってみようと筆取れば難しすぎて筆が進まず
英霊の戦ふさまに心打ちみ霊の思ひ我受け継がむ

福岡コミュニティ放送　谷口学

インタビューしなれたはずのタイミング翻弄されて時は過ぎゆく
友の顔夜ごと日増しにほぐれつつ心の奥を語りたまへり
明日からの我の気持ちの行く先は泌みた教へに進む道あり

民主党島根県第一区総支部　濱口和久

切串の港に降りていざ向ふ久かたぶりの夏合宿

中西先生のお話しを聞いて

この国の行くすゑ案じ語られるいつまで続く戦後の呪縛

教育参考館にて

国のため命捧げし先人の想ひせまりて涙にじみぬ

新明電材㈱　飯島隆史

つたなくも海に出てゆくカッターも帰へりはともに声もそろひて
青き海はるかに帰るカッターのソーレッの声は空に響交ふ
先生と肩を並べて江田島の波に足ひたし白き雲仰ぐ

二十三年振りに合宿にて占部賢志先輩に会ふ

二十年前ともに学びし先輩と今宵再び語り合ひたり
久々の先輩の言葉に若き日の合宿の夜は甦へり來ぬ

久々に先輩と語らふ喜びに思はず吾は禁煙やぶりぬ

㈱九州電力　木村和久

カッターに自信ありげに取組むも息があがって年を感じる

真剣な友の眼差し伝はりて疲れし体力わきくる

福岡県立太宰府高校教諭　占部賢志

市丸利之助中将に捧ぐ

矢弾尽き玉砕迫る地下壕に思ひ定めて筆とりし君

敵国の長に向ひてつづりゆく戦ひまじえしその消息を

海遠く祖国におはす同胞をたゞ護らむと散りし君はも

第二十三班

安岡一成

ゆるやかに友がこぎたるカッターは空と海とを分けて進むらむ

かくまでも戦ひ抜かれし先人に我らの世代も負けてはならじ

九州電力㈱福岡支店営業部

樋口公一

不透明信ずる道が暗闇でなかなか見えず今の日本は

古き良き美しき時代の我が国の心潤ふ人間愛は

心開き新しき友と語り合ひ豊かな心取り戻したし

㈱みずほコーポレート銀行　小柳志乃夫

カッター体験研修

〝ぐづぐづするな〟〝笑ふな〟と指導教官の鋭き指示に身のひきしまる

張りつめし空気の中に若さらとカッターに乗り船こぎ出す

夏の日の強くも照れる江田島の湾進みゆくわがカッターは

ソーレソーレと声を合はせて若さらがこぐカッターよ波乗りてゆく

船こぐ喜び若さらに見えて老いませる指導教官のみ顔ゆるびつ

六艇の船それぞれにそれぞれの心一つに漕ぎゆけるかも

我が友がかねて企画せしカッターの研修ここに成れるうれしも

参考館にて

身を捨ててみ国護らせしますらをのかたみのふみをよめばかなしも

靖国の大き桜は我なりとみおやにのこせるみ言葉かなし

無職　佐久間俊輔

これからの日本を背負ってカッターを今は漕げ漕げそのオールをば

海原はさぞ美しく見えにけん空に散りゆく若者の瞳に

日生会胃腸病院　須藤修司

洋上の強い日差しを思ひ出しヒリヒリ痛む顔面冷やす

外に出て食べる夕食いつもより楽しく感じ話もはづむ

力強き同郷兵士のその文字を心に刻み我帰郷せん

三次市役所　高岡尚正

くにとまち根っこはひとつと言ひ聞かせまんまとさぼって合宿に来ぬ

蟬の音に心残れどクーラーを入れむと部屋の窓を閉ぢたり

㈳福岡県中小企業経営者協会　新納誠朗

さはやかな海風浴びて紫外線同時に浴びて日焼止まらず

舟酔ひを避けて乗らずも笑顔にて見送るはずが笑ふは禁止

亡き人の手紙を読みてますらをの大和魂心に染みぬ

鳥栖市役所　西　山　八　郎

カッター訓練

教官の厳しき声におのづから身のひきしまり話しに聞き入る

海に入りオールにぎりてこぎゆけどなかなかそろはずしぶきとびかふ

お互ひに声かけ合ひて友どちのオールに合はせてわれもこぎゆく

水を切るオールの先のうちそろひ水面に入るときぞうれしき

㈱アイ・エイチ・アイ・エアロスペース　内　海　勝　彦

久々にまみえし友らなつかしく声かけ合へば心和みぬ

第二十四班

㈱ナガオカ薬局　長　岡　　聡

はるばると江田島に来て何かしらおもしろいことあるかと探す

戦争に明治の思想松陰と多くを聞いてよく考へむ

だらだらと時間が延びて急ぎ足食事ぐらいはゆっくりしたい

いろいろと人の意見を耳にして納得もありわからぬもあり

自由業　川　口　大　介

使ひ慣れしシャンプーなくてせっけんで髪を洗うはせつなかりけり

中尾スタジオ　中　尾　国　博

声高く明治のこころ伝へんと語る師の声我が胸ゆらす

日本植生㈱　小　森　賢　也

朝起きて眠い目こすり現場行き毎日喧嘩いつまで続くか

美しく夜空を飾る大輪の花火は今も心に残る

神奈川県教育庁　大日方　　学

教育参考館にて「ハワイ真珠湾特別攻撃隊九軍神」の遺影遺書を見て

軍神を祀られし人は幼なさのまだ残りをる青年なりき

遺されし文の最後に勇ましき二首の辞世の認められけり

美しく筆にて書かれし父母とふ宛名を読めば涙こみあぐ

㈶モラロジー研究所出版部　富　田　裕　之

英霊の魂守るこの国に生かされてゐる我を知るべし

横浜市職員　徳　田　浩　介

語り継がん愛でるべき名もなき民の教科書に漏るる物語こそ

静かなる宿舎の部屋で歌よめば外で賑ふ蝉時雨かな

金融庁　山　下　哲　也

みともらの合宿で会はうと詠みたまふうたぶみよみてうれしかりけり

なりはひは忙しけれど一日でも参加をせんと江田島に来つ

第二十五班

西部ガス㈱　内　野　仲一郎

本よりもたとへ講義の話より疑問に応へる若者の遺書

日の本に生まれた我の宿命をはじめて知りし江田島の夏

今の世の日本国を見せれるか島に残りし遺書の主に

日の本のほこり忘れた我々に黒ずむ遺書が静

かに語る
知らずして過ごして来たれどうれしくも日本の心学ぶをえたり
シバタ工業株式会社　諏訪田　義　憲

江田島の潮のかをりを浴びながら日本のこころしばし学ばむ
伊佐ホームズ㈱　大　宅　哲　郎

瀬戸内の青空のもと風うけつつ憩ひてをれば心しづまる
東京食品販売㈱　大　和　泰　之

東中野先生の講義を聞きて
松陰の士規七則を読むたびに武士の志我受けつつがん
若築建設㈱東京支店　池　松　伸　典

江田島にて
都べに移りてなかなか見えざりし空の青さの目にしみにけり
小柳先生の御講義を聞きて
師の君の話をきけば天心の激しき思ひの伝はりて来ぬ
「無自覚といふ河をただよふ姿」こそ今ある日本の姿なりてふ
すぐれたる手段はあれども人々の心はかわけり今の日本は
㈱ダイキョープラザ　杉　慎一郎

命を懸け国を守りし青年の遺品の前で姿勢を正す
前日より受講している師友に会ひて
不安抱き始めて降り立つ江田島で郷里の師友に出会ふ喜び
九州電力株式会社　田　代　哲　也

ソフトボール合宿中の高校生を見て
炎天下励みよる子らながむれば思ひ出さるる日々なつかしく
日本植生　忠　政　儀　洋

なんとなく参加してみてふと気づく自分の無知さと日本の危機

第二十六班

筥崎宮　田　村　邦　明

國の為華と散りたる先輩の遺書観ればれば心打たるる
あおき海野山も空も浮雲もただそれだけで身魂ふるへる
藤村酒造㈱　藤　村　孝　信

久々に同志の誘ひいただきて学ぶはうれし江田島の舎
株式会社山口銀行経営管理部
濱　本　慶二郎

改札口妻と子供の手を振る姿無邪気な笑顔に心昂る
ふりそそぐ陽光あびて我は立つ先人の思ひ募る江田島へ
江田島の歴史を刻む御影石今の日本を何と見るらん
聳え立つ古鷹山は志気高き若人今も見守る
自宅を出る折に
未だ見ぬ友らの集ふ江田島に不安かかへていでたちに来ぬ
班別に分かれて語ればはらからの心は一つに通ひて楽し
伊佐ホームズ㈱　伊　佐　裕

合宿地江田島へ向ふ途上宇品にて
（亡父戦時中原爆投下の翌日宇品より救援に行く）
わが父は原爆投下の翌日に救援の為広島訪ねし
国の為人の為尽せしわが父に会うすべもなし二年の前
九州電力　立　山　和　幸

いつの世も変はらぬものは家族への想ひと両親への感謝

夏の日の白御影石の建物に思ひ出すザルツブルグの街角

国の為家族を残し先に逝く遺書読みをれば胸迫りくる

産経新聞社正論調査室　大　内　保　治

壇上に昼に夕にひびきたる熱誠とばしる夏の江田島

壇上より熱誠こめて語ります講師の叫び胸にひびきぬ

国防の第一線たりし江田島にふさはしきかな講師の叫び

江田島の空青く澄み日の丸はためくみれば昔しのばる

日章工業株式会社営業部　山　下　誠　彦

江田島兵学校にての研修にてすくすくと空に伸びゆく松の木に我の心と子の顔かさね

班別研修を重ねるにあたり

講義終へ友と語ればいたらざる己を知りて心ひらかる

第二十七班

熊本市役所　折　田　豊　生

江田島海上自衛隊教育参考館にて

海に空にみ生命捨てしみおやらのみ名を連ねし壁に真向かふ

みくに思ふ強きまごころあまたありて守られきたりしわがみくにはも

ふるさとのみおやらもあればなほさらに胸のふるへて涙わきくる

みいくさにみくにのゆくすゑになふべきみ生命ここだも失せにけるかな

みおやらのみあと辿りて我もまた数ならぬ身を尽くしまつらむ

カッター訓練を見る

教官の強きかけ声に友ら皆顔こはばらせ説明を受く

やうやうに艇に乗り込みぎこちなき動きにはあれ今し漕ぎ出づ

夏の陽は照り渡れども海風を切りて六艇沖へ出でゆく

ややありて影も細かくなりにけり友らが漕ぎてゆきしカッター

おのもおのも訓練あるらし六艇の動き見守る双眼鏡に

帰り路を来るらし友ら声そろへ上ぐるかけ声岸に聞こえ来

かけ声に合はせて漕げる十二本のオールの動きも息の合ひたり

桟橋に着けどもさらに訓練は続けりオールを並み立てかかふる

海のつとめの厳しさ学び終へて今友らはそぞろ帰り来るなり

産経新聞社　柴　田　眞　佐

英霊の誓ひを刻む江田島で思ひ新たに靖國の守り

我が友の男気賭くる知事選に思ひ貫け信濃路の夏

ギャラリー源　清　田　　進

一足早く安芸路に入りて二首

民草の焔にまきて省みぬあだし仕業を忘れじぞと誓ふ

罪もなき身を炎熱にまかれたるみ魂の安きを直に祈りぬ

江田島にて

連絡はこれにてとれぬと伝ふれば休む前にとせがむわが背よ

わたつみの兵多く育くみしゆかしき島に学ぶぞ愉しき

雲は照り波は輝く江田島に学びて巣立つ健児ら頼もし

光る波空往く雲の変りなき清しき島は益羅雄の島

たらちねの母を気づかふ文遺し帰らぬ海へと

健児は出しと
礎と誓ひて往きし若人の名をひとつひとつひろふては読みぬ
わたつみの海の鎮めの学舎の夏の虚空に日の丸眩し

肥後銀行　赤星貴紀

「お父さん、何でもできるよゆってごらん」
うれし頼もし吾子も三才

長崎中央郵便局郵便課　橋本公明

山根兄の発表を聞きて
白髪の増へし君なれど心こめ広瀬中佐の人柄語りぬ
小柳先生の御講義を聞きて
笑み浮かべ先人の遺せし言の葉を心くだきて説き給ひけり

湯亭こんや　青砥誠一

江田島教育参考館を見学して
国の為生命を捨てしますらをの魂安かれとひたに祈らむ
我が身捨て国守らむと若き身を捧げし姿尊しと思ふ
若きらが命を捨てて国守る御姿尊し涙もよをす
かくのごと国守らむと若きらが命を捨てし御姿尊し
整然と松の並木が植ゑられしグランドは今目の前にあり
江田島教育参考館を見学しての帰りに
江田島の小高き山に植えられしミカン畑の連なりてあり

折尾愛真高等学校　松田隆

江田島の広庭に立てし祭壇に友らつどへてまほろばとせむ
静岡県立沼津商業高校　深澤直幸

生き死にをつなぎとどめしわたつみに抱かれ思ふ在りしまごころ
江田島教育参考館にて
英霊を育てし海を畏みて歴史を生くる己に帰らん
至誠といふ文字は今なほ語りけり数多の悲しみ置き去りにして
至誠という文字は今なほ語りけり勲し思ひ聞けとばかりに

第二十八班

島根ふるさとIT㈱　安部忠宏

江田島に真夏の集ひ吾が心親を思ひて今あるを知る
江田島に集ひ学びて父の意志継ぎてゆかなんと思ひ定めり
旭(あさひ)うけ澄みゆく空に吾が心写すずいうん日の本の夏
講を受け言の葉ひびく吾が魂開国の心受けつぎたし
わだつみのこえなき声が身にしむるよき世日の本誓ふ我が身に
英霊の散りゆく真夏しのびつつよき世築くと誓ふ江田島
二十一年夏　病に亡くなりし父を想ひて
終戦に国の再建誓った父こころたてるも病ひにたふれ
父の願ひ受け継ぐ心江田島で六十路になりて誓ひも新た

㈱正和電工　東上床健二

日の本の歴史を学ぶ若人よ君らと共に国をつくらむ
江田島の歴史に学べ若人よ君らの意気は天にもとどく
年老いてなお学ぶぞと意気さかん我ら五十路ははな垂れ小僧
国想ふ気持ちに変りはなかれどもなぜそこまでと遺書に見入る
江田島に集ひて初めてうたをよむ敷島の心は苦しかりけり

広島教育会議　奥中　正之

我々の根っこ求めて集ひ来る若者達の血潮燃え立つ

広瀬中佐宛マリア・ペテルセンの文を知りて

外つ国の乙女寄せたる文知らずわが縦軸の断絶ぞ知る

江田島教育参考館を拝観して

もののふの命投げ捨て守られしわがふる里を永久に伝へむ

国立青年の家の庭にて

夏草の萌え立つ安芸の江田島に先人への思慕燃えたぎり立つ

神武天皇ご東征を偲び紀州熊野神倉山へ登りて　平成十四年七月二十七日

五百越せる石段登り拝み伏す神倉山の天の磐立

神武天皇ご東征を偲び台風九号去りし宇品港を熊野へ向け船出して　平成十四年七月二十六日

嵐去り波静かなる海原へ神々の子等今漕ぎ出でぬ

朝露に吹き来る風のさはやかに秋の訪れ早や告げるらむ

産経新聞社　佐伯浩明

全国学生青年合宿教室で江田島の海上自衛隊参考館を訪ねて

海の青島の緑に映える学舎幾年経ても胸を打つ遺書

江田島の緑の島に鎮まりぬ参考館で遺書写す君

敷島の大和魂は何処にか絶えにし國の姿悲しも

㈱エイド　山本茂夫

カッター研修にて

夏の日の強き日差しに負けじとぞかけ声高くオールそろへつ

一心にこぎゆくクルーの額には暑き日差しに玉の汗流る

朝の散策にて

朝日差す静けき海辺に朗々と坂東大人の御製聞こゆる

足音にすばやく逃げる側溝の赤きカニガニハサミ振り立て

江田島の海上自衛隊を見学

校内の真直ぐに生へる松の木の雄しき姿たのもしく見ゆ

もののふを育て来たりし兵学校雄々しき松に姿しのばる

参考館にて

年若く命ちささげしますらをを心のまゝの遺書にしのばる

かくまでも手厚く守りし参考館ますらをの命よみがえらせり

国文研　坂東一男

合宿二日目朝の散歩のをり

拍手をうちて御来光遥拝し声高らかに御製を唱す

ミンミーンつくつくほうし蝉しぐれ声心地よし江田島の朝

㈱デノン　小笠原俊晴

世の中の乱れを憂ひ集まれる友の多さに吾は驚く

江田島に集ひ学びて父の意志継ぎてゆかなんと思ひ定めぬ

ツクダ商会　紹田照雄

失なひし国の礎ぞ求めきて多くの友と師に出会へたり

万国の天津御神をなぐさめん神の国なる日本に帰りて

種々の尊き縁に導かれ参加しえたるうれしさこみあぐ

㈱デノン　小笠原俊晴

国難に命捧げし若人の清き心に涙溢るる

今もなほ厳然と立つ学び舎に明治の人の思ひ
尊し
講堂のギリシャ風なる柱見て学びし人の気高
さ思ふ

三十五年振りに恩師にお会ひして　戸田建設株式会社　青山直幸

昔日の面影残し溌剌と明治の精神説き給ひけ
り
若き日に勧め給ひし「東京の三十年」をカバ
ンの中に
テキストの不足を感じ手づからに作り給ひし
プリント思ほゆ
世の中の乱れを憂ひ集ひたる数多の友に吾は
驚く

東中野先生の御講義を聞きて　東中野先生の御講義を聞きて

士の道を説かれし松陰の文朗々と師は読み
たまふ
木像に彫られし若き松陰の姿を見よと熱く語
らる

教育参考館にて広瀬中佐の展示を見る

威厳ある面ざしなれどまなこにはそこはかと
なくやさしさの見ゆ
極寒のシベリアの地を馬橇で横断したまふ気
概すさまじ
旅順港を閉ざさむといふ企てに加はり指揮を
とられし中佐は
砲弾の飛び交ふ中を我を忘れ部下の名呼びて
探したまひぬ
情け深く誠実な心忘れじとロシアゆ文を寄せ
し乙女はも
外国の人も英雄と讃へたる広瀬中佐の士道美
し

第三十一班

旭日のみ旗ほこりてありし日をしのびまゐら
す江田島の海よ　小山泉子

「韓国併合の詔書」拝読の折に　牛島雅子

みことのり読み上げ給ふ七十路の友の御声の
凛とひびけり
大君の深き御心そのままに読み上げ給ふ友の
御声よ
暖かく広きみこころ声にのりからくに人への
思ひ伝はる
回天の血書を前に茶髪の子涙流して動かざり
けり
動かぬ子の後に立ちて我も又胸せまりきて涙
あふるる

主婦　安河内階子

國思ふあつき魂相よりて行末のぞみ力加はる
国思ふあつき魂相よりて語らひつきず時を忘
るる
いかづちの閃光白き慰霊祭見えざる神の幸は
ひてあり

国文研　関口靖枝

底までも光を透し澄みかへる海に似まほしわ
が心根も
参考館に入りてすぐに眼につきぬ松陰先生の
条幅の文字
楷書にて刻むが如く一字一字息も乱れず誌さ
れてあり
かくばかり似給ふものかその筆は同じ血筋の
亡き師の如し

元教員（小・高校）　古波蔵啓子

江田島で若人と共に学びつつ過ぎし五十歳を
悔いたりきけり
五十歳で出会ひし誠の人々と國を語りて心鎮
まる
國のため御盾となりし特攻のみふみを前に涙
あふるる
警蹕の声厳かにこだまして夜のしじまに天降
ります

長谷川　真　美

瀬戸内の島は入り組み天然の護りの港は今も変らず

主婦　桑　木　悦　子

日のもとの防人育てし江田島の青き水面の美しきかな

あこがれのこの地に立ちて思ふこと若き兵士の母への想ひを

寶　邉　正　久

第二日、朝の集ひ

平らなる朝凪見ゆる丘の上にいまひるがへる日本の旗

年月の思ひも深き江田島に若きと集ふ朝のすがしさ

思ふこと思ふがままに言ひてみむと大みうたとなふ声すみてきこゆ

カッター発着桟橋、散策

夏雲の遠きみそらの海の上にカッター去りて涼風の吹く

カッターの重きオールを整へて漕ぎ進めかしよき風吹かむ

江田島は松の木多し海戦にゆきてうせにし人らも多し

教育参考館にて

特攻の戦死者記名追ひて読めば胸痛きかもみ名つきずして

大和武蔵ことごと敗れ戦死者のみたまらひしと国守るらむ

つはものら並びし庭のいまも広く松亭々と圍むすがしき

（二回目の作品）

合宿終り別るる時し亡き友のやさしきゑまひ顕ちて消えざる

亡き人のみたまのまもりに江田島の合宿終るとしみみ思ふも

歌を詠みかたみに直しよき歌の生るるよろこび得たるうれしさ

思ふこと思うがまゝにうたふわれら日本民族立ち直るべき

雨雲の低くたたずむこの朝相別れゆく時を迎へぬ

第三十二班

企画・デザイン工房Ｂａｎｕｐ

諏訪田　尚　子

先人の血にそまりたる衣服見て我は忘れじ大和魂

福岡コミュニティ放送　内　野　美佐緒

秋かをる風に吹かれつラジオ体操思はず出る声年を感じる

二日の合宿を終えて

歴史にふれ知る見る知識ひとつふえ我が心とむき合ひつつ

感じ見る己の小ささに肩おとし何かできんと思案してみる

㈲マックス　牧　美和子

声つまらせ語る班友生きてゐる彼女の中に過去は生きてゐる

声ともに魚骨のやうにそろひゆく我らもつひに景色とならむ

ガラス越し遠く離れて江田島で自分の命の恩人に会ふ

迫りくる先人達の魂に我を忘れてただ立ち尽くす

小　菅　紀　子

カッター体験について

友と語らひ研修所にたどりつくなり指導員の厳しき声に心ちぢまむ

指導員の「シャツをいれろ」のかけ声にさらに萎縮し不安がつのる

きつくなりやめたいと思ふも「そーれ」の声にこぎつづけたら指の皮むける

こぎ続け無心になると不思議にも海が静かで
緑がきれい
汗をかき爽快な気持ちで桟橋につくと指導員
さへやさしく見える

教育参考館を見学して

ただ御国守らんとして征きし御姿に胸つまり
きて涙とまらず

湯亭こんや常務取締役　青　砥　潤　子

同胞の御蔭で私生かされしこの世の役目何か
と探す
夫と娘と集ふ合宿亡き父に繋がる縁をしみ
じみと思ふ

小浜保育所　古　賀　若　奈

兵の残せし思ひしのびつつ我が身の生き様
考へ給ふ

小浜保育所　河原畑　めぐみ

話し合ひ見学をしてふと思ふなんて狭い私の
世界
これからは勇気を出して話したい私の事もい
ろんな事も
もう少し興味を持って歩きたいそして知りた
いこの国のこと

社会福祉法人日の出保育所

濱　岡　典　代

森の中聴こえてくるは蝉の声しばし忘るる日
常の音

国民文化研究会

国民文化研究会理事長　上　村　和　男

カッターの練習を見る

はじめてのこぎてあまたの友どちにきびしく
説きぬ海のこはさを
カッターは右へ左へ進みつゝこぎいでにけり
なれぬこぎ手に

中西先生のご講義

あやまてる国の姿を説き給ふ師の御言葉の心
にしみく

（二回目の作品）

教育参考館に

日清日露の戦ひに生命ささげし先達の心を偲
び今日を生きなむ

大東亜戦争沖縄に散りし大田中將を偲ぶ

如何ならむ戦さになるを知りつゝも国民思ひ
いでたつ大人は
沖縄が最后のとりでとなるらむと思ふ心を偲
ぶは悲し
ひたすらに沖縄の民思ひつゝ戦ひつきぬを、
しさ偲ぶ
最後まで電信うちぬ県民のしあはせ頼むとの
ちのちまでも
打ち終へて自らの生命絶ち給ふ雄々しき大人
を偲びまつるも

拓殖大学総長　小田村　四　郎

カッター訓練を見送る

眞夏日の照りつけるなかカッターを漕ぎ出で
んとて集ふ若きら
指導員の言葉鋭く裂帛の号令一下皆駈け出し
つ
沖さして漕ぎゆくカッター見送りつつ吹き来
る風にしばしいこひぬ
江田島の入江の海は静かにて漕ぎゆく舟もさ
はやかに見ゆ

教育参考館見学

大君のみことかしこみいでゆきしますらを多
くつひにかへらず
いでゆきてかへることなきみいくさにい向ふ
みふみの悲しきろかも
後に続く国民をかたく信じつつ別れを告げし
みふみの数々
読むたびに涙し流るますらをがいまはのきは
にのこせしふみは
くだちゆく世を正すべしみたまらがまもりつ
ぎ来しみおやの国ぞ
悔しきやみいくさにいのち永らへてかかる祖

国のさまを見むとは
みたまたちの鎮まり給ふ靖國のみやしろをな
みするたくらみのあり
夢にだも思はざりけむみたまらはこれをたく
らむ政府出づとは
国のもとゐこぼたむとするたくらみを砕かで
やまじみたま仰ぎて

（二回目の作品）

慰霊祭

雷鳴の遠くとどろき稲妻の光る中にてみまつ
り進む
天がけるみたまに誓ふ祭文にわれらの思ひ奏
しまつれり
雨やみてみたままつりのおごそかに行ひ得し
を嬉しと思ふ

元九州造形短期大学教授　小　柳　陽太郎

カッター訓練

この一瞬もゆるかせにせじと裂帛の気合こも
れる号令すがし
力あふるゝ号令の声久々に心にしみてうれし
かりけり
断乎たることばによりて衰へし大和心もよみ
がへるべし
号令の声にはげまされ若きらの動きもさらに
力こもりつ
友らのカッター去りし海辺に真夏日のいそゝ
ぐ光たゞにまぶしき

（二回目の作品）

藤新君の体験発表

聞くまゝに心あふるゝすぎし日の思ひくさぐ
さ胸にうかびて
「体験発表」の真義をここに示しまして君語
りゆく熱きおもひを
「君父に順はず」といふ太子のみ言葉のみお
もひをしみじみと思ふ君がことばに
かくも厚き君がみこころ偲び得ですぎし我が
身をたゞ恥づるかな

新日本製鉄㈱　今　林　腎　郁

江田島合宿

宇品なる港を出ててフェリーはも江田島さし
て進みゆくなり
江田島と聞けばたちまち海原のにほひ漂ふ心
地するなり
ま青なる空を映して瀬戸内のなぎたる海を
フェリーは行くも

（二回目の作品）

きびしかることうち続く世にありて今年の集
ひも今終らむす
四十あまり七つといへばはるかなり集ひの重
みをしみみに思ふ
若きらに志（こころ）をつなぐがおのが身の努めと信
じて更に進まむ

大日本園芸㈱　磯　貝　保　博

カッター体験教室に残念ながら参加でき
ずも

号令と命令口調で指導すと教官の声凛とひび
けり
たちまちに姿勢を正す心地してカッター教室
始まりにけり
きびきびと指示する言葉平明で理解しやすく
心にひびく
ゆるゆると蛇行はしつも沖さしてボートの姿
小さくなりぬ
沖方ゆ掛声合はせえいえいとボートは浜に近
づきにけり
こぎ終へし満足感にみちみちて友らの顔のか
がやきてみゆ

（二回目の作品）

参考館見学

かねてよりおもひし見学今日ありて心おどり
つ入口に立つ
まき紙に筆勢強く書きしるす手紙つきつぎ読
みすすみゆく

国民文化研究会事務局長　山　口　秀　範

教育参考館にて

腰かがめガラスに顔寄せ一心に遺書たどり行く若き友あり
年頃も同じ若さで一命をみ国に捧げしいまはのみ書
桜花の散りゆく様になぞらへて遺せるみ歌に胸迫り来る
遠近にみ書読みゆく人ありて広き館内物音もなし

（二回目の作品）

最終日全体意見発表

とつとつと語る口調も面ざしも父君うつしの折田君立つ
初めての合宿の中で歌詠みて心開けし思ひ述べゆく
国文研に関はる仕事はひとつだにおろそかにせぬ父なりと言ふ
この集ひに取り組むうちに自から父の姿の見え初めしとふ
今しがたこの地離れし父君に聞かせたかりしこの一言を
来む年も合宿支ふる父君にかけがへもなき励まし賜びつ

閉会式後に折田父君を見出でて

去りぬると思ひしものをここに在て御子息のことば聴き得しか友は
控え目に笑まひし口元そこにまた父子のきづなを見出しにけり

三女蝶子（大学四年）のこと

半ば強ひて誘ひし娘も笑顔見せねぎらひの言葉我にかけ来る
娘三人順に生ひ立ち末の子の学生参加もこの夏限りに
吾子も皆も四泊五日をひたむきに過ごせしことのしみじみ嬉し

防衛庁技官　山　根　　清

ともどもと検討重ねし合宿の開催やうやく迎ふるうれしさ
御友らの努力実りてあまたなる参加者迎へて合宿始まるも

慰霊祭にて

稲妻の後方きらめく斎庭にて友ら集ひて御魂祭りす
雨やみてかがり火ゆらめく斎庭にて御魂祭りはいま始まりぬ
己が身を国に捧げし益良男の御魂集ひて天降り給ふか

（二回目の作品）

江田島合宿終了の際

初めなる江田島合宿思ひたち友らと検討重ねし一年余
いまは亡き師の君偲びつ合宿の伝統守らんとつとめ来し先輩
みともらのみなさけかがふり江田島に合宿教室無事に終はりぬ

住友電工㈱　布　瀬　雅　義

寶遣合宿運営委員長

合宿の始まる前にはやすでに疲れの色濃き友の面輪は
開会の挨拶に立つ我が友は凛と立ちをり疲れも見せず
よく透る低き声にて参加者の一人一人に語りゆくなり
ゆっくりと静かに語る我が友の御声心に沁み入るがごと

山口県立下松高等学校教諭

寶　遣　矢太郎

この一年を

江田島に友ら来たれといのりつつ準備しきたりこのひとときを
広やかなる道ともにゆくたぬしさの何ぞうれしき友よ来たれと
まがごとのおきるたびわがこころくじけなさけなきかもとひとりなげきぬ
友しらの力めぐまれまがひとつひとつのりこえけふをむかへつ

慰霊祭前後

戦艦大和の号砲とどろくとき戸外は雨となり
稲妻光る
江田島に眠るみたまら号砲に哭きて天降り光
りますらむ
みまつりのゆにはにそぼふる雨あやし仕へま
つることかなはざるかと
あなふしぎみまつりのとき近づけば雨やや細
りてつひにやみたり
空とほく稲妻光ればなきみたまゆにはに帰る
と思はざるべしや
みまつりををへてややあれば近き空稲妻光り
て雷音とどろく

（二回目の作品）

鳥生指揮班長を
不眠不休大粒の汗垂らしつつ座りて次なる展
開にらむ
緊張のきはみなるかも息乱れ次々きたる難問
にらむ

栃木県立足利図書館　青　野　英　海

カッター指導をみて
教官のほゆるが如き大声は若人達の心に響く
炎天下若人達は教官の指示を仰ぎてカッター
漕ぎたり

参考館で

国のため命を捧げし人々に感謝の念は湧きあ
がりけり

千代田漢方クリニック　桑　田　崇　秀

広島陸軍幼年学校跡に立ちて
祖父が教へ父が学びし学びやと思へば懐しさ
胸に込み上ぐ
日清（にっしん）のいくさに傷負い傷癒えてたぎる血潮も
て生徒ら教へしか

江田島の合宿で
われも亦死すべき命長らへてここ江田島に若
きらと語る
江田島の心を胸に枉（まが）つ世を正せ若人と切に思
ふも

元浄土真宗本願寺派僧侶　岡　棟　猛

丘に登りて
汗をふき急なる坂路歩（ほ）一歩杖をたよりに登り
始めぬ
休み台木陰に見えてひと休み腰かけ辺（あたり）を見
廻しはじめぬ
木の間より古鷹山の頂きのわづかに見えたり
しばし眺むる
名にし負ふ古鷹山の頂きをわれも見たりとし
かと眺むる
朝夕に古鷹山を仰ぎつゝ技を磨きしつはもの
しのびぬ

油蟬しき鳴く声のきこえきて我にかへれば風
のすゞしき

（二回目の作品）

教育参考館を訪ねて
江田島は海のつはものの霊地なりわれらここ
に訪ねきたりぬ
國のためいのちさゝげしつはもののいさをを
とはに伝へむと思ふ

元高千穂商科大教授　名越二荒之助

六十年の昔はるかに偲ばるゝもののふ集ひし
江田島の海
この地より雄叫びあげて征でゆきしますらを
の姿忘れえぬかも
祖国への忠節尽せしもののふのあまた生れし
この地江田島

（二回目の作品）

六十年の年月を経て埋れ火は再び燃えそむ五
日の集ひに
日の本のメッカなるかな英霊は生きてゐませ
り江田島の里

㈱田町ビル　島　津　正　數

病得て遠出かなはぬ我が兄が講義せし地に今
朝は我来る
班員は「皮膚を守れ」と我が手にも陽やけ止
めクリームを渡し給へり

他人にも心を配る班員の素直な仕草に嬉しく
思ほゆ
我が義父もかつて漕ぎたるカッターを我も漕
がむと江田島に来る
腰痛の持病あれども構はぬとカッター班に我
は入れり
いくばくの心配あれども若きらとカッターを
漕ぐは気持ちよきかな
小柳先生の「明治の精神」を聞きて
品格も名誉も備ふる人達と彼の地のニュース
は伝へしといふ
外国に初めて渡りし人なれど立居振舞堂々と
あり
条約の批准に出かけし武士は気宇宏大にして
頼もしきかな
いかならむ時にありても頼もしき人といはれ
る人になりたし
山根先生の「教育参考館紹介」を聞きて
部下を想ひ部下を大事にせし人の話を聞けば
胸せまり来る
それぞれの持場を守りて散華せし艇員の姿を
偲びまつりぬ
教育参考館にて
艇長の遺文を読めばひとりでに御手を合はせ
て拝み居りけり

亜細亜大学　平　槇　明　人

高速船より小用港に下りて
久々に瀬戸の磯の香馨しくすめる島の氣甘
しとぞ思ふ
参考館御紹介を拝聴して
防人が遺し給ひぬことのはは時をへだてて心
打つなり
（二回目の作品）
君がため散れと詠まれし母君の心偲べば涙あ
ふるる

国立療養所福岡東病院　小　柳　左　門

祖父を憶ふ
我が祖父がかって学びし江田島に父は語りき
明治の精神
日露戦のただ中にありわが祖父はこの江田島
に学び励みき
迫りくるロシア艦隊に胸いためつつ勉学にい
そしみし祖父を憶ひつ
遠泳をして鍛へしとふ江田島の青き海原窓の
外に見ゆ
父と子と三代そろひて江田島に学ぶを祖父も
喜びますらむ

日章工業㈱　藤　新　成　信

広島港にてフェリーに乗りし折
デッキより青き海原ながむれば高速艇の追ひ
こしてゆく
十年前みともとともに船のりてこの江田島に
来しことのあり
御国守るひとらたたふる記念館を訪らひしこ
との思ひださるる
教育参考館を見学して
親の為またはらからを守るため命ささげし人
らたふとし
今の世のマスコミのせぬ国守るまことの思ひ
あふるるごとし
国のため命ささげし人々のたくせし思ひに応
へざらめや
（二回目の作品）
朝まだき起きいだしければ入海の江田島湾は
雨にけぶりぬ

亜細亜大学　東中野　修　道

夕立の激しく降りきてかすみ立つ雑木林や江
田島の海
海軍の兵学校に学びたる健児の過せし往時偲
ばる
降りしきる夕立のなかにも訓練に励みてあり
けむ国守るため

関亜熱化学　天　本　和　馬

開会前の受付けにて
待つほどに友らバスにて集ひ来ぬ合宿教室今

始まりぬ
にこやかに並びいる人らの中ほどになつかしき顔見えてうれしき
親しげに声をかけ来しその人は卒業以来のなつかしき友
その声を聞けばたちまち遠き日に共に学びし事の浮び来
若き日のおもかげ残すそのおもはに我の知り得ぬことも多かり

（二回目の作品）

合宿を終へて

やり損じたことの数々浮び来て申し訳なさにはぢる思ひす
この思ひ次に伝へむ務めあり文に残して記録に留めん

国民文化研究会　茅　野　輝　章

様々に思ひを寄せし合宿にあまた友らの集ふはうれし
運営に資料作りに追はれつつも友らの研修の様偲ばるる
笑みたたふ友らの顔に運営の疲れもしばしやすらぐ覚ゆ

福岡県立朝倉高等学校　黒　岩　真　一

中西先生の御講義を受けて

日の本に生れし誇りの戻りゆくきざし見つけて嬉しかりけり

○

ありし日の我が海軍の雄々しさの戻る日願ひて参考館を出づ

（二回目の作品）

指揮班長鳥生秀雄兄に

体調の勝れぬ身ながら汗だくになりて指揮とる君を案ぜり
一年にわたる準備の労も間もなく終らむ君ぞ頑張れ

合宿を終へて

小雨止みややに晴れゆく瀬戸内の海ゆ吹き来る風心地よし

徳山大学　中　村　道　陽

宇品港に参加者を出迎へに行きし折

電車より降りくる人を見つめては合宿参加の人かと思ふ
案内を手にする我れをひとびとは何の事かと見つめて過ぐる
尋ね来し友の言葉に我が胸は嬉しき思ひこみあぐるかな

㈲岡山商事　岡　山　英　一

御講義中、特攻隊員について語られしビデオを操作しつつ

死ぬること少しも怖くはなかりしがさびしくなりしとふ出撃前に
我征きしとふしらせをきかば母さんは涙さるらむをみなにてあれば
我征かざれば老いたる父すら銃を手に戦に向かふ世にならむとふ
そを避けて弟妹をも守るため我は征くなり悲しむなかれと
幾度も母さん母さんと呼びかけてつひに征きしかますらをのこらは
終演の時せまりきてこのビデオ止めむとすれば止め難きかも

福岡市立大原小学校　奈　田　明　憲

合宿参加の道中、エスカレーターに乗りたるおばあちゃんと男の子（中学生）を見て

祖母の背を守るが如き孫の腕やさしき男の子に心安らぐ

（二回目の作品）

教育参考館で特攻隊員の遺書を見て

桜咲く春には会ひに来ませよと残せし遺書に胸迫りくる

自営業　北　村　公　一

（二回目の作品）

朝のつどひにて配布する短歌の栞を岡山兄と深夜製作す

物差しの目盛り読む間にまなぶたは閉ぢ来て
気付けば眠らんとす
友もまた眠さこらへて紙を切る姿を励みに我
れも切りゆく
他の友は皆休みたり我れここで寝れば栞は出
来合へずぞよ
かくほどに眠気とたたかひ物事を為したるこ
とはつひぞなかりき

岡山県立高校講師　横畑雄基

江田島へ向かふ途中のフェリーにて

さはやかな瀬戸内の風を受けながらフェリー
は一路江田島に向かふ
江田島に集ひし仲間とまたここで共に学べる
事ぞうれしき

カッター研修の様子を近くの海岸で見て

遠くから元気な友の掛け声が耳に入れど姿が
見えぬ
掛け声の徐々に大きく聞こゆれば広き海原に
友らを見つける
一人一人の顔までは良く見えねども声の様子
で楽しさ伝はる
我もあのカッターの上で仲間らと共にオール
を漕げればと想ふ

慰霊祭

雨風(あめかぜ)が激しくなれば玄関で指揮班の皆が頭を
抱へる
「しばらくもすれば止むよ」と理事長が笑顔
で語れば皆も和める
慰霊祭の予定時刻に近づけは徐々に雨風(あめかぜ)は弱
くなりたる
御霊らを鎮める中で雷の激しさだけが大きく
なりぬ
慰霊祭を終へて帰れば雨風(あめかぜ)が再び強くなるは
不思議なり

（二回目の作品）

九工大の多賀君

同郷の後輩がこの合宿に参加するなり友の紹
介で
彼はまた我の教育実習の教へ子であると分か
れば驚く
志を同じくできる同郷の仲間があると想へば
うれし

松江市立津田小学校　三島　明

カッター研修

いざ我もカッター乗らむと張り切れど指揮班
の努めありてえ乗られず
教官の厳しき声と研修生の「はい」の響きに
胸高鳴るも
我もまたライフジャケット着用し列に加はり
こぎ出だしたし
いざ発(た)たんとす一人一人に飲み物を渡しつ
胸内(むなぬち)でさらばさらばと言ふ
だんだんと海の彼方にこぎ出でて小さくなり
てやがてえ見えず
カッターゆタラップ渡り上陸する皆汗かけど
さはやかに見ゆ
カッターに乗れぬはただに口惜しも皆の健闘
は我も嬉しや
指揮班を我の努めと思ひ定めて喜び感謝しま
こと尽くさむ

事務局

開智高等学校　飯島仁史

アルバイト汗水垂らして得るものは達成感と
賃金三万円

世田谷学園高　粕谷知生

はじめてのアルバイトして仕事の苦はじめて
わかり親の苦労知る

東山中学　山根誠一

アルバイト汗水たらし働いて苦労したあげく
足をいためた

銀河学院高等学校　紹田仁美

アルバイトその日その夜疲れはて夢さえ見ず
にぐっすりとねた

岡大附属中学校　安　田　美　帆

人々の色々な考へ聞いてゆき自分自身をつくってゆこう

国文研　有　本　和香子

船からのながめ
照りわたる陽光に面映ゆ水面はおだやかに恵たたへてあるらむ
山は山に海は海に輝ける数多の小島のいますをかしさ

中西先生のご講義
だんだんと熱こもりたる御声をばげに有難く果報と思ふ

ご講義後参加者と雑談をして
それぞれに心興れる御様子に受くる心の柔さをおもふ

（二回目の作品）

合宿を顧て
とつとつと連ねられたる言葉の数珠常に触りてゆめくもらせまじ

見学者

㈱アクティオ　松　本　　巌

研修を涼しくさせるクーラーを守る我身は只暑きかな

合宿地に寄せられた歌

舞岡八幡宮宮司　關　　正　臣

合宿に寄せて（八・七）

国柄を只守らむと集ひてしどちの祈りを継ぎ給ひてよ

（江田島兵学校の生活を偲びつつ。どちは達、同志。）

あとがき

吹く風にも秋の深まりが感じられる今日この頃ですが、皆さんにはその後如何お過ごしでせうか。広島県「国立・江田島青年の家」で共に学び、語り合った「合宿教室」から早や三ヶ月が過ぎようとしてをります。このたびやうやくこの「感想文集」を皆さんのお手許にお届け出来る運びになりました。この「感想文集」は、「合宿教室」の最後に〝走り書き〟していただいた感想文と短歌を編集したものです。

編集作業は、まづ、それぞれの班の班長又は班付の方々（国民文化研究会会員）に、感想文と第二回の創作短歌を添削・編集していただくことから始めました。

皆さんお一人お一人の心のこもった文章・短歌を丹念に読み返し、編集してゆくことは、神経を使ひ、時間のかかる作業ではありますが、皆さんの生々しい言葉にお一人お一人の感動を偲ぶことのできる心楽しい一時です。それぞれの方々に編集していただいた編集方針は以下の通りです。

㈠「感想文」について

原文をできるだけそのまま掲載することを基本方針としました。ただし、ページ数の関係で執筆者のお心のうちが最も強く表現されてゐると思はれるところを摘録しました。文意の不明瞭なところは、執筆者のお気持ちを辿りながら、原文のニュアンスが損なはれないやう慎重に加筆しました。なほ、「かなづかひ」については、原文を尊重し、漢字及び文法上の誤りについては訂正してをります。

㈡「短歌」について

合宿では二回にわたって短歌をつくりましたが、第一回のものは、全参加者それぞれ一首以上を洩れなく巻末の「短歌詠草」のところに収めました。また、この感想文の執筆の折につくっていただいた第二回の短歌は、それぞれの感想文の末尾に入れました。感想文と同じく、文法上の誤り等は訂正いたしました。

この「感想文集」作成のためには、班長および班付の方々以外にも多くの方々の御協力を得ました。お忙しいお仕事、学業の中で、休日や勤務終了後の時間をさいてご協力いただきました山本茂夫、磯貝保博、小柳志乃夫、山根清、茅野輝章、安岡一成、澤部和道、小林由香利、野村亮、大橋広和、穴井宏明、青砥敬子の各氏に心から御礼申し上げます。

最後に、この「感想文集」の「あらまし」作成および第一回目の短歌の編集にご尽力いただいた国民文化研究会会員の諸氏に厚く御礼申し上げます。またカメラ・レポートの写真は中尾国博さん及び福岡鉄平さんにお世話になりました。

いろいろな方々のご努力によって出来上った「感想文集」を、ご精読下さるやう切願します。

読み進むにつれて、「合宿教室」の四泊五日間の様々な感動が鮮明に甦ってくる事と思ひます。三ヶ月前に得た感動を単なる「思ひ出」に終らせることなく、起居を共にした真に語りうる友との交流に、また新たな学問の求道への出発点とされるやう切に願ってをります。なほ、ご精読後には、是非とも班長や班付の方々、班友に一筆御便りを差し上げていただきたくお願ひ申し上げます。

（北浜　道　記）

〔資料〕
第四十七回〝合宿教室（江田島）〟感想文集
非売品
平成十四年十月三十日発行
編集兼発行者
社団法人　国民文化研究会
理事長　上村和男
編集委員　北浜　道・原川　猛雄
山本　茂夫・池松　伸典
東京都渋谷区東一―十三―一―四〇二号
〒一五〇―〇〇一一
電話　〇三―五四六八―六二三〇
FAX　〇三―五四六八―一四七〇